

徳島大学国際センター

紀 要

第5号

年 報

第6号

2009年度

巻頭言

国際センター長 細井和雄

平成 20 年 12 月に徳島大学国際センターが発足してから、この 3 月で 1 年 5 ヶ月目を迎えることとなります。新センター発足以来、学内のみならず、学外関係諸機関並びに地域の皆さまから多大なるご支援とご指導・ご鞭撻を頂きました。この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

国際センターでは、旧留学生センターからの改組に伴い、まず、これまでの、留学生の日本語教育、相談指導が中心であった体制から、大学の国際化を推進するための業務も遂行できる体制へ、センター内の組織を刷新致しました。すなわち、①国際展開を推進するための業務を担う「交流部門」、②従来の留学生センターが行っていた、留学生の受け入れ支援などの業務と留学生教育（日本語教育、相談・指導支援）を担当する「教育・支援部門」、③センターの情報発信を担当する「文書広報室」という 2 部門、1 室を設けました。

また、新たに国際センター内に国際関係業務に関して高い専門性を有する「国際プランナー」を配置し、本学の国際化を強力に推進できるように致しました。さらに、大学の国際化は、国際センター一部局のみが努力しても実現は困難であるとの認識の下、部局の意識の向上を図り、連携を推進する目的で、各学部から国際センターに「協力教員」を派遣して頂くことに致しました。これにより、各教員の担当業務が明確化され、国際化戦略を遂行するための基盤が整備されました。今後は国際プランナー、協力教員、国際センター教員、国際課の 4 者が協力することで、全学的に教育・研究の国際化を推進したいと考えています。

さて、今年度実施した特筆すべき事業としましては、「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」の設立をあげることができます。これは、平成 20 年度、「徳島大学卒業留学生同窓会（中国）」の設立に引き続き実施されたものです。その他、「アジア人財資金構想事業」、「サマースクール・サマープログラム」支援、4 回シリーズで行った「日本語教育シンポジウム」、「国際交流サロン」など、様々な国際交流活動を実施致しました。今年度の活動の詳細に関しましては、本冊子「年報」の部に記載しておりますので参照頂ければ幸いと存じます。

なお、本冊子には、「年報」だけでなく、国際センター教員の研究成果も「紀要」に掲載しております。是非、ご一読頂き、各教員の研究成果に対してご指導・ご意見を頂ければ幸いと存じます。

2009 年 3 月

第一部

国際センター紀要

第5号

第一部 国際センター 紀要第5号

目次

就職支援のためのプロジェクト・ワーク……………	1
－アジア人財コースPBL型授業－	
大石寧子・遠藤かおり（徳島大学国際センター）	
交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える（2）……………	7
－2009年武漢・上海訪問交流研修－	
Gehrtz-三隅友子・金成海（徳島大学国際センター）	
大学英語教育における Task-Based Instruction (TBI) の可能性と限界……………	15
－学習方略形成と自己調整学習を目指した授業に関する一考察－	
坂田浩（徳島大学国際センター）・福田スティーブ（徳島大学共通教育センター）	
共創型学習活動の可能性……………	24
－国際交流の扉を拓く－	
橋本智・Gehrtz-三隅友子・金成海（徳島大学国際センター）	
新しい映像教材の開発を目指して……………	34
－学習者の専門に配慮した授業の試み－	
橋本智・山木真理子・古賀美千留（徳島大学国際センター）	
インターンシップの取り組み……………	44
－アジア人財資金構想における役割－	
村上和義・橋本智（徳島大学国際センター）	

就職支援のためのプロジェクト・ワーク

－アジア人財コースPBL型授業－

大石寧子

Oishi, Yasuko

遠藤かおり

ENDO, Kaori

徳島大学国際センター

要旨：

アジア人財コース2年目にプロジェクト・ベースド・ラーニング型の授業を実施した。就職支援のプロジェクトワークを進めていく中でどのように組み立て、学生たちがどのように係っていったかを検証するとともに今後への課題を含め、考察していきたい。

キーワード：PBL、プロジェクトワーク、現地視察、プレストーミング、企画書作成、プレゼンテーション

1. はじめに

徳島大学では経済産業省と文部科学省による「アジア人財資金構想」高度実践留學生育成事業に、2008年度から参画し、5名の留學生でコースタイトルを「アジア人財コース」としてスタートした。

本コースは一週間に3日、1.5コマで、使用教材は、本事業の共通カリキュラムを軸にし、新聞等の生教材や市販教材を副教材として取り込み、行われた。

1年目は、内定を取り付けることを第一目標とし、1) ビジネス日本語教育2) 日本ビジネス教育3) インターンシップを3本柱として行った。①ビジネス日本語教育ではエントリーシート の書き方②面接の受け方や③グループディスカッションの方法④自己アピール⑤ビジネスマナー等をテーマとして行った。また2) 日本ビジネス教育では、①業界分析②日本社会における企業文化③社会人基礎力等について学んだ。③インターンシップに関しては、5名とも県内大手企業で2週間実施し、そのうち3人は、そのほかに中小企業で1日のインターンシップをおこなった。

2年目に入り、前期にPBL型授業を行った。ここでのPBLは、就職支援の一環としてのプロジェクトワークとした。

2. PBL型授業とは

2.1 授業の構成と学生の係り方

この授業の位置づけとして、全員就職する学生を対象とし、これまでに身につけた語学知識のみならず、日本企業で如何に業務を遂行していくかを念頭に置き、業務の流れを知り、そこで発生するであろう問題に対してどう対処していくのか、またその過程での事務的作業を経験するというコンセプトで、企画立案からプレ

ゼンテーションまでの流れをシュミレーションし、行った。

次に学生は全員を社員とみなし、学生の中からリーダーを決め、以後はリーダーの下で行われ、教員はファシリテーターに従事した。

テーマとして取り上げたのは「持続可能な地域おこし・地域を売り込む」で、新商品の企画、その販売を目的に以下の流れですすめた。

2.2 調査

2.2.1 テーマ決め

プロジェクトワークを開始する3、4ヶ月前に、NHK2009年秋放送予定の朝の連続テレビ小説の舞台に徳島県南部の「美波町」が選ばれたことが発表された。それによる徳島県地元への経済効果をにらんだ上でテーマとして「地域宣伝」を取り上げ、さらに絞って「地域宣伝用ウェブサイトの作り方」とした。そこで徳島県について何をどこまで知っているかお互いの情報、知識量を確認し合う時間をもった。学生によっては4、5年在住してはいてもあまり徳島に関して情報がないことがわかったため地域に関する基礎的な情報・知識をまず取得することにした。

2.2.2 基礎情報収集

2.2.2.1 徳島県全体に関する情報収集

どんな情報を調査するのかについてリーダーを中心に項目を選び出した。①徳島県の人口、②歴史③地理④交通⑤産業⑥観光地⑦伝統芸能⑧宿泊所⑨名産品⑩有名なもの(所、人)などを取り上げ担当を決めて調査をした。各自、書籍、インターネット、市・県観光協会発行のパンフレットなどを用い、担当者が調べたものを授業の中で発表し、書記担当の学生が板書して、それを共有した。しかしそれでも余りある情報をすべて発表しようとする学生や反対に観光客用の簡易パンフレットに書いてあるこ

としか用意できていないものなど基礎情報としては十分でないため、適宜教員が促した。

2.2.2 教員による補充項目

正確なデータが盛り込まれている「県の観光客動態・動向について現状把握及び分析」と「徳島県観光戦略局発行の「平成20年版徳島県観光調査報告書」を用いて現状を読み解き、分析をした。調査内容は以下のとおりである。

①徳島県観光動態調査

観光客の入込状況と消費額

外国人入込客数状況

②徳島県観光動向調査

観光客の観光旅行の指向と実態調査

上記の内容はかなり多くのグラフや表を用いており、2人あるいは3人で数箇所を担当し、調査内容を読み込んだ。各自が担当の調査内容を発表し、お互いに情報を共有することで、グループの基礎知識とした。また、日々の生活情報、季節の催し、地域の新たな取り組みの様子などは新聞から適宜紹介をした。このような授業を進めていくうち、学生から実際に行ったことがないため実感がわからない、一度県南部を見る必要があるのではという意見が出てきた。そこでどこへ行き、何を見るかについて議論し、視察をすることを決定した。

2.2.3 現地視察

訪問地は、県南部の海陽町と美波町とし、学生たちで決めたその目的は、①外国人の目から県南部を見てみる②自然・町の様子を見る③宿泊地・食事処・アクセス等を知る④新たな発見をすることとなった。

各町役場の担当者に事前に連絡し、徳島からバスで向かった。海陽町は産業観光課課長の案内を受け、竹が島を見学し、マリンジャムや、遊戯施設等の説明を受け、現地の自然にふれた。事前に決めた担当の写真係り、ビデオ係りが様子を撮影し、記録に残した。美波町では日和佐町役場の担当者と薬王寺・うみがめ館「カレッタ」で説明を受けた。道中、宿泊所、食事処なども目にし、交通の便の把握も行った。この視察に向け事前にアンケートを準備作成して持参した。訪問時に学生から各関係者に回答をお願いし、後に結果を集計し、リーダーがそれをまとめて、発表した。

地域を県南部に絞ったのは、徳島県に関する調査分析作業を通して読み取れた県南部への観光客の客足の少なさと対西部には甚だ劣ることからであった。今回NHKの朝の連続ドラマから全国的に注目を集める地域を実際に見ることを目的とし、その後の企画へとつなげた。

2.2.4 外部講師による講義

PBLを進めるにつれて、自分たちの調査だけでは限界があり、知りえない部分、また専門性を要する項目もあることがわかってきた。このことから、外部から講師を招き、講義を受けることとした。この取り組みに関しては、教員が講師の専攻をし、そのいくつかの交渉はアジア人財キャリアコーディネータの協力を仰いだ。外部講師による内容は以下のようである。

- ①旅行会社による「該当地域を含む商品開発及び現状」
- ②県職員（アジア人財地域連絡会メンバー）による「地方財政の仕組みと地域おこしの事例」
- ③学内教員による「日本の開発途上国援助政策－村起こし等」
- ④中小企業による「海外戦略－東アジア進出」で、上記の講義を聴くにあたって当日の対応等は学生が執り行った。

2.3 プレーンストーミング

徳島県の現状について基礎調査をし、知識を得る傍ら、外部講師による専門分野の学習も進め、徐々に目指すものを意識し始めたところで具体的な内容を話し合うことにした。プロジェクトワーク開始当初の「地域宣伝」のテーマは、「県南観光ツアー」の企画に目が向けられていたが、話し合いがすすむにつれてテーマは変更され、「観光地を宣伝する画期的なウェブサイトの作り方の紹介」に変わっていった。これは、新しい視点での観光ツアーの開発が、県南について十分な知識を持たない留学生には困難であること、またアジア人財参加学生の中にウェブサイトの入力方法の研究者がいたため、今回の「宣伝用ウェブサイトの作り方」(以下新商品)にたどり着いた。プレーンストーミングの中で以下のことが絞られていった。

- ・ ねらいは何か。
- ・ 何を売るのか。
- ・ 対象はだれか。
- ・ どうすれば興味を引くか。

など自分たちができること、できないこと等を具体的にあげ、各自が思い描いていることを表現した。ここではプレーンストーミングという方法を取ることで、思いついたことをすばやく相手に伝える訓練の一つとして、習得された。

2.4 企画会議

2.4.1 企画書の作成に関して

リーダーを中心に新商品の発表をプレゼンテーションときめ、プレゼンテーションまでの日程について会議をもち、今後どう進めていけばいいか予定を立て、企画書を作成した。リーダーが役割を決めて話し合い、その結果以下のように取り決め、実施した。

- 1) 各自の担当の振り分け（重複して担当）

- ①新商品の「ウェブサイトの作り方」を見せるための材料としての中身を作成（2名）
- ②その材料となる「地域の売り」を県南のセールスポイントの項目ごとに作成（全員）
- ③新商品の宣伝用キャッチコピー作成（2名）
- ④プレゼンテーションの案内状・チラシ作成・発送・回収（3名）
- ⑤プレゼンテーション（全員）

2) 企画書の作成

各自が担当した項目についてこれまでに話し合ったことを元にして企画書の作成を始めたが、ネットの丸写しや担当項目の趣旨が理解できていない箇所も見られた。また単なる意見や発想のみであり、事実に基づいた根拠が述べられていないなどデータや調査から得られる様々な裏づけがなく、具体的なプランがないといったものであった。そこでプロジェクトを書類として提出する際のポイントは何か、説得性のある内容を吟味し記述するすべを深め、身に着けられるよう授業が進められた。

3) 予定表

プレゼンテーションまでの日程を具体的に割り振りこれ以降は宣伝をはじめ準備に終始した。流れを具体化することで意欲が見られた。以下表-1はその予定表である。

6/29~7/31

回	日		活動内容	その他・備考
1	6/29	月	企画会議① ・日程決め ・企画書作成 ・編集会議①	
2	7/2	木	講義準備 ・ODAについて	7/3の準備
3	7/3	金	講義 「日本の開発途上国援助政策－村起こし等」	外部講師による講義 「政府の取り組み ODA 開発援助」
4	7/6	月	企画会議② ・編集会議② ・チラシ (キャッチコピー) ・案内状①	
5	7/9	木	企画会議③ ・編集会議③ ・チラシ ・案内状②	

6	7/10	金	企画会議④ ・編集会議④ ・案内状③ ・チラシ完成	
7	7/13	月	企画会議⑤ ・案内状完成発送 ・発表準備	
8	7/16	木	企画会議⑥ ・発表準備	
9	7/17	金	講義準備	7/23の準備
10	7/23	木	講義 「海外戦略－東アジア新出」	外部講師による講義 「中小企業による取り組み」
11	7/24	金	企画会議⑦ ・発表準備	
12	7/27	月	プレ・リハーサル	
13	7/28	火	プレゼンテーション当日	
14	7/31	金	振り返り	

表-1

4) 作業報告

始まってみると上記日程にあるように順調に進むわけではなく遅れがみられ始め、学生間に間に合わないのではといった不安感がみられた。プレゼンテーション予定日の変更ということも選択肢に上げ、話し合いがもたれたが、予定が延びればその後の学位論文作成の時期と重なり、かなり難しくなること、またドラマの放送は秋であり、ぜひ始まる前に新商品の紹介をしたいという強い希望もあったことから、リーダーはなんとしても当初の予定日に実行と言う考えを示し、皆をまとめ統率力を発揮した。そこで作業の進み具合をきちんと把握し、現状を全員が理解するよう、報告書を書くことを促した。それにより、作業の遅れ、現時点での問題点その解決に向けての予定の変更等プレゼンテーション当日までの段取りを考えることにつながった。

2.4.2 各担当の作業

各担当の作業は以下のようである。

1) 新商品のウェブサイトのの中身作成

ウェブサイト研究者を中心に枠を作り、それに材料となる中身の担当者が地域の「売り」となる県南の地理、交通、産業、観光地、伝統芸能、宿泊所、名産品等をのせていったが、ここで使用する映像、音響に関して著作権の問題が浮上し、担当者は勿論であるが、全員が考えることとなった。その結果、現地視察をした際に撮影したビデオ、写真等を用い、音響効果もコ

ピーライトフリーのサイトから使用することにした。この頃には協力体制もしっかりできて、自ら週末を利用して連絡を取り合い作業をしたり、授業後時間の許す範囲で居残り、相談したりする光景が見られた。

2) 宣伝用キャッチコピー

担当者をリーダーに全員にキャッチコピーを募集し、適切なものを絞り込んだ。活発な発想で多くの候補があがり、それぞれが苦心を重ねた。以下にその例をとりあげる。

- ・癒したかったら、徳島南部へ
- ・お疲れさま、大自然を抱き合おう
- ・美波でみなみへ
- ・あなたを待ってる徳島南部
- ・山・水・人・神
- ・回帰
- ・とくしま。美。味。景。
- ・新しい海南

最終的に「あなたを待ってる徳島南部」となった。

3) 案内状・チラシ作成

リーダーが案内状を作成し、その案内状に添える宣伝用配付チラシを他の2名が作成。案内状に関しては、自分たちの言葉で表現できておらず、決まり文句を並べたものに過ぎなかった。チラシのほうは視察で訪れた県南の自然を取り入れ、キャッチコピーを付けたものを作成した。レイアウトや映像の選択は担当者が協力して行った。同時に配付先を選定し一覧表を作成するものの、学生の選んだ先は県内の観光業や自治体をすべてピックアップしたもので、なんら意図を持って選定したものではなかったため、教員が送付先を選ぶ際のポイントを指導した。今回学生はこの新商品にかなりの自信を持っており、多くの分野で使用可能となるため興味を示すはずだと見込み、大勢の人に売り込みたいと考えていたが、教員側で本格的な売込みを目指したプレゼンテーションではあるものの、アジア人財としての大学の授業であることを理解してもらい、無制限の来場はやめにした。そしてどういう視点で送付先を選定するかを話し合った。案内状文面を全員で見直し、再検討した。十分に準備ができていのかどうか、自分たちの取り組みを厳粛に受け止めアジア人財とは、趣旨は、目指す目的は、どんなことをしているのか、これまでにどんなことをしてきたか等確認した。そしてこのプロジェクトワークの取り組みを紹介する文面を案内状に付け加えることにした。

4) 案内状送付先

担当者3名が県と市関係25件、旅行会社、

国際交流協会、観光局等50件あまりを案内状送付先としてリストアップしたが、送付先が絞られていなかったため、上記のことを踏まえ今一度どういった方面で売り込みをしたいのかについて再考を促した結果、外部講師、視察を行った先は必須とし、その他を絞り込み、最終的に30件ほどに案内状を送付した。友人・知人には各自が声をかけることにした。また、これに付随する一連の事務作業を実際に行ってみていろいろなことを知ることとなった。様々な点で手際の悪さが目立ち、どう進めるのか、必要なことは何かを考える機会となった。例えば、準備としてはがき、切手は最大どのくらい必要なのか、案内状の宛名(組織の誰に宛てるか)がわからない、組織の長か、どの地位の方に送ればいいのか、などである。教員からの指示を待つ気配があったため、自発的に判断し解決を見つけ、また手配するよう促した。今回の経験で実務の数々が身についたと思われる。

2.5 プレゼンテーション実施

関係者及び学外関係者を招待し、新商品を売るためのプレゼンテーションを行った。

2.5.1 準備

1) 会場設営

予定会場が使えず、教員が大学側と折衝した。しかし、その会場では無線LANが使えなかったため該当課へ学生が赴き、事情を話し直ちに通してもらおうよう交渉した。突然で予想外の出来事に対して迅速に対処する格好の機会だったといえよう。また、立て看板、案内表示等も全員で準備をした。

2.5.2 当日の流れ

当日は、以下の流れで行った。

1. 開会の挨拶
 2. 趣旨説明
 3. 今回のサイトの特徴について(3①②に関しては、アジア人財参加学生の研究対象を利用)
 - ①アクセス入力日本語でできる
 - ・本サイトへのアクセス方法
 - ・本サイトにビデオを取り込んだ場合
 - ・本サイトに写真を取り込んだ場合
 - ・本サイトに掲示板を取り込んだ場合
 - ②1画面にJR、バス、観光地、土産物、レストラン等へ入る入口を載せる(今回の7ｲﾝ7)
 - ③日本語版と中国語版の選択ができる(今回の7ｲﾝ7)
 - ④掲示板がある(今回の7ｲﾝ7)
 - ⑤外国人の視点からみたお勧め
 4. まとめ、今後の課題
- ここまでを30分で行い、その後質疑応答とし

た。

2.5.3 当日の様子

受付、資料配布等は学生が行った。リーダーが総司会を務め、後のメンバーは、担当部分を発表した。本番では緊張のせいか言い間違い、発音、イントネーションにおける母語の干渉等日本語の未熟な部分が随時みられた。これらのことは、実際の会社においては、核心となる新商品の紹介やプロジェクトの説明などの場面では致命的になる恐れがある。伝えなければならない内容をきちんと伝えることの重要性を考えさせられた一場面であった。この後の質疑応答ではその結果が歴然と現れた。この発表で重要な「売り」の「サイトの特徴」ではサイト研究者の商品は優れているものの、それはサイト研究者のみが知りえていることであり、当の学生は日本語力の低さからか、十分伝えきれていなかった。しかしながら、その半面プレゼンテーションの時点では十分にチームワークが整ってきており、語学力がある者が発表全体を通してカバーするなどプロジェクトワークの成果もみて取れた。

2.6 振り返り

2.6.1 PBLを通しての学生の取り組み

まず開始が5月18日であり、プレゼンテーションまでの期間が短かったのはかなり厳しいものがあったことは否めない。しかし、学生はこのプロジェクトワークにかなり関心を持ち、意気込んでいたわりには、この2年目が学位論文提出の年となり学生がその準備に入ったこともあり、学生自身もこの両面での迷いがみられ、そのため学生と教員の間にも温度差が生じた。開始後しばらく、切迫感が感じられなかった。このことが後の日程にも影響を与えたと考えられる。次にプロジェクトワークを進めるにあたり、リーダーを中心に展開していくことになったが、協力体制に問題が見られた。当初から担当者制とし、それぞれの持分を担うのだが各自、担当者としての責務を十分に果たせていないことから作業が滞るということが起きた。例えば、①調査が不十分②サイトの丸写し、といった調査法に関する点である。これは学生に時間がなく調査に十分な時間を割けなかったという理由もあろうが、責務の軽視が少し見られた。また、情報の共有という点では、伝達、コミュニケーション上での問題が残った。つまり、これは日本語レベルの問題である。自分が考えていることを的確に伝えられないがゆえに、誤解が生じた。しかしながら、活発な意見の対立や白熱した討論をうまく、しかるべき方向へ導いていけたのはリーダーの統率力

が優れていたことによるところが大きかったのではないかと思われる。現地視察を行ってからは、拍車がかかり、全員が一丸となって取り組み始めた様子が顕著に見られた。また、予定の遅れを取り戻す協力体制も見られた。

2.6.2 PBLで生じたある事例

今回のPBLで生じた問題を一件紹介したい。プロジェクトワークでのウェブサイトについて相談が必要となった。大学、U-learningセンター、国際センター（以下センターとする）のサーバーを使用するに当たっては、セキュリティの問題があり、使用が難しかったため、研究をしている学生が個人でもっているサーバーを提供するとの申請があった。しかし大学の正式な講座で個人のものに頼ってもいいかという問題が浮上した。万一ウイルスをはじめ問題が生じた場合、責任はどうなるのかなど検討の必要があるだろうということでセンターにおいて他の教員にも相談し、センターとしての了承を取ることが必要になった。学生としては、今まで整えられた環境で、自由に研究を重ねてきたが、社会に出れば何事も自ら整えなければならず、全てが順調に進むのではなく、必ずそれを拒む壁が存在するということを実感した事例の1つとなったであろう。

3. まとめ

3.1 学生の反省

学生から出た反省点は次のようであった。

- 1) プロジェクトワーク全体の反省
 - ・発表の内容が不十分だった。期待されていることと違っていた。
 - ・ウェブサイトの研究者は自身が開発したサイトの入力方法に自信があり、発表当日も入場料を取り、サイトもオークションで売ろうと思っていた。しかし、現実とは全く違っていて、材料としての中身にはコメントがあったがウェブサイトそのものにはコメントがなかった。それはサイトに対しての説明や「売り」への工夫が不十分だったからだと考えられる。技術、内容、デザインなど改良しなければならない。発表者の説明ではアクセス方法がよくわからなかったためあまりサイトに注目されなかったため、予想と違った。またウェブサイトの説明では準備していたことと違うことを言い、日本語がわかりにくくなった。このサイトに興味がある人は連絡先を聞いてくれると思っていたが、一人もいなかった。
 - ・発表までの準備時間が十分でなかった。アンケート調査結果も分析し、発表の中に入れた

ほうがよかった。

- ・プロジェクトワークの手順の知識（企画、調査、発表）が不十分だった。それにコミュニケーションも十分でなかった。
- ・プロジェクトワークのテーマをもっと早く、はっきり決めたほうが良かった。時間を無駄にしたと思う。5人のアイデア、意見がなかなか統一されなかった。統一するのが早ければ、全員の力で早くから頑張れたと思う。
- ・サイトの準備ももっと早くからしておくべきだった。やり直しが多くなるので、いいものを作ろうと思えば、早く作り、何度も改良することが必要になる。全体として、準備不足、まとまりの悪さが反省である。
- ・練習時には全然覚えていなかったが、発表を目前にすると覚えられ、発表のできはよかったと思う。
- ・プロジェクトワークで何を学んだか、今後この経験をどう生かすか考えたい。

2) 来場者の意見に対する学生の反省

- ・南部のサイトなのに、紹介されているのが、数箇所のみなので、南部紹介とは言えないのではないか。もっとたくさんの場所を紹介して欲しかった、という意見に対しては現地調査が1回だけだったので、紹介できる場所が少なかった。何度か調査したほうが良いと思う。しかし、1回の調査で交通の便が悪いということも分かり、これも南部への旅行者が少ないという原因の一つだと理解した。
- ・おみやげについて詳しく聞きたかったという声があり、おみやげの写真を見せるタイミングが悪かったからだが、あとで見せたので、わかってもらえたのではないか。現地調査で実際に買い、自分で食べてみて紹介すべきだった。

3.2 おわりに

今回のプレゼンテーションは新商品の企画販売という点でかなり問題点を残し成功とは言いがたい。「売り」はウェブサイトの入力方法なのに材料となる中身についての質問に対し何が今回の「売り」で何が添え物かが説明・説得できず、振り返り時にも材料としての中身についての反省が出ていたのがその例でもあろう。しかしながらPBL型授業の目的からは成功だったといえよう。この取り組みを通し、学生は大学での研究と違い、ものを企画し、売るといったプロジェクトを前にして、何が必要かを知ることとなった。そのために欠かせない現状把握、ニーズ調査、等の十分な事前調査に重きがおかれていなかった点や一人ひとりに任された責務、連携や協力体制の必要性、また

自分たちが意図していることが伝わらなかったことへの課題等、十分に学んだのではないだろうか。彼らの反省点からも伺えるように、それは大きな収穫であり、次へのステップとなる。

【参考文献】

- 大石寧子他（2008）「徳島大学における留学生の支援プログラム—アジア人財資金構想」徳島大学国際センター紀要第4号 25 - 30
アジア人財共通カリキュラム「仕事を知る—企業活動シミュレーション」（2008）AOTS
佐々木直彦（2003）「キャリアの教科書」PHP研究所

交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える（２）

—2009年武漢・上海訪問交流研修—

Gehrtz-三隅友子
Gehrtz-Misumi, Tomoko

金成海
Jin, Cheng-Hai

徳島大学国際センター

要旨：

国際センターは、2009年3月の8日間、徳島大学の学部生12名と引率教員2名（筆者の金及びGehrtz-三隅）によって武漢・上海訪問交流研修を実施した。訪問先は本学の協定校である武漢大学と本学卒業生が日本語教員として勤務する東華大学（上海）及び上海財経大学であり、各大学の日本語学科の学生と交流を行った。研修の目的は、①日本語を学ぶ中国人学生とのコミュニケーションを通して友達になること②中国を訪問し実際に異文化を体験し理解すること、そして参加者が各自の自由に目的を立てそれを実践することであった。中国での交流会に備えて中国語会話（自己紹介と簡単な会話）と中国語の歌を本学の留学生の指導により練習し、同時にコミュニケーションのトレーニングから日本語劇「ひのきとひなげし（宮澤賢治作）」を準備した。三大学との交流研修終了後のレポートさらに約1年後（2010年2月）の参加者からのコメントをもとに本研修を振り返る。参加者の気づきや学びを確認することによって、これからの訪問研修の意義や可能性を考える。

キーワード：交流、演劇、異文化理解、コミュニケーション、日本語

1. はじめに

国際センターは、その業務として留学生の受け入れ支援等の業務と留学生教育（日本語教育、相談・指導支援）また日本人学生の海外留学を支援する活動を行っている（注1）。この日本人学生への支援活動として、2009年3月8日から15日の日程で武漢・上海訪問交流研修を実施した。日本人学生を指直接導する機会が少ない国際センターが中心となり、中国語（全学共通教育センター）及び総合科学部の教員と協力して本研修旅行を企画し実施にいたった。また訪問先の三大学の教員との連携も必須であった。学内での事前研修から中国での交流活動と見学を中心とした8日間は、参加者及び実施者に何をもたらしたのか、本稿では研修を振り返るとともに、日本人学生に対する「国際化」への働きかけとして今後の取り組みを考察する。

2. 研修の概要

2.1 背景

日本人学生の海外留学は、二つに分けられる。学部学生が語学学習を目的とし海外の大学の語学センター等で学ぶものと、専門分野の研究を進めるため特定の学科や指導教官のもとに入るものである。徳島大学では受け入れる留学生は多く、一方で送り出す日本人学生の数が少ないというアンバランスな状況が続いている。留学による留年の可能性や本学学生の語学力不足等からの理由も考えられる。提携大学との関係を含め、真の国際化を考える際には、やは

り日本人学生への留学を支援することが必要となろう。長期の留学を決意する以前に徳島大学の学生が異文化に触れる機会は非常に少ない。語学を担当する教員からもまた学生からも短期で安心して外国文化に触れる機会を設定してほしいという要望を受け、今回の訪問研修を企画した。これまでには、2006年3月の武漢大学研修を、2007年10月には武漢大学から徳島大学への訪問研修を実施しており、特に武漢大学とは訪問研修の実績がある（注2）。さらに、2008年11月には本学の留学生同窓会が上海で開催され、協定大学以外に卒業生が勤める大学との交流の可能性もあったことが加えられ、武漢と上海という二ヶ所が訪問先となった。

2.2 目的

協定校の武漢大学及び卒業生が日本語学科の教員である東華大学及び上海財経大学を訪問し、日本語学科の学生と交流することと、中国（武漢と上海）という異文化を実際に体験することであった。また各自の目的もそれぞれに明確にして臨むことを課した。よりよい交流を図るために、事前研修として①中国語会話②中国語の歌（朋友）③日本語劇の三つを練習した。

2.3 参加者・関係者

○徳島大学

日本人学生は総合科学部1年5名、2年6名、3年1名の12名、引率教員2名

○武漢大学 日本語学科学生 1-4年

- 東華大学 日本語学科学生 2年
- 上海財経大学 日本語学科学生 1-4年

2.4 研修に至るまでの流れ

2006年から今回に至るまでは資料1を参照のこと。

3. 準備期間及び事前研修に関して

3.1 経緯

2008年度の国際センターの活動として参加学生への奨学金(補助金として10名分)を国際教育研究交流資金より獲得した。さらに11月には、全学共通教育の中国語の授業の際、各担当教員から本研修旅行への参加を呼びかけた。1月めでに12名の応募があり旅行参加者を決定した。全員が総合科学部の学生ではあったが、中国語を学んだことの無い者も含まれていたため、ビザ等の準備とともに参加者の連帯感を作るためにも事前研修を行った。

3.2 中国語

中国語会話は、自己紹介を中心として挨拶と買い物のことばそして数字といったごく基本的なことを学習した。当時武漢大学から交換留学生として来日していた二人の学生に指導を依頼した。また交流会で中国人学生と中国語で歌える歌として「朋友」を選び歌唱指導もお願いした。2月の19日から出発直前の3月3日までに3回、各3時間ずつ計9時間行った。

3.3 演劇

さらにコミュニケーショントレーニングとして外部講師に依頼し、身体的コミュニケーション(こえとからだとかかわりを互いに体験学習する)(注3)から、日本語学科の学生に披露するための演劇練習を行った。この目的は、上述のように募集した学生に一つのものを作るという連帯感を持ってもらうこと、さらに言語以外の表現の方法を認識し、自分のコミュニケーションをもう一度振り返ってもらうことの二つであった。

この研修には、日本語研修コース(集中的に日本語を学ぶ)の初級留学生にも参加を促し、いろいろな国の人と接して身体ほぐしを行うことも体験してもらった。これは2月13-15日の3日間の9時~5時まで計20時間実施した。その後、出発までに歌と数回の演劇の練習を行った。

3.4 事前研修の評価

中国語と歌は別にして、アンケートからは中

国に行くためにどうしてこんなことをするのかという疑問がわいた者や、都合がつかず全部に参加できずに消化不良を起こした者もいたようである。大学の授業では体験しない内容であったことから戸惑ったことが読み取れる。満足度に関しては、「普通」とした三人の「劇の練習は楽しかった。少しずつ人と上手く接せればよいなと思った」「初めてだったのでまだなじめずついていくのに必死だったから」「最初は何か新しいことをやっているようで楽しかったけどだんだんよくわからなくなってきました」、理由からも困惑さがうかがえる。

印象に残ったことや最後の感想から、各自がそれぞれのコメントを寄せている。普段の身体が非常に緊張した状態にあること、自分の声の出し方を客観的に見つめることができたこと、他者との接触や距離感がコミュニケーションにとって重要であること、さらに全身を使って表現する劇を体験したことである。

4. 訪問研修—中国にて

2009年3月8日~15日(8日間)の日程等の詳細は資料2を参照のこと。

海外旅行が初めての学生がほとんどで非常に緊張していたことが伺えた。武漢大学到着までに、忘れ物等の小さいトラブルも起こったが、武漢大学の先生方と学生の空港での出迎えが緊張をほぐした。夜の交流会に続き翌日の日本語授業参加と交流会での演劇上演そして互いの出し物の披露で交流が深まっていった。3日目は本学学生の希望により3つのグループに分かれて市内見学を実施した。学生同士の視点で同じものを見て意見を交わす貴重な体験であった。武漢大学の学生は最後まできちんと対応し宿舍まで送り届けてくれた。翌日はお世話になった2年生の日本語授業にて12名が別れの挨拶をした、その際全員が涙ぐんだときには引率の教員も驚いた。この中には2009年10月から来日する交換留学生も参加していた。

その後上海に移動してホテル到着後、東華大学の学生が上海市内を案内してくれた。武漢とは違った都会の様子に驚き、またより注意して行動しなければならないことが促された。翌日は、郊外の広大なキャンパス見学と再び交流会を実施した。日本語劇は2回目となり自信を持った態度で演じられた。また要望により阿波踊りも披露した。夜は豫園をやはりグループに分かれて、東華大学の学生に案内をお願いした。

6日目には上海市内の財経大学を訪問し、1年生から4年生の有志との交流会を実施した。中国語の自己紹介も上手になり、中国人の学生

から拍手をもらった。この夜は雑技団見学、翌日は一日上海市内見学を財経大学の学生と教員に案内をお願いした。

いずれの大学も交換会での挨拶や全体スケジュールの調整等から公式の訪問客として受け入れてくださったことが、大学を代表してきているという意識を確認させたように思えた。

8日間で3つの大学との交流はかなりスケジュール的に厳しかったが、学生同士がおしゃべりをしながらの見学そして買い物といった交流ができた。上海から関西空港へそして徳島に無事到着し15日に研修旅行を終了することができた。

5. 研修を終えて

5.1 報告書から (2009年3月)

帰国後3月中に感想文を課し内部資料として報告書を作成している(2009年4月)。研修を終えての自由な感想と一枚の写真をA4サイズに収めたレポート集である。12名のそれぞれの思いや気づきが記されているが、以下にまとめた。

「研修を終えて」

- 1 中国の学生の対応に深く感謝する
 - 2 反日感情に対する不安がなくなった
 - 3 中国に対する危険なイメージがなくなった
 - 4 中国人の友達ができた
 - 5 留学したい気持ちになった
 - 6 日本のよさを確認した
 - 7 中国人学生の日本語力(能力)の高さ
 - 8 もっと中国語を勉強して話したい
 - 9 自分を伝える方法について考えた
 - 10 帰国後、周囲の人に報道からではない自分のイメージを伝えることができた
 - 11 日本と中国の経済関係やこれからについて考えた
- (2009年4月報告書より、筆者が抜粋)

以上のように感想文からはそれぞれの気づきがあったことがうかがえる。また選ばれた写真の多くは一番親しくなった学生との笑顔のものであった。

5.2 訪問大学の学生から (上海財経大学)

帰国後、財経大学から送られた7名(1年生5名4年生2名)の学生のコメントを資料3に原文のまま掲示する。

歌と劇と会話による交流が楽しかったことや日本語を学ぶ学生にも刺激があったことがうかがえる。

5.3 1年を経過して (2010年2月参加者)

研修後、学生サポーターとして国際センターの事業に参加する学生もいるが、接触は多くなく1年を経過しての自由な感想をメールにて依頼した。現在留学中の1名をのぞいて11名からは次のような意見があった。

「中国へ行って今思うこと」

- ・行ってよかった = 全員
日本では出来ない体験・もっと中国や中国人と付き合いたい・中国が身近になった
 - ・4月からの留学予定している = 1名
 - ・語学学習に関しての意欲が出た、学習方法を考えるようになった
 - ・自信を持って一步を踏み出す勇気を得た
 - ・挑戦することが大事
 - ・メディア報道より目で確かめたい
 - ・本格的な留学以外に海外に行く機会がやはりほしい
 - ・学内でももっと留学生との交流をしたい
- (2010年2月感想より、筆者が抜粋)

また現在留学中の学生は次のように述べている。

「中国武漢・上海への研修旅行から1年が経とうとしている。研修旅行の半年後、私は訪問した武漢大学で留学することになった。去年の3月に訪問し、日本語学科の学生たちと交流したことは今でも記憶に新しい。9月から留学すると決まった時、その交流で知り合った友人たちにまた会えるという楽しさと、その時見ることのできなかつた武漢の街並みや大学内が、また見られるという楽しみが大きかった。実際約半年ぶりに再会し話をしたときは、半年前には分からなかつたことや、時間の関係で聞けなかつたことをたくさん聞くことができた。また、その友人を通じて新たな友人と知り合うこともでき、もし研修旅行で知り合うことができていなかつたら経験できていなかつたであろうことが多くあつた。武漢大学内も時間の関係で見られなかつた場所なども案内してもらい、改めて勉強する環境が整っていると感じた。自習室がいくつもあつて、いつ行っても席がほとんど埋まっており、その光景を見るたび中国の学生がどれほど勉強に対して熱心か実感させられる。

私が留学先を武漢大学に選んだのは徳島大学と協定校ということもあつたが、一度訪れたことがあり知り合いがいるからという理由もあつた。中でも研修旅行で知り合えた一人の学生は3月に武漢の空港で別れる際、その時はなぜだか分からなかつたがこの人とはまた必ず会えるよ

うな気がしていたことを覚えている。実際数ヵ月後に留学が決まり、あの時感じたことは気のせいではなかったと思い大変うれしく思った。

もともと留学希望のあった私だったがこの研修旅行でさらに留学したいという気持ちが大きくなり、結果的に留学できることとなった。もし参加していなければここまで気持ちが大きくなることはなかったと思うし、武漢大学に留学することはなかったかもしれない。その点でも研修旅行に参加してよかったと心から感じている。」

5.4 研修を振り返って (教員)

今回の研修を共に企画、学生の募集さらに旅行社及びパスポートの手配等の雑務を一手に引き受けてくださった学部教員の一人にコメントをお願いした。

「語学を学んでもそれが何の意味を持つのか今一つ実感がわからない、これが大方の学生の率直な感想だろう。これに対して徳島と武漢大学の学生が相互に訪問した意味は大きかったと思われる。まず彼ら自身がはじめてその語学能力が実際に生かされる機会を得たこと、異なる文化を実感したことが挙げられる。帰国後何人かは中国へ長期留学や将来的に中国関係の仕事に就くことを希望するようになった。加えて彼ら自身がクラスの中で生き生きとした姿を見せることにより、『来年は自分も行ってみよう』と他の学生が思うようになったのは、思わぬ副産物であった。近年は学生の『何となく外国嫌い』が増えているように見受けられるが、実際の交流が取り持たれることで、そのような思い込みはあつという間に消えてしまうのである。今後とも同年代の若者同士がふれあう機会を提供することは、両校のみならず両国にとっても意義深い。国際センターのご尽力に感謝するとともに、これからも同様の企画が続けられることを切に願う。」

6. 考察 (今後の課題)

現段階で課題と思われる点を以下に挙げる。

① さらなる学生の能力開発

短期であれ中国語練習や対話の際の学生の取り組みに対する意欲が感じられた。今回は日本語による交流が主であったが、今後は学んだ外国語がよりコミュニケーションや自己表現につながるような教育体制の整備が必要である。

② プログラムとしての研修旅行の実施

留学の一步手前として、また広く異文化を体験するための旅行プログラムを望む声が

聞かれた。学生の留学や交流に対するニーズをとりつつ、計画的な「国際化」教育プログラムの確立が望まれる。

③ 全学的な取り組みへ

個人が自由に出かける旅行との違いは意図的な学習としての活動が組み込まれていることと成果を公表することにある。そして大学の「国際化」において重要な活動であることを特に大学内での認知度を高める必要がある。それゆえに大学からの財政的な補助制度や教育活動としての単位化の可能性もあるだろう。今回は国際センターの試行であったが、自ずと学内のどの部局がどのように実施していくのかも明らかにしていかなければならないだろう。

むすびにかえて

参加した学生にとって 8 日間の中国訪問と、その準備のための研修はどんな意味があったのだろう。長い人生の中での非常に小さい一つの出来事あるいは、またある人には大きく人生を変えるきっかけとなるのかもしれない。

大きな可能性を秘めた若い世代に対して、その能力を引き出すことが我々大学教員の使命の一つであるとすれば、これからの多文化社会を考えた人材作りの取り組みとして、日本人学生を外国へ送り出し、体験学習によって国際的な感覚を大学時代に培ってもらうことも大切と考える。

筆者の一人である三隅は、4 年前の 3 月初めて武漢を訪れた際、日本語学科の学生 117 名に日本語の授業を行った。学生らの熱心に日本語を学ぶ姿を見、また留学研修等のニーズ調査を行った結果、翌年武漢大学から徳島大学への受け入れ研修を実施した。これは武漢大学の学生の日本語及び日本文化体験の研修であった。そして今回再び訪問研修を実施できた。どれも日本語教育を主軸としたものである。

この間に実際に中国と日本を移動した学生が 35 名、自国で交流会に関わった学生は数え切れない。ほぼ 1 年おきの交流は、1 年生の時に交流会での体験を持ち、3 年生で実際に中国訪問することになったり、またその逆であったり、先輩から後輩へバトンを次々渡していくように思える。武漢大学そして徳島大学、今回同窓会を通して加わった二つの大学の関係の中でまた脈々と絆ができていく。

大学、また教師、そして学生間の友好関係、すなわち今回の研修の目的である「朋友になろう」の心をいつまでも持ち続け「対話」を礎とした交流プログラムを、学内の連携をとりつつ

実現していきたい。

謝辞 訪問先の武漢大学李国勝先生をはじめとする日本語学科の先生方、本学卒業生の東華大学王蕾先生、上海財経大学の米英麗先生にはスケジュール調整及び本学学生への配慮等本当にお世話になりました。また三大学の日本語学科の学生の皆さんには心からのもてなしをいただきました、関係各位に深く感謝します。

注

注1 2008年12月に留学生センターから国際センターに改組となり、従来の留学生教育と日本人学生の留学支援に加えて、大学の国際展開を推進するために各部局と連携した活動さらに地域の国際化支援等の業務を新たに加えた。

注2 両研修に関しては参考文献1と2を参照のこと。過去の研修の流れは資料1参照のこと。

注3 国際センターでは美馬市と連携して「まほろば国際プロジェクト」と称する演劇を通じたコミュニケーション教育活動を行っている。徳島大学では2006年に実施、美馬市オデオン座では2007年から3年間留学生と地域の日本人で作る演劇をプロジェクトワークとして行っている。これまでと同様に指導を野口三千三体操と竹内敏晴のからだことばのレッスンの専門家に依頼した。身体的コミュニケーションと教育に関しては別稿を準備している。

【参考文献】

Gehrtz 三隅友子・曾我部朋子(2006)「日本語教育を通じた大学間の協同・連携を考える～2006年武漢大学出張報告～」徳島大学留学生センター紀要第2号,pp31-49

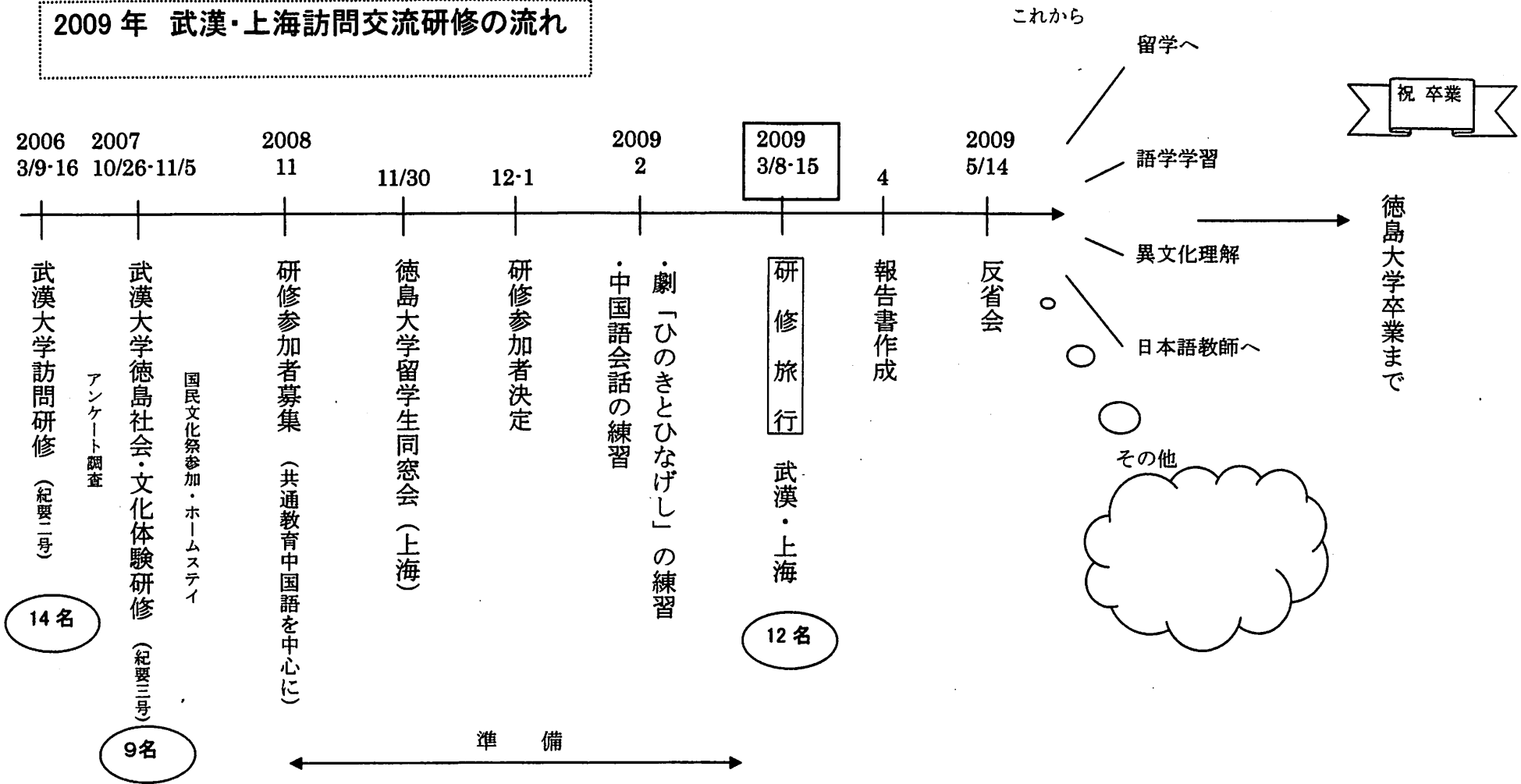
Gehrtz 三隅友子(2007)「交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える～2007年武漢大学徳島社会・文化体験研修～」徳島大学留学生センター紀要第3号,pp49-66



上海財経大学

資料 1

2009年 武漢・上海訪問交流研修の流れ



資料2**武漢・上海訪問研修日程**

月日	3/8(日)	3/9(月)	3/10(火)	3/11(水)	3/12(木)	3/13(金)	3/14(土)	3/15(日)
午前	徳島 5:05 関空→上海	武漢大学 授業参加	武漢大学 学生交流	最後の会 武漢出発	東華大学 日本語劇	財経大学 交流	上海観光 学生交流	上海 関空
午後	上海→武漢 武漢大学着	交流会 日本語劇		武漢→上海 市内見学		交流会 日本語劇	上海博物館等 学生交流	関空着 徳島へ
夜	歓迎会 武漢泊	武漢泊	武漢泊	上海見学 上海泊	豫園 上海泊	雑技団見学 上海泊	豫園 上海泊	

資料3**交流会の感想 上海財経大学 日本語学科の学生から**

<一年生①>

先しゆうの交流会は私はいへんたのしかです。その日本の大学生はとても親切な人ですが、私達はたくさん話しました。彼女たちは私たちに土産をくれました。私達は「時の流れに身をまかせ」という歌を歌いました。彼らは「友達」を歌いました。そして彼女たちの中国語の発音は綺麗です。時間は限られていましたが、大変楽しかったです！日本の大学生はとてもフレンドリーでした。私は参加させていただき、非常にうれしく思いますが、日本の大学生の友達と交流するチャンスを期待しています。よろしく願います！

<一年生②>

日本の徳島大学の先生と学生たちは先週の金曜日に、私たちの上海経済大学に来てくださいました。その日寒かったうえに、雨が降っていました。日本の皆様はとても薄着で、心配しました。午後三時ごろ、私たちは一緒にパーティーを開きました。日本の学生はいろいろな出し物、たとえば合唱、芝居を演じました。芝居は、川の俳優は椅子の上に立っていました、とても高いついでしたね。日本の皆様は中国語の歌「友達」を歌いました。発音はきれいでした。私たちも歌を歌いました。私はピアノを弾いて、曹さんは二胡で、沈さんは日本語の歌「始まりの風」を歌いました、みんなは拍手して私たちを励ました。楽しかった金曜日でした。私は日本のお菓子が食べられ、新しい友達に出会うことができました。私も将来日本へ行きたいと思いました。

<一年生③>

先週は、金曜日に日本の友達がきました。あの日は、雨がふっていましたから、とても寒かったです。それでも、皆は楽しかったです。午後一時ごろ私たちは教室へ行きました。日本の先生と学生はもう教室にいました。先生たちの挨拶がおわって、交流会に入りました。日本からの学生と話をしました。日本語はあまり上手ではありませんでしたので、なかなか通じませんでした。でも、面白かったです。三時ごろ、パーティーが始まりました。日本の学生は芝居して、その内容は私たち一年生には難しかったです。それから、私たち三人は、ピアノと二胡をして、歌を歌いました。皆は楽しかったです。五時ごろ、パーティーが終わりました、少疲れましたが、しかし、楽しかったです。

<一年生④>

徳島大学の学生はとても親切な人で、いろいろなプレゼントとお菓子と名刺をくれました。彼らの合唱や踊りやコントなどは本当に素晴らしかったです。とても賑やかなパーティーでした。私は日本語があまり上手ではありませんでしたので、自分の言いたいことをよく伝えることができなかつたと思います。今度の交流会は本場の日本語に触れることができました。そして、日本人の意外な一面を知ることができました。日本の大学生と友達になりました。とても楽しかったです！日本へ行きたくなりました。

<一年生⑤>

先週の金曜日、徳島大学の学生たちといろいろ交流したので、楽しい時間を過ごすことができました。徳島大学の学生たちはすばらしいパフォーマンスをしてくれました。私の日本語はあまり上手ではなかつたので、その芝居の内容が理解できなかつたです。残念でした。でも、彼らの努力の姿を見て、感心しました！私も歌を一曲歌いました。あまり準備できなかつたので、ちょっと間違えたところもありましたが、気持ちだけ伝えればよいとおもいました。一番うれしいのは、新しい友達に出会えたこと

です。みんなとても親切な人で、すぐ友達になりました。いろいろ歓談しましたので、時間も忘れしました。二人の友達にメールを送りました。今はもう返事をもらいました。

今回の交流会は本当に素晴らしいものだと思います！またチャンスがあれば、ぜひ参加したいです。

<四年生⑥>

徳島大学の学生と一緒に楽しい二日間を過ごしました。最初に会ったのは△さんです。彼女の手作りの名刺が印象的です。後は、○さんなどと話をしました。彼女たちが優しくて、いろいろな日本語を教えてくださいました。ここと違うのは皆面白いバイトをしています。今度、留学生ではなくて、日本の大学の大学生と付きあって、彼らを前より良く分かるようになった。今度、こういうチャンスを望みます。

<三年生⑦> より深い絆になろう

徳島大学から一行十四名は上海財経大学においでくださって、本当に有難いものだと思える。今回の交流会は素晴らしい経験だったと思う。それによって、双方の学生が知り合って、友人になってしまったのはおめでたいことではないか。徳島側の学生は自己紹介の場合、中国語でしたのにととても感心した。中国語が上手かどうかはともかく、そういう勇気だけが褒められたはずだ。いろいろと話した後、日本側の学生は普通自分の趣味に従って専攻を選ぶのがわかった。そういう現象は中国で少ないだろうと思う。その点だけから日本側の大学生は考え方はもっと開放的だと意識してきた。また、徳島側の大学生が好奇心と勉強好きなどは深い印象に残った。彼女らは中国語の勉強に熱心らしいと思っていた。交流会の場合にしても、食事の時にしても、買い物に至ったころにしても、できるだけ中国語で私たちと交流したことは思わなかった。彼女たちが中国の様々なことに興味を持つような気がした。これから日本側の学生と同じように精いっぱい日本語を勉強して日本のことにもっと詳しくなるように頑張っていく決意がある。そうすると、私の日本語がどどんうまくいかないわけではないだろうと思っている。徳島側の学生も願いが叶うことと確信している。もしチャンスがあったら、また見学旅行を通じて、上海財経大学と徳島大学との交流を深めていきたいと思う。一緒により深い絆を結ぶように頑張っていこう。

大学英語教育における Task-Based Instruction (TBI) の可能性と限界

—学習方略形成と自己調整学習を目指した授業に関する一考察—

坂田 浩

SAKATA, Hiroshi

徳島大学国際センター

福田 スティーブ

FUKUDA, Steve

徳島大学共通教育センター

要旨：

本稿では、英語学習における自己調整学習を指導する枠組みとして、Task-Based Instruction (TBI) を取り上げ、その可能性と限界について検討する。TBIは「タスクを基に言語学習を展開していく」という教授法であり、より自然な形で4つの技能(読む・聞く・話す・書く)を統合的に学ぶことを目的とした新たなスタイルの教授法である。最近では、TBIと学習方略指導を組み合わせることで、言語自体の学習と「学習方法」に対する指導を同時に行うことも提唱されているが、英語学習に求められる「長期的な自己調整学習を実現する」という点においては課題も残るものとなっている。本稿では、この課題に対し、学習者の長期的な自律学習を目指したメタ認知方略面での指導を提唱する。

キーワード：自己調整学習、Task-Based Instruction、英語学習、継続的自律学習

1. はじめに

一般的には、実用的な英語力を身につけるには3,000時間から5,000時間の集中的な学習が必要とされる(Odlin, 1992; 中島, 2006)。一方、日本における現行の英語授業時間数を見ると、中学校・高校での総英語授業時間数が736時間(Benesse 教育研究開発センター, 2008)、大学教養課程における英語授業時間数が約90時間(1.5時間×2回×15週×2学期)、合計約826時間となることから、上記の3,000時間には到底及んでいないことが分かる。

この不足分に対応するには、学習者が授業外に学習時間を確保し、自律的に学習を展開していくことが求められることになると思われるが、本学の状況を見る限りでは、自律的に英語学習を行っている学生はごく一部のようである。例えば、徳島大学(2008)が実施した「ラーニングライフ-第1回学生の学習に関する実態調査報告書-」を見てみると、授業の予習・復習に毎日約1時間程度の時間を割く学生が多いものの、英語の自主学習となると80%以上の学生が「何もしていない」と答えており、教師側が課題・宿題などを通して勉強しなければならない環境を作ること(つまり、学習を義務的に行わせることで)学習者の英語学習を促していることが分かる。

無論、このような「させるモード」に基づく指導方法を否定しているわけではない。宿題・課題は、学習者が授業内外における学習を円環的に展開していく上で非常に重要な役割を担っており、また学習者の立場からしても「何を

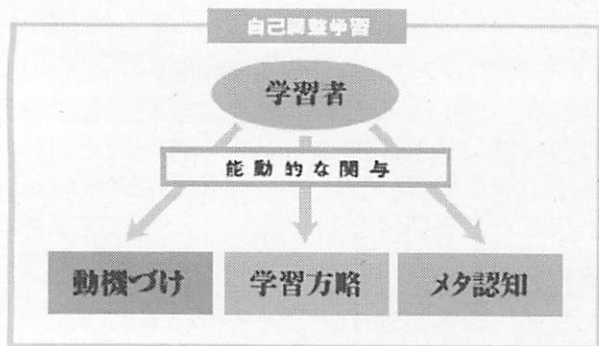
しなければならないのか」ということが具体的に提示されることから、学習を円環的に展開していくという点では、非常に効果的であると考えられるからである。

しかしながら、このような「させるモード」に基づく指導形態のみで授業を展開していくことは、学習者の自律性という点からすればあまり好ましいものではない。先にも述べたように、日本人が実用的な英語力を身につけるためには長期間にわたる学習が必要であり、そのためには、むしろ学習者自らが目標を設定し、計画を立て、その計画に沿って学習を展開し、必要に応じて学習計画や目標を評価・修正するといった継続的な自律的学習方略が重要な役割を担っていると考えられる(竹内, 2007)からである。

本稿では、①この継続的な自律学習を支援するための基本的方向性を「自己調整学習(Self-regulated Learning)」(Zimmerman, 1990)、「タスクを基にした言語指導(Task-Based Instruction: TBI)」(Nunan, 2004)という2つのキーワードを基に検討を行い、②継続的自律学習指導という観点からみたTBIの可能性と限界について議論を展開する。

自己調整学習は「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」(伊藤 & 神藤, 2003)と考えられており(図1)、計画の立案、学習のモニタリング、自己評価を含む「メタ認知」、自己効力感や自律性の認知に関わる「動機づけ」、具体的な学習方法および行動に関連する

「学習方略」に深く関わるもとされている。自己調整学習のプロセスについては後述することとするが、これら3つの要因は、いずれも継続的自律学習と深い関係にあり、学習者が自律的且つ長期的に英語学習を展開するための基盤となるものであると考えられる。



【図1 自己調整学習】(伊藤, 2008, p.15)

一方、TBIは、例えば「英語で学級新聞を作ろう」などのタスクを通して、出来るだけ自然な (Authentic) 形式で英語学習を展開していく指導法 (Nunan, 2004) であり、近年多くの研究者から注目を集めている。これまでのコミュニカティブ言語教育 (Communicative Language Teaching: CLI) では、教師側が設定する疑似的コミュニケーション場面に基き文法規則や定型表現を学ぶことが主流であったと思われるが、それだけでは学習者の中間言語発達には結びつかない (Long & Crookes, 1991; Skehan, 1998) という批判も多くなされていたことから、より現実的な学習目的 (つまりタスク) を達成するために様々な言語スキルを統合的に運用していくことで外国語学習を進めていく方向へと教授法の方針が転換されてきた。TBIはこの流れの中で注目を集めるようになってきたと推測されるが、最近ではこのTBIと学習方略指導を組み合わせることも提唱されており (Willis, 1996; Skehan, 1998; 大和, 峯石 & 廣森, 2005)、英語教育における自己調整学習指導を実践するための具体的枠組みとして注目されている。

本稿では、まず、自己調整学習とTBIに関する概説を行い、TBIの中で自己調整学習指導 (特にメタ認知方略に関する指導) がどのように展開されているかについて具体例を基に概観する。次に、現状における大学生の英語学習環境を概観し、継続的自律学習を展開する上での課題を検討する。最後に、継続的自律学習指導という観点からみたTBIの可能性と限界について考察を展開し、今後の英語授業を設計する際の

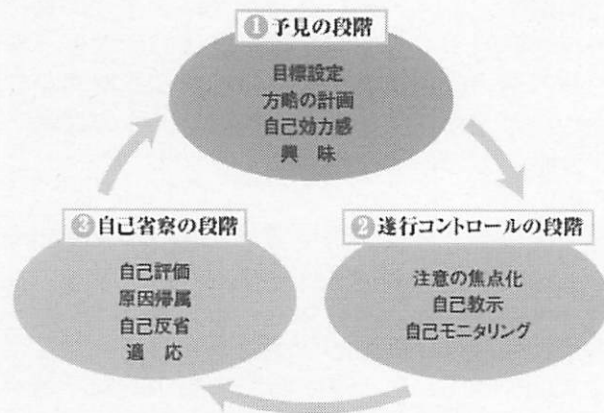
基本的方針を検討するものとする。

2. 自己調整学習とTBIについて

2.1 自己調整学習

2.1.1 自己調整学習における3つのプロセス

自己調整学習の定義ならびに基本的な構成要素は前述の通りであるが、自己調整学習をプロセスという観点から見た場合、「予見」「遂行コントロール」「自己省察」の3段階で構成される循環的な学習プロセスとして捉える事が出来る【図2】。



【図2 自己調整学習の循環プロセス】
(伊藤, 2008, p.15)

「予見の段階」は、別の言い方をすれば「学習に対する下準備の段階」であり、学習目標の設定、学習方略の計画、「これなら自分にもできる」という自己効力感や興味などが含まれるが、「遂行コントロールの段階」では、学習課題への集中、「絶対にこの課題をやるんだ」といった自己教示、どの程度学習が進んでいるかといった自己モニタリングなどの「学習を具体的に実行する際に求められる行為」が含まれる。

「自己省察の段階」では、学習に対する評価・反省、ならびに「なぜ学習が上手くいったのか (もしくはいかなかったのか)」に関する原因の振り返りを行う行為が含まれるが、これらの評価・反省・振り返りを通して学習目標や学習方略 (および計画) の修正を行うことで、学習を循環的に展開していくと考えられている。

これら一連の段階は様々な体験学習やセミナー、ワークショップなどにも応用されており、基本的にはPDS (Plan-Do-See) を教育現場に応用したモデルであると考えられるが、英語教育にも様々な点で応用できる可能性は非常に高いと思われる。

2.1.2 自己調整学習とメタ認知方略

図2に示した自己調整学習における一連の学

習段階は、先に示した「メタ認知」レベルでの学習方略（以降、メタ認知方略）と深い関わりがあり、自律した学習者として継続的に学習を展開していく上で非常に重要な役割を果たしている（Wenden, 1998; 大和, 峯石 & 廣森, 2005）と考えられている。

一般的にメタ認知方略は「認知に対する認知」もしくは「諸活動をスーパーバイザー的にモニターし制御する高次の機能」（三宮, 1996）として考えられることが多いが、その下位過程として、①効果的学習を可能とするためのメタ認知知識（例えば「学習方法に対する気づきや評価」など）、②効果的に学習を実践するためのメタ認知制御（例えば、「目標や計画を立てる」など）という2つの要因が考えられること（三宮, 1996; 大和, 峯石 & 廣森, 2005）、また、これらの要因全てが図2に示す循環プロセスに関連することを考えれば、メタ認知方略が自己調整学習（および継続的自律学習）において中核的な役割を担うことが伺える。

また、自己調整学習を継続的に展開していくためには、メタ認知方略だけでなく「学習動機をどのように維持するか」という課題も非常に重要であると考えられるが、この点に関しては、伊藤（2008）が述べているように、学習動機自体は学習者にとって見えにくいものであり、指導をする立場からしても非常に捉えどころのないものであることから、学習者にとって比較の見えやすい「学習の組み立て方・方法」（つまり、「方略」）に焦点を当てながら指導を展開することで、学習動機・意欲の向上および維持に対しても効果的な影響を与えると推察される。適切な学習方略の使用に関する指導を提供することは、「学びの見通しをよくし、学習の実感や手応えを促し、「できそうだ」という自己効力感を高め、その子どものモチベーションをさらに高めていく」（伊藤, 2008, p.17）ことに繋がると考えられ、その結果、図2に示した循環的自己調整学習を可能にする重要な原動力として作用すると考えられるのである。

学習方略指導が英語学習に対する動機に与える影響を調査した研究として、岡田（2007）を取り上げてみる。岡田（2007）は、高校生244名を対象に、「単語学習」に対する方略教授の効果に着目した研究を行っており、単語学習に対する学習方略（体制化方略）が学習動機の向上にプラスの効果を与えたと報告している。岡田（2007）の実践は、単語学習方略の中でも「接頭語・語幹・接尾語」および語源に注目したものであるが、最終的には、この単語学習方法（つまり学習方略）を中心とした授業が「学習に対

する手掛かりと見通し」を向上した結果、学習動機が高まったと分析している。課題や学習に対する具体的対処方略が分かれば、自己効力感や有能性（つまり「自分も出来る」という意識）を高めることが可能になると考えられるが、この自己効力感や有能性が高い学習者ほど、英語学習への内発的動機づけが高いことが報告されている（廣森, 2003）ことから、方略指導が循環的自己調整学習を支えるための基盤を形成するものと考えられる。

2.2 TBIとメタ認知方略

2.2.1 TBIについて

大和, 峯石 & 廣森（2005）は、これまでの英語学習方略ならびにその指導法についての広範囲にわたる研究に基づき、英語教育において自己調整学習を指導する際には、①メタ認知を重視して指導する、②タスクを組み合わせ通常の授業で指導する、③出来るだけ明示的に指導する、④学習者主体の活動の中で指導する、という4つの指針を提案している。メタ認知方略を中心に指導を展開することの重要性は前項でも述べたとおりであるが、「指導の明示性」や「学習者の主体性養成」という観点から見れば、学習方略の指導は学習者を主体とした授業中のタスクと共に展開されるべきであり、「タスク中心の言語指導（TBI: Task-based Instruction）」と学習方略指導を組み合わせることで、非常に高い効果を期待出来ると述べている。

TBIは、その名が示す通り「タスクを中心に展開する言語授業」であるが、ここでいう「タスク」とは、①意味内容の伝達を中心とした教授上の課題で、②達成すべき目標が明確であり、③解決すべきコミュニケーション上の問題を含んでいるものであると同時に、④現実世界と関連しており、且つ、⑤タスクの遂行結果により評価が可能であるものこと言う（Skehan, 1998）。具体的には、例えば「イラストレーターになって、読んだ話をまとめてみよう」や「4コマ漫画を英語で作ろう」というタスクの下に様々な言語活動を統合的に運用することで、より現実的場面に近い形で総合的な英語コミュニケーション学習を展開するというものである。

このTBIに関しては、「意味内容の伝達に終始する場合は往々にしてあるため、言語表現の学習に繋がらない」（Long & Crookes, 1991; Skehan, 1998）といった批判がなされていたが、大和, 峯石 & 廣森（2005）およびWillis（1996）は「自らの学習活動を意識し制御するメタ認知

ストラテジーを、タスクの遂行に合わせて適宜指導する」ことで、TBIの持つ上記の問題点を克服出来る、と述べている。例えば、先に示した「4コマ漫画を英語で作ろう」というタスクを基に考えてみると、学習者は「4コマ漫画のセリフを作る (Writing)」に終始するあまり、使用する表現の正確さに注意を向けることが出来ず、結果として中間言語の発達を促すという観点では限界があると考えられる。しかしながら、このタスクを遂行していくプロセスにおいて、例えば、「4コマ漫画のストーリーを設計する (Planning)」、「セリフを考える (Writing)」、「出来あがった4コマ漫画を見直して評価する (Evaluation)」、「変更する必要があるら変更する (Revising)」といった活動を取り入れることにより、メタ認知方略的な視点から自らの言語活動・学習 (および言語運用) をモニターすることが可能となり、結果、中間言語の発達を促すことが可能になると考えられるのである。

2.2.2 TBIにおける方略指導の具体例

大和, 峯石 & 廣森 (2005) は TBI とメタ認知方略形成を組み合わせる際に、以下に占める5つのステップ (準備段階、提示段階、練習段階、評価段階、応用段階) で行うことを提唱しており、学習者にとってより高次と思われるメタ認知方略 (例えば「課題を遂行するための計画を立てる」など) に対しても、準備段階や提示段階を学習者に合わせて工夫することで効果的な授業展開が実現出来る、と述べている。

以降、大和, 峯石 & 廣森 (2005) において紹介している「Abekonbe」(参考資料) を参考に、TBIにおける具体的方略指導例についてまとめてみる。なお、以下の例では、「ドラえもんの漫画を用いてリーディングにおける方略を学ぶ」ことを目標とし、通常授業で補助教材 (参考資料) を用いることを想定している。

① 準備段階 : Preparation

- リーディングの方法について学習者に質問する

(質問内容)

日本語の文章を読む時、どんな風にして読んでいますか？また、英語の文章を読む時、どんな風にして読んでいますか？

- この授業では「Abekonbe」というドラえもんの漫画を使って、効果的なリーディング方略 (特に、「推測する」と「確かめる」) について学ぶことを伝える。

② 提示段階 : Presentation

- リーディング方略として「ストーリーを推測する」、「推測したストーリーを確かめる」という2つを学ぶことを提示し、説明する。

(説明内容)

ストーリーを推測する方略は、物語のパターンや登場人物に関する背景知識などにもとづいて、ストーリー展開を予測することです。

推測したストーリーを確かめる方略は、自分が推測したストーリーと提示される英文の内容を比較する方法です。

これら2つの方略は、「ただ英文を読む」のではなく、「英文 (もしくは提示される漫画) と会話する」ようなものなので、楽しく英文を読んでいくことが出来るようになります。

- サンプルの4コマ漫画を基に2つのリーディング方略について具体的に示す。

(説明内容)

ドラえもんってポケットから道具を出して、のび太君のピンチを救ってくれるんだよなあ…	背景知識の活性化
---	----------

のび太君、お母さんから「草取りしなさい」って言われてるけど、やりたくなさそうだなあ… 多分、ドラえもん泣きつくかも…	ストーリーの推測
---	----------

やっぱり、そうだ！	ストーリーの確認
-----------	----------

おっ、ドラえもんがハサミを取りだしたぞ…これで草取りするのかなあ…？	ストーリーの推測
------------------------------------	----------

えっ、このハサミでのび太君の影を切り取るのか！	ストーリーの確認
-------------------------	----------

③練習段階：Practice

- 先に説明した2つのリーディング方略を実際に活用しながら漫画を読むように指示する。

(説明内容)

それでは、新しいリーディング方略を使って「ドラえもん」を読んでみましょう。さっき私が実演したように、この後、どんな事態が待ち受けているか推測しながら読んでください。

- 参考資料に示すシナリオ1をOHPなどで提示し、最後まで読み終えた頃に、シナリオ1の推測が当たっていたかどうか、学習者同士で話し合わせる。
- 各学習者にシナリオ2の場面について予測してもらい、クラス全体で話し合う。(以降、「シナリオの提示 → 予測 → 確認」を同様の手続きで行う。)

④評価段階：Evaluation

- 評価用紙を用いて、2つの方略についての理解度、有効性などを自己評価させる。

(評価内容例)

- この方略の使い方は理解できましたか？
(1～5の5件法で回答)
- 「理解できた」と答えた人はその使い方を説明してください。
(自由記述)
- この方略は有効だと思いますか？
(1～5の5件法で回答)
- 今後は1人でも使えると思いますか？
(Yes/Noの2択)
- 他に使った方略があれば、その名前とどのような効果があったのかを書いてください。
(自由記述)

⑤応用段階：Expansion

- 登場人物の数からなる小グループに分

け、役柄を交換しながら「Abekonbe」のストーリーをロールプレイさせる。

- 2つのリーディング方略を用いて教科書（もしくは簡単なリーディング用副教材）の読解をやってもらう。時間が足りないようであれば、宿題として提示する。

この「Abekonbe」におけるタスクは、4コマ漫画のストーリーを推測し、その内容を確認させるというものであり、全体として取り扱っている方略は、メタ認知方略というよりも、学習課題を処理する際に用いる「学習方略」(特に、推測・確認)に近いものと思われるが、この例は、ともすれば「4コマ漫画の内容を理解する」というタスクに終始しがちなTBIの持つ問題点を上手く克服しており、内容理解を効率的に実践していくための方略指導とタスクを効果的に組み合わせた非常に良い例であると思われる。

3. 大学生を取り巻く英語学習環境

3.1 多様な学習環境

現代の大学生を取り巻く英語学習環境は非常に多様化している。大学における英語授業、ESS (English Speaking Society) などの課外活動、英会話学校での英語学習に加え、インターネット、携帯電話などのモバイル機器の急速な普及に伴い、無料で学べるオンライン講座なども多数提供されており、学習者の立場から見れば「何時でも好きな時に、自分の好きな方法で英語の学習が出来る時代になった」と言えるであろう。

上記のような英語学習環境の多様化は今後さらに進むものと思われるが、現状を見る限り、この多様な学習環境を十分に活用できているとは考えにくい。徳島大学での状況を例に挙げれば、2000年に実施された調査(徳島大学全学共通教育センター外国語教育部会, 2000)では1週間で英語学習に費やす時間が「全くない」もしくは「30分以内」と答えた学生が約70%に上ることが報告されているが、2008年に実施された調査でも80%以上の学生が自主的英語学習を行っていないことが明らかとなっている(徳島大学, 2008)ことから、学生の英語自律学習という点ではさほど大きな進展は無いようである。2000年からの8年間で様々なオンライン講座などが容易に入手できるようになったと思われるが、たとえ多様な学習環境や方法が手に届くところにあっても、自らその環境に手を伸ばし、自らの英語学習のた

めに環境を活用するというところまでには至っていないようである。

3.2 翻弄される学習者とメタ認知方略

「英語の勉強をしたいと思っているし、しなければならぬとも思っているんだけど、どうしたら良いのか分からない」と嘆く学習者は多い。確かに、このような学習者には学習動機上の課題がある場合が多く、この学習動機上の課題が「どうしたら良いのか分からない」という混沌さを生み出す根本的な原因になっていると考えることは納得のいくところである。

しかしながら、昨今の厳しい就職状況下では学生の多くが TOEIC などの英語力証明書が就職に有利であることを理解しており（池田 & 福森, 2005）、TOEIC などで高得点を得るためには卒業までの限られた時間を有効に活用する必要があると自覚していることなどを考慮に入れば、上記の学習動機上の課題は「ただ単にやる気がないから」というよりも、英語学習に対する方法論にその原因があり、「学習環境が多様化している状況の中でどのように英語学習を展開していけば良いのか分からない」（東矢, 2003）ことにより引き起こされていると考えることが出来ると思われる。

事実、「TOEIC で高得点を取りたいと希望している学習者」は非常に多いが、「どの問題集を選択するか」という課題に対しては多くの学習者が頭を悩ませているようである。例えば、TOEIC 試験対策用問題集を Amazon.com で検索してみると 600 種類以上の教材が販売されており、教材選択に関しては多くの場合、「かつて TOEIC を受験した友達に相談する」、「英語教師に相談する」、「インターネットで問題集についての情報を収集する」などの方法で対応しているようだが、いずれにしても教材選びには非常に苦勞しており、自分に合った教材を見つけるまで数十冊も問題集を購入する学習者もいるようである。

教材を選択する際には、①「次回のテストでどの位のスコアを目指すのか」といった学習の目標や、②「今の自分の実力はどの程度なのか」、「英語学習に対する自分の好みはどのようなものなのか」といった現状の分析、③「TOEIC 対策のために時間とエネルギーをどの程度費やすことができるか」といった将来の見込みなどを客観的に把握しておくことが必要であり、最低でもこれらの要因に対する見通しが明確にならなければ自分にとってベストな教材を選択することは非常に困難であると考えられる。単に「教材を選択する」といっても、その裏には、学習目標、現状における知識・スキル

の客観的把握、学習計画・評価・修正などの「メタ認知方略」が深く関わっており、自らの学習を客観的に見つめ、これからの学習に対するグランドデザインを明確にするプロセスが無ければ、教材（つまり学習環境）の多様性に翻弄されてしまうことにもなりかねない。そして、先に示した「数十冊も問題集を購入する」例は、学習環境に翻弄されてしまい、自らの学習に対するグランドデザインを明確にするプロセスを経なかった結果によるところが多いと考えられるのである。

では、このような学習者に対しどのような支援を提供すればよいのだろうか？次項では、「TBI の可能性と限界」を中心にこの課題について考えてみることにする。

4. 新たなる指導方針：TBI の可能性と限界

大和, 峯石 & 廣森 (2005) が示す TBI での指導方針は、具体的な学習課題に対する方略（つまり学習方略）を指導する点においては非常に効果的であると考えられる。例えば、先に示した「推測をしながらリーディングを行う」という一見したところ当然のように思える学習方略も、これまでに実践したことのない学習者にとっては新しい学びであり、その学びを定着させるためには具体的な学習課題に基づきながら指導を展開していく方が望ましい。「Abekonbe」の例では、「英語で書かれた 4 コマ漫画を読む」というタスクをより効率的に遂行するための手段として「ストーリーを推測する」、「推測したストーリーを確かめる」という 2 つの学習方略を捉えているが、学習者の視点から見ても非常に具体的な例を用いた理解しやすい構成になっていると思われる。

このように、具体的な学習方略の指導という点では上記の TBI を基にした教授法を展開することでかなり効果が期待できると思われるが、「学習全体のグランドデザインを構築する」という点ではやや脆弱な感が否めない。

例えば、大和, 峯石 & 廣森 (2005) では、学習目標を設定するためのワークシートの使用が紹介されているが、そのための時間数は授業オリエンテーション時の 1 時間のみであり、その後は提唱する 5 段階から成る指導ステップ（準備段階・提示段階・練習段階・評価段階・応用段階）に基づき学習方略の指導を展開するように提唱している。このやり方では、先に提示した「Abekonbe」のような具体的リーディング方略などのマイクロな方略指導は可能となるであろうが、「多様な学習機会をどのように組み合わせしていくか」といった学習のグランドデ

ザインを策定することは到底出来ないと思われる。

大和、峯石 & 廣森 (2005) はマイクロな方略指導を支持する理由として、①英語授業はあくまでも英語コミュニケーション能力の向上のためにあるものであり、②教師が学習方略自体に重点を置きすぎると、「学習ストラテジーの指導自体が授業の最終目標になってしまう」状況を作り出してしまうことになることから、③本来の英語学習の目的が損なわれてしまう可能性、および教室内に混乱を生じる可能性を避けるためにも具体的タスクを達成する手段として学習方略を支援する必要がある、という3つを挙げているが、継続的自律学習を支援していくにはマクロな視点から自分の学習を見つめ、学習者が自らの手で調整していくための知識・スキル・能力が必要となってくる。

特に、現在の大学生が置かれている状況の限りでは、「多様な学習機会を如何に組織化するか」といったマクロな視点からみた課題は、継続的な自律英語学習という観点からは見逃すことの出来ない課題の1つであり、その課題に対応するためには、上記のようなミクロ的な視点に立脚する指導だけでは対処できないと思われる。そのためにも、学習者のメタ認知方略に直接的に働きかけ、例えば「自分の英語学習目標を設定させる」、「現在における自分の英語スキルを客観的に分析する」、「入手可能な学習機会を整理し、選択する」、「実現可能な学習プランを策定する」、「評価方法ならびに学習計画などの見直しを行う」などのメタ認知方略に特化した支援を何らかの形で展開する必要があると考える。

無論、「メタ認知方略に特化した支援を授業内で行うのか、それとも授業外の支援活動として展開するのか」はこれからの議論に依るところも大きいと考えられるが、いずれにしても、何らかの形で学習者の継続的自律学習をマクロ的な視点から支える活動を定期的に提供することが求められると考えられるのである。

5. おわりに

先に指摘したように、大学生の英語学習状況を見る限り、どのようにして大学生の英語学習に対する継続的な自律学習を支援していくかという課題はこれから大学英語教師が取り扱っていくべき課題の1つであることは確かである。本稿では、①この継続的な自律学習を支援するための基本的方向性を「自己調整学習」、TBI という2つのキーワードを基に検討を行い、②継続的自律学習指導という観点からみた TBI

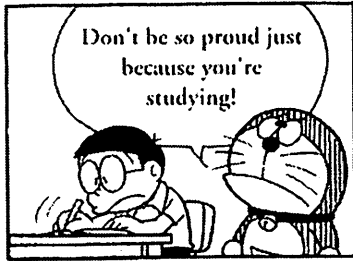
の可能性と限界について議論を展開したが、まず指摘しておきたいことは、決して「TBI を基に学習方略の指導を展開すること自体を否定しているわけではない」ということである。TBI での学習方略指導は、学習者を取り巻く学習機会の多様性に対応するという点で限界があると考えられるものの、具体的な学習上の課題を解決する方略を学ぶ点では非常に効果的であり、望ましい教授方法であると考えられる。このことから、今後の方略指導においては、具体的な学習課題に対する方略だけでなく、学習目的や計画・評価・修正に関わるメタ認知方略に直接働きかけ、学習者の学習全体に関わるグランドデザインを目に見える形で具体的に構築していくための支援を提供することにより、学習動機上の課題を改善し、1人でも多くの大学生が継続的且つ自律的に英語学習を実践出来るようにするための支援を行うことが望まれるのかもしれない。

【参考文献】

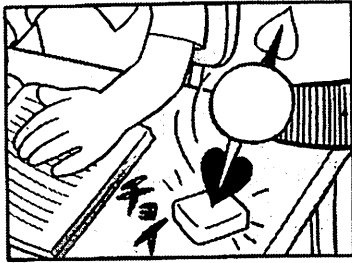
- Benesse 教育研究開発センター. (2008). 調査データクリップ! 子どもと教育. 参照日: 2010年1月25日, 参照先: 英語教育 第1回: <http://benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/clip0014a.pdf>
- Long, M., & Crookes, G. (1991). Three approaches to task-based syllabus design. *TESOL Quarterly*, 26, 27-56.
- Nunan, D. (2004). *Task-Based Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odlin, T. (1992). *Language Transfer*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. England: Oxford University Press.
- Wenden, A. (1998). Metacognitive knowledge and language learning. *Applied Linguistics*, 19, 515-537.
- Willis, J. (1996). A flexible framework for task-based learning. In J. Willis, & D. Willis (Eds.), *Challenge and change in language teaching* (pp. 52-62). London: Macmillan.
- Zimmerman, B. J. (1990). Self-regulated Learning and Academic Achievement: An Overview. *Educational Psychologist*, 25 (1), 3-17.
- 伊藤崇達. (2008). 「自ら学ぶ力」を育てる方略—自己調整学習の観点から—. *BREED*(13), 14-18.
- 伊藤崇達, 神藤貴昭. (2003). 自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証. *日本教育工学雑誌*, 27 (4), 377-385.

- 岡田いずみ. (2007). 学習方略の教授と学習意欲
—高校生を対象にした英単語学習において—.
教育心理学研究(55), 287-299.
- 三宮真智子. (1996). 思考におけるメタ認知と注
意. 著: 市川伸一 (編), 認知心理学 4 思考
(ページ: 157-180). 東京: 東京大学出版会.
- 大和隆介, 峯石緑, 廣森友人. (2005). 学習スト
ラテジーを指導する際の基本的考え方. 著:
学習ストラテジー研究会大学英語教育学会,
尾関直子, 大和隆介, 中島優子, 廣森友人
(共同編集), 言語学習と学習ストラテジー
(ページ: 102-112.). 東京: リーベル出版.
- 池田広子, 福森貢. (2005). 経営情報系大学生の
英語学習と動機づけに関する一考察. 京都
創成大学紀要, 5, 23-42.
- 竹内理. (2007, Spring). 自ら学ぶ姿勢を身につ
けるには -自主学习の必要性とその方法を
探る-. TEACHING ENGLISH NOW, 2-5.
- 中島和子. (2006). 母語以外の言葉を子どもが学
ぶ意義: パイリンガル教育からの視点.
BERD, 18-22.
- 東矢光代. (2003). オーダーメイドの英語学習指
導法の構築を目指して. 言語文化研究紀要
SCRIPSIMUS, 12, 23-44.
- 徳島大学. (2008). ラーニングライフ-第1回学
生の学習に関する実態調査報告書-. 徳島
大学.
- 徳島大学全学共通教育センター外国語教育部
会. (2000). 外国語教育改善のためのアンケ
ート報告書. 徳島大学全学共通教育センタ
ー.
- 廣森友人. (2003). 学習者の動機づけは何によっ
て高まるのか—自己決定理論による高校生
英語学習者の動機づけの検討-. JALT Journal,
25 (2), 173-186.

“Abekonbe” Scene 1



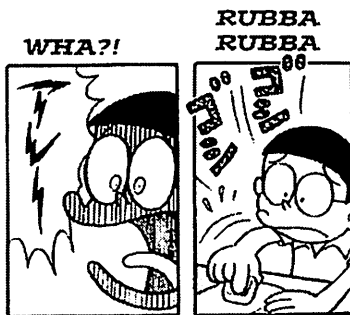
④



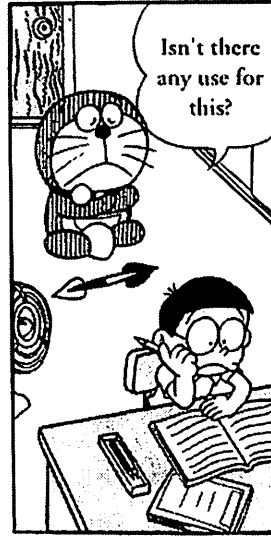
⑤



⑥



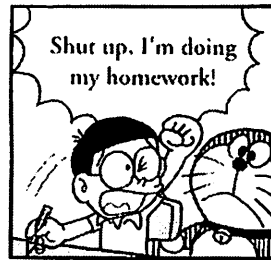
⑦



①



②



③

(大和, 峯石 & 廣森, 2005, p.152)

共創型学習活動の可能性

—国際交流の扉を拓く—

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi

Gehrtz 三隅友子

Gehrtz-Misumi, Tomoko

金成海

Jin, Cheng-Hai

徳島大学国際センター

要旨：

徳島大学全学共通教育科目として 2009 年度後期に、共創型学習「国際交流の扉を拓く」を開講した。本講義は、受講生が日本人学生、留学生、社会人と多様な点と、複数教員が連携したことに特徴がある。さらに外部講師を招いたり、最終課題の発表会等を盛り込んだりして、全てにおいて初めての試みであった。まさに試行錯誤で取り組んだ結果、得られた様々な評価（関わった人が互いにそれぞれの視点からコメントを提示する広い意味での）をもとに内省し、本活動の意義を考えると共に改善への手立てを考察する。評価をいわゆる教師から学習者への成績判定のためのものにとどめず授業に関わった人の相互評価や、また最終の総括的評価だけでなく途中段階の診断的評価等を試みた点にも注目する。

キーワード：異文化理解、コミュニケーション、国際交流、気づき、評価

1. はじめに

「国際交流の扉を拓く」は全学共通教育の教養科目として 2008 年に、また共創型学習の授業として 2009 年後期に開講した。それまで開放実践センターにて社会人対象の「国際交流ボランティア入門」に替わり国際センターが新たに設けたものである。この授業では、①異文化を理解する②共に生きる③新たな地域社会を創る、の三つの基本目標をもとに留学生及び在住外国人支援のあり方を考えることをねらいとしていた。このねらいに基づいて教員 5 人がそれぞれの専門領域からの講義を行っていたが、今回新たに日本人学生と留学生を含め、また半期の期間に教員 3 名が連携して企画実施することを試みた。社会人・日本人学生・留学生そして教員がそれぞれの視点からの働きかけを通して、刺激しあいながら気づき、学びを創ることを目指す教育活動とした。このような活動を振り返る方法として、様々な評価の活動も試みている。得られた評価をもとに授業終了後の今再び振り返ることによって、共創型学習活動の「学び」とは何か、またこれからの可能性を考察する。

2. 「国際交流の扉を拓く」

2.1 実施内容

内容、担当教員、実際の日程に関しては資料 1 参照のこと。

2.2 受講者

開講当初は学生 2 名（日本人 1 名、留学生 1 名）と社会人 3 名であったが、教員の呼びかけ

で留学生 5 名が加わり、日本人学生 1 名、留学生 6 名、社会人 3 名の計 10 名となった。

2.3 評価活動

ここでは評価を「自らの実践をさらに改善するための活動」と定義する。このような評価に関わった人と互いの関係は以下の図で表される。授業内での評価活動、方法実施時期は資料 1 の表を参照のこと。

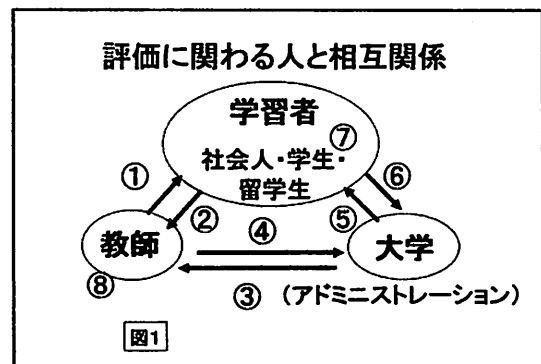


図 1 内の評価活動を番号順に簡単にふれる。教師は期間中学習者をとらえ観察し、教育活動を行う。そして授業終了後に出席及び最終発表の内容とその方法を教師二人が判定し成績を出す (図 1 の①)。また学習者から授業内に出されるコメント及びアンケートは②に相当する、複数の教師が 10 名の受講者に対してこの関係を持っていた。特に終了時には社会人 3 名への授業の対するインタビューも実施した。

またこの共創型学習活動は、まず大学側の教師への実施を促す働きかけがあり、それに応え

て実施したというのは、図の③・④にあたる。授業期間中に「週刊学びのコミュニティー（全学共通教育センター）40号」（注1）に当授業が掲載された。さらに授業後に提出を求められたアンケート（授業の成果と社会人参加は授業をどのように変えたか）も同じく③・④の関係の中での評価活動である。

授業の最終段階で大学側からの学習者への授業改善のためのアンケート（注2）は⑤・⑥のものである。ここで得られた結果は大学から教師へと集計結果が与えられ、④の流れになる。

講義形式よりもペアやグループによる体験学習を多くしたことから、学習者同士の評価も活発に行われた。最終発表に対しての相互にコメントを出しあう活動は⑦である。そして、複数の教師も互いが得た情報から一人ひとりの学習者への働きかけの方法や今後の学習活動の流れを相談する作業が⑧となる。

以下具体的に評価を考察する。

3. 評価から

3.1 最終評価（授業改善のためのアンケート）

授業に対して80%の満足が得られた（20%は普通）。互いの存在が授業の充実改善に役立っているかに関しては90%の賛同が得られたが、互いに刺激を受けたでは50%であった、これは人数や教員の活動の設定の仕方が問われるであろう。質問項目Ⅱの自己改善に関しては全ての項目において「身に付いた」の評価を得ている。「わからない・不明」も30%以下で体得できたことがうかがえる。「世代を超えて共に学び合うこと」の意義は80%が確認し、学生からの評価も得られている。

3.2 授業内評価

3.2.1 ゲスト活動の評価

11月には徳島県文化国際課国際交流室の長町氏から、徳島県の国際化の現状をお聞きした。学生からの評価は非常に良いものだった。授業の評価を見ると、国際交流が徳島県の施策として行われていることに興味を持った様子が見られる。「外国人として外国人と日本人の交流(を)図ることを徳島県がしていることは嬉しかったです」、「多文化共生とか国際フレンドシップ憲章とか、国際推進事業など、たくさんの施策が出てきました。外国人の私にとってはびっくりするほどうれしかったです」（授業終了時の学生のコメント）。留学生は、「もっと地元の人たちと交流したい、もっといろんな国の人と交流したい、それにコミュニケーションの能力を高めたい」（授業終了時の学生のコメント）

ト）と思っている。このような県からの外部講師をお呼びすることによって、地域で行われている国際交流について学生に知ってもらい、それを活用するように働きかける良い機会になったと考えられる。

長町氏との質疑応答では徳島県の観光について話が及び、自然豊かな徳島県にもっと外国人を呼ぶ方策についても話し合った。終了時の学生のコメントにも、「店とかは現地人だけではなく外国人向けの新メニューを作ったり、外国人に話しかけられてもあわてて逃げたりしないようにいろいろなプログラムで広報するとすごくいいと思います」といったものもあった。

12月には、NPO法人ハーモニーワークキャンプの長尾夫妻からベトナムやタイへの子どもたちへの音楽を通じた支援とその国際交流活動についてお話を聞き、実際の笛と歌と踊りの活動を行った。

留学生からは日本の音楽教育について知ったことまたその大切さについて、社会人からはたくさんのリコーダーが日本で捨てられていることが他国で役に立っていること、お二人の活動をこれからの生き方の参考にしたいという声も聞かれた。それぞれが多く気づきを得ることができた。

3.2.2 講義評価（橋本担当）

10月から11月にかけて、国際交流やコミュニケーションについて考えた。国際交流とは何か、という問いかけに、受講生は「言葉を通して(の)経済と文化と歴史の上のコミュニケーション」「文化・考え方・違う人がお互いに理解しあう(こと)」「文化・歴史・習慣などが違う人たちとの触れ合い、一つの言語で話すコミュニケーション」といった答えが返ってきた。キーワードは「コミュニケーション」であることを確認し、次にコミュニケーションとは何かを考えた。コミュニケーションとは二人以上の共同作業で、互いのメッセージの意図している意味を見出すプロセスである。そのメッセージがどのように伝えられ理解されるかは、個人の文化的背景や経験に左右される。お互いの理解に大きな違いがあるときに、「ミス・コミュニケーション」が生じる。受講生が実際に経験したミス・コミュニケーションの話をしながらか、これらの点を議論した。

授業終了時に効果的な国際交流についてコメントを書いてもらったところ、「自文化の固定観念に惑わされない柔軟な理解」「積極的に相手に好意を持って話しかける」「自らのアイ

デンティティを明確に(する)」といった回答が見られた。

ある留学生の一人は、「異文化を理解するのは子供のころからの夢」だとコメントに書いていた。このような授業を行うことによって、日本人、留学生、あるいは地域の人たちとの間で、より一層国際交流を効果的に推進していく必要があると実感した。

3.2.3 ワークショップ評価 (三隅担当)

コミュニケーションの理論の講義に引き続いて11月18日・12月2日・9日は「人間関係づくり・コミュニケーション」ワークショップ三回を実施した(注3)。ここでは自由記述ではない振り返り用紙から回答を得た。振り返り項目は、①参加度②満足度③何を学んだと思うか④この内容はこれから活用できるか⑤役立つか⑥自由記述、である。これらをもとに分析する。参加度に関してはグループあるいはペアで対話をする必要があるため積極的な参加ができた。しかし満足度に関しては、初回にミス・コミュニケーションの演習(わざとコミュニケーションがうまくいかない状態)を起こしたこと、また教師がこれらの活動のメタ的な意味を伝えられなかったことからこの回は「体系的に教えてほしい」「内容がわかりづらい」というコメントがあった(まさにミス・コミュニケーションであった)。

次回からは、3人組で自らの価値観がどこから生まれたのか、また他者から自分がどのような印象を持たれているのかを見出す活動だったため、参加度及び満足度も高い評価を得た。また「今日のような活動をもっとしたいし、おもしろい」と言う声もあった。

そして3回目は、自分の感情に気づいてそれを他人に伝える活動に対して、話し手としての自分との対話(自分の感情をことばにすること)の難しさ、また聞き手として相手の何を聞くのかというさらなる難しさを改めて感じたことが確認された。全員が「役に立つ」とし、「コミュニケーションに対するイメージが変わった、誤解とか時々あるけれど重要なのは自らのそれに対する考え方だと思います」というコメントからも、日々の生活の中で取り組んでいくことであり、自らが調整していくものであることが理解できたようである。

コミュニケーションや対人関係を理論で学ぶのではなく、体験学習方式を採用したがこの内容こそ、年齢、性、国籍、立場等の違う多くの人の中で実施して、その効果が表れるものと考えられる。

4. 最終課題と発表会

4.1 課題 (図1の①)

最終課題は、「世界の中の日本、日本の中の世界」というトピックで、受講生のプレゼンテーションとした。日本の中にある外国の文化、世界に広がった日本の文化を調べ、なぜそれぞれの国で広まったのか(あるいはうまく広がらなかったのか)を発表してもらうことにした。例として、日本に浸透したクリスマスを取り上げた。クリスチャンは人口の1%なのに、クリスマスが大々的に行われる。それは日本人が宗教に寛容だから、あるいは宗教を商業化しているから、などと考えるように指導した。しかし、社会人を含めたメンバーのレディネス(内容に関してまたコンピュータ使用の能力)に開きがあるため、課題を変更し自国の文化紹介も可とした。

課題のねらいは次の3つである。(1)他文化を理解するためには、自文化を理解する必要がある、(2)身近な文化を調べることでよってもう一度自分の文化を確認する、(3)調べたことを他の人に効果的に伝えるための方法を考える。国際交流の場では、自分の文化を他の人に分かりやすく説明することが頻りに強いられる。その練習の場と考えた。5分程度の内容で、写真や例を使ってわかりやすく紹介するように指示した。また、ただインターネット等で調べるだけでなく、なぜその文化が定着したのかなど、自分の意見を必ず考えて述べるように促した。

4.2 発表内容とコメント (図1の②・⑦)

各人が発表テーマを決めて作成に取りかかる際も、授業内での作成を含めて教師が内容及びスライド作成に関して個別に相談に応じた。また高度情報化センターのPC教室も利用し、パワーポイント等の使用が苦手な場合も考慮し支援をした。

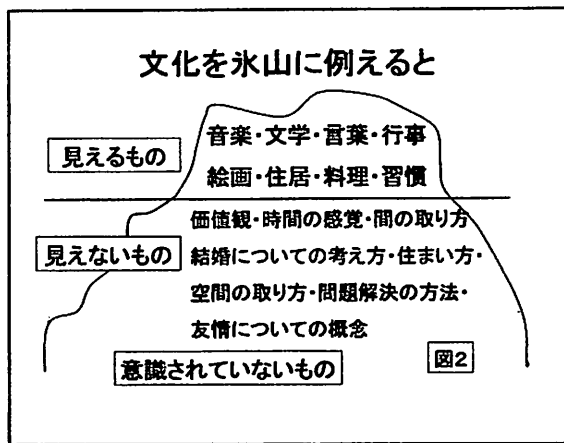
最終発表会では自分の発表だけでなく他者の発表を聞きそれにコメントするという活動を重視したので、コメントシートには、発表を聞いての「気づき?!」と自由なコメントを書く欄と発表後に一定の記述の時間を設けた。時間が許せば各発表について話し合いたかったがそれは不可能だったため記述とした。発表の録画は教師の成績判定のために使用した。2月3日の発表テーマと気づきは資料4の表を参照のこと。

4.3 発表の考察 (図1の②)

各発表を聞いて、まず「気づいたこと」「気

づかされた」と思ったことを重要視した。今回の課題は、日々の生活の中でまたは互いのやり取りの中で「おやっ？」と思う自身の「気づき」から、その原因と理由を明らかにし、また写真や言葉を使って他者に説明するというものであった。9 発表（二人で一つの発表もあった）のうち、自国の文化紹介（流行語、オンドル、ハングル、阿波踊り等）は図2の「見えるもの」に、自国と日本の食文化や花見の比較、宗教観といった比較紹介等は「見えないもの」に位置づけられるだろう。

課題遂行の過程で、この氷山の項目を自ら意識することによって、自分の価値観を他者とすり合わせて確認する作業が行われた。



さらに、テーマの一つに、本授業の「国際交流の扉を拓く」をヒントにした「国際交流の扉を開（ひら）くのか、それとも開いているのか？」というものがあつた。日本は既に「国際交流の扉は開いている」。それは、多くの（在日朝鮮人を含めた）外国人の存在や文化・習慣が出入りしている事実があることから明らかである。しかしそこで意識して確実に扉を「開（ひら）く」ためには、「郷に入り、郷に従え」ではなく「郷に入り、郷を変え」なければならないという発表者自身の考えが述べられた。他の発表とは視点が違い、氷山の図の中でも「見えないもの」のまた「意識していない部分」を「気づかせる」ものであつた。資料4の表の「気づき」以外「コメント」にも、「すごく新鮮な考え方である」としたものが4、「テーマが広すぎてまとまっていない」1、「郷に入っては郷を変える！の意味が分からない」1、「私はそう思うが自分の周りの人はそうでない」1と聞き手の考えを揺さぶつたことが見て取れる。

コメントシートでは気づきとコメントが区別できない記述もあつたが、みな各発表に関しての素直な意見感想が書かれていた。コメント

には改善のためのアドバイスもあつたが、全体を通して「様々なテーマについて説明し、いっぱい写真を見せて楽しかった。みんなうまくとまとまっているな」という声もあつた。

5. 社会人のインタビューから（図1の②）

これまでは社会人対象に行っていた「国際交流の扉を拓く」だが、学生の様子に比べて、アンケートからも授業の内容及び発表の方法等にあまりに戸惑いが見られた。そこで授業の終盤にインタビューを行った。目的は、授業改善のための情報収集と社会人受講生に本授業の教師のねらいを伝えることの二つであつた。社会人（いずれも男性）のうち二人は課題にそつて1月27日（約30分間）に一人は2月3日（約30分間）に実施し許可を得てテープ録音した。

前者は、大学側の授業改善のためのアンケートの項目に沿つて話してもらつたという方法をとつた。授業改善のポイントはアンケート内容に任せて、ここで出された意見は、次に集約される。

①「なぜ日本人学生が自分の意見を言わないのか、社会人が意見を言い過ぎると思われる場面もある」：他の共創型学習でも感じたことは、それは留学生が日本語力に関わらず自分の意見を持っていてそれを人に伝えようとする意欲があることである。

②「今回知り合つた学生（留学生）との今後の関係はどうしたらよいのか」：授業外に一緒にイベントに参加したり、食事をしたりという交流が非常に楽しかつたことから、例えば家に招いたりといった継続的な交流を望んでいた。これは、国際センターの地域サポーターへの登録を呼びかけ、今後の国際センターの活動支援をお願いした。

③「交流を通しての気づき」：違和感が起こつた事例として、お礼の行為に関しての挨拶がないのはどうかというものもあつた。学生はそのときに感謝を述べて完結しているにも関わらず、日本人側は「先日はお世話になりました」という挨拶を期待しているということも理解できた。これに関しては、両者の考え方の違いを明らかにし、両方の視点から見ることを提案した。また留学生からの質問の答えを考えていくうちに、自分の答えと他の一般の人たちの考えはどうかという視点で答えを考えることをしたということも聞かれた。

後者は、将来の仕事に活かすために本授業を受講している人であつたため、アンケートを離れて自由に改善点について話してもらつた。内

容に関してはおおむね満足しているが、何よりも本授業のより深くよりよいものにするには、日本人学生の受講を増やすことが挙げられた。最初の中国人教員による留学生事情からは、留学生のみならず在住外国人の問題をまさに外国人教員から聞いたことも良かった点としていた。そして非常にユニークな外部講師の国際交流に対する考え方や行動に対しては評価が高かった。他の授業に比べて、今回学生が意見を自由に言えるという件に関しては、教師の課題提示と場の設定が上手くいった結果であろうと指摘された。

6. 考察 (図1 教師の視点から)

考察として教師の視点から授業を振り返る。学習者に対して、これまでの経験知から一様な学習者を想定し、ラベル化あるいはステレオタイプな見方をしていたことに気づく。活動の様々な場面での学習者の実際が教師の思いこみと合致していた場合とそうでない場合があった。学習者の多様性はその能力にも差があり、ペアやグループ活動には自ずと学習者同士のやりとりが活発になり意味もあった。そして教師には学習者に対して特性の配慮や個別の対応が要求された。

また教師が複数の視点で一人ひとりの学習者を看することは、自分のステレオタイプを知ることになり、また様々な判断を揺らがせるものであった(もちろん強化を促すこともあったが)。教師の能力も違うことから対応に柔軟性が生まれたようである。そして大学との関係として、大学が授業あるいは教育のあるべき姿を提示し、それに対して教師が応えていくというような、例えばアンケートやニューズレター執筆等の働きかけは、教師と学習者に大学が入った三巴(みつどもえ)の関係を明確にした。教師が提示した「学び」が公的な目で学習者にとってどうなのかを見る機会となった。

さらに図1の関係に注目して本授業を振り返ると、知識の獲得を第一の目標とせず、自らの「価値観」に気づくことであったことを身をもって体験したように思う。特に学習者とまた教師同士の関係では、違いをさらに変化を楽しみながら授業を終えたという観がある。

7. むすびにかえて

「国際交流の扉を拓く」は敢えて「拓」の字を使っている。受講生の一人の問い「開いているのか?それとも開くのか?」はわれわれの心に関わっている。発表では「開いて」いてもそ

れに気づかない場合を指摘していた。そして「開ける」というのは扉の存在に気づいて自らが動くことを意味し、ここで「拓く」としたのは、目の前の相手との間の扉を勇気を持って、新しい関係を切り拓くことも必要な場合もあることを想定してである。その意味で心の扉を拓く、異文化に対する自分の心の扉に「気づく」ことをねらいとした。

共創型学習活動は関わる人が共に創る学びの場であることを確認し、今後もその担い手として取り組みたい。

注

- 注1 参考資料2「学びのコミュニティ 40号」。授業期間中の執筆に当たってこの授業の意義を教師は新たに確認した。
- 注2 3項目を問うている。一つは授業に対して、二つ目は自己の学びに関する項目さらに授業外の学習時間に関してである。質問項目等は資料3に掲示。
- 注3 参考文献3をもとに筆者の一人三隅がアレンジしたものを三回に分けて実施した

【参考文献】

- Gehrtz 三隅友子 (1997) 「日本語教育における活動の枠組みにおける一考察～日本人参加型プロジェクトワーク～」『JALT 日本語教育論集』2号, pp.22-33
- E.バークレイ他(著) 安永悟(監訳) (2009) 『協同学習の技法～大学教育の手引き～』ナカニシヤ出版
- 星野欽生『人間関係づくりトレーニング』2003, ナカニシヤ出版



資料1

国際交流の扉を開く 2009年後期 水曜日 15:35~16:05

担当： 金成海/三隅 Gehrtz 友子/ 橋本智

内容： 私たちのまわりの「文化」を日本人と外国人の視点からとらえ直す。受講者相互の対話を通して「文化」「交流」とは何かを考える。①国際交流とは②異文化理解とは③共に生きるとは、をテーマに「異文化コミュニケーション」「異文化理解」「留学生事情」をはじめとし、様々な視点から国際センター3名の教員が講義する。

評価： 毎回レポートの課題を出す。期末に、授業で学んだことに関するレポート課題を出す。

テストは行わない。出席、授業参加、各回のレポート、また最終レポートを基に評価する。

日程（実施）

回	日	担当	内容	評価活動
1	10/7	三隅	オリエンテーション、自己紹介	レディネス調査
2	10/14	金	徳島大学の留学生事情	
3	10/21/	橋本	国際交流	
4	10/28/	橋本・三隅	【講演】徳島県文化国際課国際交流室 長町哲司氏	コメント（自由記述）
5	11/4/	橋本	コミュニケーションとは？ その要因は？	コメント（自由記述）
6	11/11	橋本	文化とは何か	コメント（自由記述）
7	11/18	三隅	人間関係づくり・コミュニケーション①	アンケート
8	12/2	三隅	人間関係づくり・コミュニケーション②	アンケート
9	12/9	三隅	人間関係づくり・コミュニケーション③	アンケート
10	12/16	三隅・橋本	【講演】NPOハーモニークキャンプ 長尾洋子、長尾幸治氏	アンケート
11	1/13	橋本	世界の中の日本・日本の中の世界 文化紹介 プレゼンテーションの準備	発表準備
12	12/22	三隅	学外にて交流会	
13	1/20	橋本	世界の中の日本・日本の中の世界 文化紹介 プレゼンテーションの準備	
14	1/27	橋本・三隅	プレゼンテーションの準備、発表の練習	インタビュー 総括アンケート
15	2/3	三隅	発表とコースのまとめ	発表の相互評価 インタビュー 総括アンケート

★ 2月3日の発表会での互いの気づき及びコメントを集計したものを作成し、各人に配布した。

週刊 学びのコミュニケーター

第 40 号

平成 22 年 1 月 27 日発行



第 5 弾は、共創型学習『国際交流の扉を拓く』です。

(水曜日7・8時限/担当:橋本 智准教授/三隅 友子教授/金成海教授)

「国際交流の扉を拓く」は、国際センターの教員が担当し、受講者相互の対話を通して「文化」「交流」とは何かを考える授業です。日本人学生、留学生、そして社会人の皆さんが一つのクラスで学び、講義、グループディスカッション、発表など様々な活動を通して、それぞれの立場からの考えを共有しています。

本年度後期は、国際センターの金、三隅、橋本教員が担当しています。初めに徳島大学の留学生事情を紹介しました。徳島大学では 29 カ国から 250 名ほどの留学生が学んでいます。一番多いのは中国、次いでマレーシア、エジプトの順です。留学生の数は、四国の大学の中で最多です。徳島にいる外国人は、留学生だけでなく、研修生、またEPA(経済連携協定)に基づくインドネシアやフィリピンからの介護士など、さまざまです。つまり、徳島にいて、国際交流ができる機会はたくさんあります。授業を通して日本人、留学生がそれぞれにそのことに気づき関心を持ってほしいと思っています。

参加型授業を心がけ、受講者が自ら考え方向性を導くことができるようにしています。教員はあくまでも



「ガイド」役です。授業ではまず、「国際交流」とは何かを考えました。国際交流とは、異なる文化背景を持つ人とのコミュニケーションです。コミュニケーション

は、単に情報を送ることではありません。情報をやり取りするとき、そこには送り手と受け手のフィルターがかかり、それぞれの文化・教育の背景によって情報は変化してしまいます。情報が大きく変化すると、そこには「ミス・コミュニケーション」が生まれます。これは避けるにはどうすればよいのでしょうか。「文化」とは何かを考えながら、この問題を避ける方法そしてミス・コミュニケーションから新たに何を学ぶのかについて考えました。



また、他の国の人と良い関係を持つには、それぞれの文化を良く知ることも大切です。それは、他の国の文化を知るだけでなく、自分の文化を知り、それを他の文化の人に効果的に紹介する力も求められます。受講生には、自分の国の「文化」について研究し、それを適切な方法で伝える練習も行います。

人との「交流」は、人間関係を築くことです。それは、国籍が同じ、違うに関係なく、適切な「つきあい」ができるかどうか成功のカギがあるのでしょうか。授業では、いくつかの体験型の活動を通して、「つきあう」「わかちあう」などのコンセプトを学んでいます。

上述の活動に加えて、二組のゲストスピーカーにお越しいただき、それぞれの専門と取り組みについてのお話をお聞きしました。徳島県



文化国際課国際交流室の長町さんには、徳島県の国際化に関して、特に多文化共生、交流推進事業など、県レベルの施策をご紹介いただきました。また、NPO法人ハーモニー・ワーク・キャンプの長尾さんご夫妻は、ベトナムやタイに出向き学校で子どもたちに音楽教育を行っています。受講者も指導のもとに歌、笛の演奏そして体を動かす国際交流の体験をしました。



この授業のねらいは、受講者の皆さんに自分の周りの世界の見直しのきっかけをもってもらうことです。

これまでに持っていた「外国」「外国人」の概念を拓



る、新しくする、変えるといったことを試みよう！と言い換えられます。これからの社会は、様々な

文化、価値観、習慣を持った人と協力していくことが要求されています。周りの変化と自分の変化を楽しみながら「国際交流」を当たり前のこととする、そんな心のあり方を目指しています。

(文責:橋本 智)

Hatoba 企画 星空観賞会第3弾!

★火星観望会 のお知らせ★

1月31日に地球に近づき、見ごろになる火星を望遠鏡で見てください★



日時: 2月2日、3日、5日(雨天、曇り中止)
19時40分~21時

★3日とも同じプログラムです。

お好きな日、全てに参加OKです。

場所: 4号館学生支援室に集合。

総合科学部 伏見賢一先生のお話を伺ってから、5号館屋上へ移動し火星を観望します

定員: 30名 どなたでもご参加いただけます

(事前に学生支援室までお申し込みください)★

Hatoba 「恋のうた学習会」

第6回は、

2月12日(金)

15:00~16:30頃

学生支援室にて行います。

第1回目に堤先生をお迎えして以来、着実に回を重ね、ぐんぐん成長中の学習会です。

どうぞお気軽にご参加ください。

大変寒いので、暖かい服装でお越しください!!

～編集後記～

『週刊 学びのコミュニティ』の発刊から約1年、第40号を数えるまでになりました。情報を提供するだけでなく、この取り組みが円滑に進んでいくために、そして活発な学び合いのために一役を担うことができたら…そんな思いで毎週発行してきました。

1年間ニュースの作成を通して、この取り組みを見つめてきましたが、ここあそこに様々なプロジェクトが生まれ、その活動が活発であった1年でした。それはこの紙面での紹介が追いつかないほどの勢いでした。間もなく後期の授業が終了します。今年度の反省をしっかりと咀嚼しつつ、この勢いを来年度へと繋げていきたいと思えます。(境)

授業改善のためのアンケート(社会人参加の共創型学習・教養科目)

I 質問項目

1. 授業内容のレベル
(⑤大変難しすぎる ③普通 ①大変易しすぎる)
2. あなたは熱意や意欲を持ってこの授業に臨んだ
(⑤大いにそう思う ③普通 ①全くそう思わない)
3. 大学にふさわしい授業であった
4. 学ぶことの楽しさを感じさせる授業であった
5. 社会人(学生)の参加は授業の充実や改善に役立っている
6. 社会人(学生)から刺激を受けた
7. このような形式の授業を増やすと良い
8. あなたは、この授業に満足しましたか？

II 質問項目

- (⑤大いに身に付いた ④身に付いた ③不明 ②身に付かない ①全く身に付かない)
1. コミュニケーション力が向上した
 2. 自分とは異なる視点の存在に気がついた
 3. 思考力が身に付いた
 4. 大学で学ぶことの意義が理解できた
 5. 対話による学びについての理解ができた
 6. 新しい発想で物事を見ることができるようになった
 7. 授業に関連した課題をさらに深めたいと思うようになった
 8. 生涯学習の意義が理解できた
 9. 教養に対する理解を深めることができた
 10. 世代を超えて共に学び合うことの意義が理解できた

III 質問項目

この授業に関して、予習復習にかけた時間(1週間当たり)

国際交流の扉を拓く
最終発表会 コメント
2010年2月3日(水)

順	テーマ	気づき ? !
1	流行語について	<ul style="list-style-type: none"> ・ OZR の説明がおもしろかった ・ 日本と中国の流行語を加えた ・ 若い人のことば、本では接する機会が少ないものなので ・ 中国語も流行語がある(絵文字) ・ 若者文化は世界共通
2	日本の宗教について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の年中行事はどんな宗教にもあることはびっくりしました ・ ご都合主義、テーマはおもしろい ・ 日本人の宗教心はやはりふくざつ ・ 新聞からの調査 日本人は無宗教ではない ・ ご都合主義
3	日本と中国のお正月～食文化について～	<ul style="list-style-type: none"> ・ 材料に意味 ・ 中国の正月料理 ・ 日本の方は水餃子が好きじゃない ・ 神様に供えるイメージ。強い現実的なイメージ ・ 日本は明治5年以前、旧暦で祝っていたことが知らなかったです
4	中国に広まった花見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武漢大学の桜 ・ 中国の花見は韓国と似ています ・ 武鑑大学の桜にも反日があるのだな、関係文化にも注意しなければ ・ 文化の成り立ち、日本特有の花見
5	国際交流の扉を開くのか、それとも開いているのか？	<ul style="list-style-type: none"> ・ 郷に入り、郷を変える、よそ者 ・ 視点が特別なので面白かったです ・ ごうに入ってはごうを変える(?) ・ 国際交流の心の扉をひらいていく ・ 郷に入って郷に従え！ → 郷に入り郷を変える
6	ハングル	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうして韓国人は漢字の代わりにハングルを使うのかちょっと気になる ・ CiaCia 族のことがぜんぜん知らなかった ・ ChiChi(?) ・ ハングル ・ 資料をたくさん調べた ・ ハングルが 1443 年にできたこと
7	中国の食文化について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 写真いっぱい見た ・ 日本と中国の比較 ・ 中国の食べ物の特徴 ・ 写真が本当に私を誘惑した ・ 日本人の食文化 ・ 中華料理にもいろいろな種類があるのだなと思った
8	オンドルについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昔ながらのオンドルは始めて聞きました ・ オンドルとは ・ 日本の家がすきまだらけであることが初耳でした ・ 日本にはなぜオンドルがないのか？韓国では一般化していること ・ オンドルの原理を詳しく説明してくれた
9	阿波踊り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「阿波の連」は連の名前ですか、おとなしくなくて元気な踊り ・ 阿波踊りにも各種各様な連の存在に気づく ・ 若い人たちも楽しめていること ・ パワー全開 ・ なるほど徳島大学も阿波舞の連を持っています

新しい映像教材の開発を目指して —学習者の専門に配慮した授業の試み—

橋本 智
HASHIMOTO, Satoshi

山木 眞理子
YAMAKI, Mariko
徳島大学国際センター

古賀 美千留
KOGA, Michiru

要旨：

医学・歯学・薬学系の学部および大学院に所属している日本語学習者を対象にしたクラスで、留学生が専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる効果を期待して、医・科学系の映像素材を使った教材を作成し、授業実践を試みた。実施後の調査では、映像を使用した授業に対する興味・関心は高かったものの、内容は必ずしも医・科学系の映像でなくてもよいという反応も見られた。教師の振り返りでは、教材の選定と作成とに多くの手間と時間がかかることがわかった。今後はこの結果を踏まえ、より学生のニーズに合った、日本語の運用能力を伸ばす教材の開発が必要であろう。

キーワード：日本語教育、映像教材、教材作成、日本語運用能力、専門教育

1. はじめに

本研究は、医学・歯学・薬学系の学部および大学院に所属している日本語学習者を対象に行なった映像教材を使用した授業について、実践報告および活動の効果・課題の検証を行うものである。

1.1 研究の背景および先行研究

徳島大学において医学・歯学・薬学系の学部や大学院で学んでいる留学生（以下、「医歯薬系の留学生」）は、「自身の大学生活ではほとんど日本語は必要としていない」と考えている。一方、彼らを指導する教員からは、留学生の日本語力の向上の必要性について声が上がっている。

医歯薬系の留学生の日本語に求められるニーズは、生活場面・研究場面で大きく異なる。生活場面での日本語は、通常の日本語クラスでの学習で対応可能であるが、専門的な場面で使われる日本語については、クラスでのサポートは難しい。学習者の研究分野の違いによって、日本語の使用が求められる状況・語彙が異なることが予測されるからである。現在の福祉・看護の分野での専門日本語の指導のような画一的な指導を行なうことは、大学・大学院で専門性の高いそれぞれの分野で学んでいる留学生の指導としてはあまり効果的ではないだろう。

そこで、医歯薬系の留学生が興味を持って取り組めると予想されるトピックをテーマにした映像教材を使用することで、学習者の通常の日本語学習の助けのみならず、専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる効果が期待できるのではないかと考えた。

映像を使った教材の利点として、「学習者の興味を引き出す、授業を活性化する」ことが大坪(1990)で指摘されており、保坂・土井(2001)の学習者へのピリーフ調査でも確認されている。

テレビドラマやドキュメンタリー等、教育用に加工されていない、生の映像教材を使用した日本語教育における授業実践は、これまでも報告されている（有賀(1990)、高橋(2006)、田中(2007)など）。しかし、これらは一般的な日本語使用場面での日本語習得を目的に実践されており、学習者の専門や研究場面に配慮したものではない。

専門教育場面での日本語に配慮した映像教材を用いた授業の研究としては、吉岡(1992)が挙げられるが、吉岡(1992)は「専門教育への橋渡し」のために、人文社会系学部で学習する留学生を対象に作られたビデオを使用し、そこで使われている語彙・用語の習得に主眼が置かれている。つまり、本稿で扱うような、「留学生のために加工されていない映像」を使用し、「専門分野へのアクセス」を視野に入れた映像教材を使用した日本語授業に関する事例は、管見の限りでは見受けられず、新しい試みであると言える。

1.2 研究の手がかり

本研究では、この新しい試みである「専門分野の日本語にアクセスしやすくなる効果を期待した、映像素材を使用した授業」について、次の3点を研究の手がかりとしたい。

a. 教師が選択した映像および作成教材は、

学習者にとって「役に立つ」もの、「興味をそそる」ものだったのか

- b. 映像を使用した教材を作成・使用する際の注意点・困難点とはどのようなものか
- c. 今後、このような映像教材を使用した活動は、どのように発展可能か

これらは、授業実践における教師側からの気づき、および学習者へのアンケート、フォローアップインタビューをもとに考察していく。

以下、2節では、映像教材を使用した授業についての概要や各授業での詳細について述べる。3節では、授業準備・授業中・授業後の各段階での教師側からの気づきについて、4節では、授業についての学生側からの意見を、アンケートとフォローアップインタビューをもとに分析する。

2. 授業の概要

2.1 全学日本語コースの概要

徳島大学国際センターでは、大学院生、研究生、研究者やその成人家族を対象に全学日本語コースを開講している。レベルは初級から中・上級まであり、初級はA1・A2・B1・B2の4つのクラスに分かれている。中級にはC1・C2があり、必要に応じて上級のDクラスが開講される。授業は基本的に週2回行われ、国際センター所属の教員によって運営されている。

徳島大学は大きく分けて2つのキャンパスに分かれている。常三島キャンパスには、総合科学部と工学部があり、蔵本には医学部、薬学部、歯学部がある。全学日本語コースは両方のキャンパスで同時に開講されており、留学生はプレイスメントテストに合格すれば、各自の状況に応じて授業を受講することができる。

本稿の映像教材を用いた授業は、蔵本キャンパスのC1クラスで行われた。蔵本C1クラスは『みんなの日本語』第一本冊と第二本冊（以下I・II）が終了した留学生を対象にしたクラスで、中級クラスの位置づけがされている。授業開始当初は12名の登録があったが、研究や実験などの理由で、映像の授業が行われたときには2名が定期的に授業に参加している状況であった。

映像教材を使った授業に参加したこの2名の留学生は、学期の初めにプレイスメントテストを受け中級レベルと判定され、2009年度秋期のC1クラスを受講している。共に女性の医歯薬系の留学生で、母語はそれぞれモンゴル語と中国語である。

蔵本Cクラスでは『みんなの日本語中級I本冊』が使われている。これはA1からB2までのクラスで『みんなの日本語初級I・II』が使われており、語彙や文法項目で継続性があり学生にとって見慣れた教科書であること、体裁としては文法項目中心ではあるものの授業では教師が必要に応じて発展させやすい内容であることなどを考慮して選択された。

全学日本語コースは、半期で10週20回程度行うことになっている。蔵本Cクラスでは『みんなの日本語中級I』を1年で終わるように計画を立て、今期の蔵本C1クラスではこの教科書の前半の第1課から第6課までを学習した。

2009年度秋期（2009年10月20日～2010年2月2日）では、教科書に基づいた授業以外に、他の活動ができる時間を数時間設けることができた。そこで、既習の文法項目や慣用表現を使ったロールプレイも取り入れたが、専門に配慮した映像教材を試験的に導入してはどうかということになり、本研究を行うことにした。

今回、教材に使う映像は「医・科学系」に絞ることとした。対象が医歯薬系の留学生であるため、授業ではこれまでも医療用語が含まれた例文、医療関係の場面設定、語彙などを積極的に使用してきた。これは、留学生の実際に日本語を使う場面を想定したこと、また留学生の動機づけを高めるために行っていた。今回の映像教材の提示でも、学生の興味関心はおそらく医学系のものにあるだろうと想定し、医科学系の番組から3つの映像を準備した。

2.2 映像教材を使った授業について

映像教材を使った授業は、コース全体の全19回の授業のうち、後半の3回（90分×3回）を使って行われた。実施日は2010年1月19日、26日、29日の3日間である。

映像素材として使用した具体的な番組・DVD名は、次のとおりである。なお、放送日等詳細は本稿末に掲載した。

- 「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）
- 「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）
- 「プロフェッショナル・仕事の流儀」（「鳥インフルエンザを封じ込めろ」）

いずれの番組も時間が長く全部を視聴するには無理があるため、教室での視聴は学習者の負担を考慮して、内容的にまとまりのある5分程度を基準に抽出することにした。

実施にあたっては2名の教師が交代で授業を

行った。ほぼ同じ条件下で3つの映像教材を見せ、学習者にとって「役に立つもの」、「興味があるもの」を調べるために、事前に綿密な打ち合わせを行い、授業形式などの統一を図った。統一した点は(1)視聴前活動(2)授業形式(3)配布資料の3点である。

(1) 視聴前活動について

今回の映像教材は医・科学系の専門用語が多く、普段の学習内容とは全く異なるため、学生にとっては理解しにくいものであることが予想された。そこで、視聴の前には導入として、必ず以下の3点を行うこととした。

1. 英語・中国語訳付きの語彙リストを配布。全員で音読しつつ語彙の確認を行う。
2. 学生に意味や使い方が分かり難い語彙がないか尋ね、そのような語については例文を提示しつつ理解を図る。
3. 視聴の前には、必ず「視聴のポイント」を提示する。

(2) 授業形式について

基本的な授業の流れは、次の通りである。

[導入]

1. それぞれのテーマを意識化させるためのQA
2. 語彙の確認(語彙リスト使用)
3. 視聴のポイントの提示

[展開]

1. 通し視聴(1回目)
2. 内容の理解度の確認
3. 文法の学習(タスクシート使用)
 - ・音声を聞きタスクシートの穴埋め
 - ・短文の作成など学習活動
4. 内容の確認(質問シート使用①)
5. 通し視聴(2回目)

[まとめ]

1. 内容の最終確認(質問シート使用②)
2. アンケートの実施と回収
3. 映像教材に基づいた話し合い

ただし、実際の授業ではそれぞれの内容に応じてカスタマイズした点もある。これについては、項を改めて述べる。

(3) 配布資料について

配布資料は、以下の物を統一して揃えた。

1. 語彙リスト(英語・中国語訳付き)

2. タスクシート

中級の学習項目を抽出し、その部分を空欄にした問題など。主にリスニング時と文型練習時に使用。

3. 質問シート

4. 全文スクリプト

学生が帰宅後、各自で授業の振り返りをするために配布。

授業案、ならびに配布資料、アンケートについては、本稿の最後に授業1回分を資料として添付する。

次に、それぞれの番組の内容と特徴、および授業を実施するにあたってカスタマイズした点を説明する。

2.2.1 授業①

「解体新ショー」(「女性には赤いバラを」)

このテレビ番組は、男性と女性では生まれつき持っている染色体の数が違うため、「赤」という色の見え方が異なっていることを最新の研究に基づいて紹介したものである。内容は比較的難しいが、図解が多くお笑いタレントが進行役を務める娯楽性の強い番組である。

語彙としては「染色体」「遺伝子」「遺伝情報」「細胞」などの専門用語が多く使われており、これらは特に語彙リストに取り出して学習した。文法では、①連体修飾節 ②「一方」 ③「VというN」をタスクシートに抽出し、リスニングと文型の学習を行った。

この授業ではまず学習項目に焦点を当て、タスクシートで文の作り方を練習してから、リスニングで空欄を埋めるという手順で学習した。

2.2.2 授業②

「サイエンス ZERO」(「疲労に迫れ」)

この番組は、疲労の正体や疲労と脳との関係を一般向けに紹介した科学番組である。説明は図を用いて解説される部分もあるが、その割合は授業①の「解体新ショー」よりも少ない。

語彙では「視覚野」「聴覚野」といった脳に関係する専門用語や、「感覚」「刺激」「機能が低下する」などの語を語彙リストに抜き出して学習した。文法の学習では、①「～かどうか」 ②「～しようとする」 ③「NのようにV」 ④「～たにも関わらず」をタスクシートで学習した。この授業では、まずリスニングでタスクシートの穴埋めをしてから、学習項目を短文作文

などで学んだ。

2.2.3 授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」(「鳥インフルエンザを封じ込めろ」)

この番組は、WHO でメディカルオフィサーとして働く新藤奈邦子氏の仕事を紹介したドキュメンタリーである。特徴としては、ナレーションが短く簡潔で、文体は常体を使用している。また、難しい専門用語も多いため、中級の学習者にとっては難易度がかなり高いものといえよう。語彙リストには「ラッサ熱」「リンパ腺」「隔離病棟」「体液」などといった言葉を抜き出し学習した。

この授業を行うにあたり、特にカスタマイズした点は以下の2点である。

- ・授業①②では「[展開] 4. 内容の確認」で初めて使用した質問シートを、この授業では「[展開] 2. 内容の理解の確認」時から前倒しで導入して使用した。これは番組の難易度を考慮し、学生に前もって目に見える形で手掛かりを提示しておく必要があると判断したためである。

なお、この質問シートは2回目の通し視聴直前にも再度用い、内容の最終確認時を含めると全部で3回使用した。

- ・授業①②ではタスクシートで「文法」を扱ったが、この授業では「文章の特徴」を扱った。

この番組のナレーションは一文が大変短く、中級で扱う文法項目がほとんど現れない。そこで、中級の学習者向けには、このような短い文章がもたらす効果に気付かせる学習活動を試みることにした。

3. 教師の気づき

本節では、実際に授業を準備・担当した教師の気づきをもとに、授業の準備段階・授業中・授業後の各段階において、日本語教師が映像教材を授業で使用する際の注意点・困難点について考える。

3.1 準備段階

まず、準備段階における教師の気づきとして多く挙げられたのは、「授業の準備のための負担が予想以上に大きい」という点であった。3回の授業後のコメントで重複するものが多いため個別の紹介は省略するが、この準備とは、大きく「①映像教材を作成するための準備」と

「②授業で映像を見せるための準備」の二つに分けることができる。

今回、「①映像教材を作成するための準備」としては、各授業で次のような作業を行なった。

映像教材作成のための準備 (時系列順)

- ① テレビ番組・DVD の選択
- ② 授業で扱う場面 (5分程度) の選択
- ③ 映像の文字起こし
- ④ 語彙の確認
- ⑤ 語彙リストの作成 (語彙の中国語訳、英語訳の添付)
- ⑥ 文法項目の確認 (既習/未習, レベルの確認)
- ⑦ 授業案の作成
- ⑧ タスクシートの作成
- ⑨ 映像の切り取り (視聴映像全体と各タスクシートでの使用部分)
- ⑩ 質問シートの作成

様々な作業がある準備工程の中でも、まず、テレビ番組・DVD を探し選択することが第一の壁であった。映像教材として使うためには、今回の授業の目的である、「学生が興味をもちそうなテーマ」「学生の専門につながるようなもの」という基準だけをクリアすればよいというだけではなく、実際には内容や語彙の難易度など、さまざまな確認すべき事項がある。生教材であるテレビ番組・DVD が、学習者にとって理解しやすい日本語で構成されている・配慮がなされているということはないため、授業の担当者が映像がクラスで学習できるレベルかどうかを判断しなければならない。

また、テレビ番組選択に関しては、「取り扱える媒体に制限がある」「映像収集の大変さ」ということも障壁の一つである。現在では、Web上で過去に放送した番組を購入し視聴することができるシステム(「NHK オンデマンド」など)が各テレビ局で採用され、数多くの現在・過去のテレビ番組にアクセスすることが可能である。しかし、これらの番組は、著作権上の問題から録画が認められていないことが多いため、授業での使用は難しい。つまり、「使いたい番組」が「使える番組」とイコールではないということである。今回の試みでは、教師が録画していたテレビ番組、および放送後に市販されているDVDから授業を作成した。ただ、授業の再生可能性という点から考えれば、市販されているDVDなどの媒体を使用する場合には問題は少ないが、個人が録画したテレビ番組を使用した場合には、映像の紛失などの問題が

一旦起きれば、授業のための資料が手元にあったとしても作成された授業資料がその後使用できなくなるといった恐れも高くなるだろう。

また、準備段階で大変なこととしては、授業で使用する資料等の作成に関する問題も挙げられる。映像を使用する授業では、教科書等を使用する授業よりも多くの資料を作成することになる。さらに、資料を作成する前段階として、番組の使用部分の文字起こしをし、文型や語彙について確認をするといった作業も必要であり、教師にとっては負担が大きい。また、今回の授業においては、語彙リストの訳だけでは理解が難しいと思われる語彙（「等高線」「濃い・薄い」「微妙」など）を説明するために、絵や実物を見て理解できるものを用意するなどの配慮も必要とされた。加えて、授業で取り扱いがしやすいように、映像を適切な長さに加工する必要もある。これには、パソコンに映像を取り込み、ソフトウェアを使って使用したい部分だけを切り取るという作業が含まれた。以上が、「①教材を作成するための準備」に関わる問題点である。

さらに、「②映像を見せるための準備」として、教室で使用できる機材の確認や、パソコン、プロジェクタ等のセッティングも行った。

今回の授業で使用した教室は、映像教材を見せるための設備が十分ではなく、授業のたびに教師が必要な機材を持っていき、セッティングをしてから授業を行なう必要があった。これは映像等を授業で取り扱う授業では通常行なわれている作業であり、機材を扱うことが苦にならない教師にとってはそれほど負担にならないと思われるが、機材の扱いに慣れていない教師はこの種の作業を面倒だと考え、映像を使った授業を行なう障壁と考える場合も少なくないだろう。

3.2 授業中

授業中の教師の気づきとしては、主に、個々の授業での問題が報告された。具体的な内容について、以下の表に記す。

授業①	<ul style="list-style-type: none"> ・受講者の日本語レベルに差があったため、授業の進行に配慮が必要だった。 ・文法の学習中に、短文がなかなか作れなかった。タスクの順番を変えたほうが良かったかもしれない。(今回は[作文→リスニング→タスクシート]の穴埋め)の順) ・予想以上にディクテーションができなかった。普段の授業でのリスニングと比べて歴然とした差を感じた。(特に「という」の聞き取り。) ・質問シートの問題に答える際、「映像からわかったこと」を答えるよりも、「タスクシートで抜き出してある文を読んでわかったこと」を答えていたような気がする。
授業②	<ul style="list-style-type: none"> ・導入部分で、留学生からたくさん発話があった。 ・文法の学習がスムーズだった。既習文型が多かったからなのか、教える順番のせいなのか？([リスニング→タスクシート]の穴埋め→作文)の順で実施) ・内容が難しかったのか、一回目の通し視聴ではほとんど聞き取れなかった。QAもほとんど答えられず、前回とは違う。
授業③	<ul style="list-style-type: none"> ・準備は大変だと感じたが、授業自体は意外なほど楽にできた。ただ、短い授業時間の割に使用する資料が多く、配布に手間取る場面も。 ・語彙が留学生にとっては予想以上に難しいと痛感。授業では、口頭で例文を提示し、説明した。(リストの読み上げだけでは、難しい) ・「文体」についての気づきを求めたが、やはり難しかったようで、教師側からの説明に終始した。 ・使用する映像を事前に切り取っていたため、授業での機器の取り扱いに手間取ることはなかった。

授業①と②については、同じ教師が連続して担当したため、授業でのコメントについても連続性が見られる。使用した映像の違いによって、よく聞き取れたもの・そうでなかったものの差はやはりあるようだ。

また、タスク・文法については、すべての授業で共通して反省のコメントが出された。提出順序によって回答に差が見られた、タスク自体が難しかったのではないかなどといった点である。これらについては、今後、再検討・改善が必要であろう。

授業中の機器の扱いについては、特に「難しかった」というコメントはなかった。映像の頭出しで無駄な時間を作らないために、事前に映像を切り出す作業をしておいたことが効を奏した結果であろう。

3.3 授業後

授業後の気づきについては、映像教材を使った授業全体の運営に関わる反省、個別の授業への反省などがコメントとして挙げられた。その具体的な内容は、右の表の通りである。

授業における個別の反省で多く見られたコメントは、「ポイントになる語彙の定着ができていれば」、「語彙リストの情報を増やしてはどうか」といった、語彙に関することだった。また、授業後に、学習者から映像についてのコメント、感想などが寄せられたという点も興味深い。「運用に結びつきにくい」といわれる映像を使った授業でも、授業で学習した文法などをその後使用するという種類の運用ではなく、学習者の自然な発話を引き出すという「運用」については有効に働くのかも知れない。

映像教材を使用した授業全体についての反省として、アンケート実施の際の注意、授業間隔の短さへの指摘、ニーズ調査の必要性などが挙げられた。これらの点については、次回以降の課題として検討する必要があるだろう。一方、授業準備の負担の大きさに比べ、実際に授業を行なう負担は（機器の取り扱いも含め）それほど大きくなかったという回答であった。

授業①	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート記入時に、留学生が十分問題の内容を理解できていないのに記入を始めてしまい、後からもう一度質問の内容を確認するということがあった。注意が必要だと思った。 ・授業後に授業の感想や映像教材に関する感想が留学生の方から出てきて、有意義な話し合いが出来た。
授業②	<ul style="list-style-type: none"> ・導入段階で、「視覚」「聴覚」ということばをもっとしっかり定着させておけば、理解度がもう少し上がったかもしれない。 ・内容が難しかったようで、前回ののような活発な教室活動につなげることができなかった。
授業③	<ul style="list-style-type: none"> ・語彙が留学生にとって予想以上に難しいと痛感した。語彙リストには英語・中国語の訳をつけたが、やはり例文も加えたほうがよかったかもしれない。（授業中には例文を提示して対応） ・授業の準備自体は大変だったが、授業はスムーズに運営できた。機器の使用も問題はなかった。 ・授業後、留学生から「このビデオはどこで買えますか？全部見たいです。」という質問があった。 ・授業後、映像教材に関する感想の声は自然に上がった。映像教材のテーマについて会話が弾んだ。 ・短期間で3回の映像を用いた授業を行なったので、留学生に疲れもみられた。次回以降は、間隔を置いて授業を行なえれば良いと思う。 ・日本での生活で、どんな用途で・どのくらいの割合で日本語を使用するのか。留学生のニーズをもう一度調べなおす必要を感じた。

4. 学生の反応

学生の反応を調べるために、毎回の授業終了後にアンケート調査を行い、全3回の授業終了時には映像を使った授業全体についてのフォローアップインタビューも併せて実施した。

4.1 アンケートについて

アンケートでは、(1)今日の授業について、(2)今日の映像教材について、(3)興味・関心についての3点を留学生に尋ね、反応を調査した。(1)と(2)は授業を実施するたびに記入してもらったが、(3)は好きな番組の

傾向を調べるために初回のみ答えてもらうことにした。回答は5段階評価(5が最高)で答えてもらうものと、文章記述形式で答えてもらうものとの2種類を用意した。記述式の回答欄は、思ったことを自由に書いてもらえるように、英語や中国語での回答も可とした。

4.2 アンケート結果

4.2.1 今日の授業について

今日行った授業については、学生に次の4点を質問した。(1) 授業はよく分かりましたか、(2) 授業で難しいところがありましたか(自由記述)、(3) この授業は日本語が上手になるために役に立つと思いますか、(4) この授業は、みなさんの大学での研究や専門の勉強に役に立つと思いますか。(5段階評価+理由を自由記述)

授業①

「解体新ショー」(「女性には赤いバラを」)

授業の理解度は5段階評価で4と5であり、ほとんど理解できていた。「授業で難しいところがありましたか」という質問には「このような内容で勉強するのは初めてだったので難しいと思った」、「ちょっと(スピードが)速かった」との回答が見られた。

「日本語が上手になるための役に立つと思いますか」、「研究や専門の勉強に役に立つと思いますか」という質問には2人ともそれぞれ5と高く評価しており、その理由は以下の通りであった。

- ・今日の新しいことばは、(授業で)よく使いますから。私の参加している授業は全部日本語ですから、分かりにくいです。
- ・本で習う言葉は生活の役に立ちますが、今日の授業は専門の役に立ちます。

授業②

「サイエンス ZERO」(「疲労に迫れ」)

この映像教材は、3つの中で最も分かり難かった教材のようであり、留学生の理解度は5段階評価の2と3に止まった。「授業で難しいところがありましたか」という質問に対しては2人とも「ことばが難しかったため、内容が分からなかった」と記入している。

だが、このように分かり難かったと答えたにも関わらず、「この授業は日本語が上手になるために役に立つと思いますか」という問いに対しては5と3で評価しており、専門分野の日本語も出来れば分かるようになりたいという学

習者の心理を映し出した結果となった。

「この授業はみなさんの研究や専門の勉強の役に立つと思いますか」という質問については、評価が分かれた。上の質問で5と高い評価を付けた留学生は、「他の人に発表する時、意味が出るから(注:役に立つという意味)」という理由で、ここでも5と高い評価をしたが、一方、3と答えた留学生は「私の専門では、このことばはあまり使わないですから」とここでも2と低く評価した。

授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」(「鳥インフルエンザを封じ込めろ」)

この映像教材全体の理解度は、5段階評価では5と3であった。難しかったところとしては、『～だ』『～である』など、ことばが難しい「スピードが速い」ということが指摘されている。

「日本語が上手になるために役立つと思いますか」という問いに対しては2名とも5と高い評価をしており、また「研究や専門の役に立つと思いますか」という質問には4と評価している。その理由は、「今日の新しいことばは授業でよく使います」「日本で生活するのは便利になると思います」であった。

4.2.2 今日の映像教材について

ここでは、授業で使用した映像教材の内容が留学生にとって「面白かったか」、「理解できたか」、「難しかったところはどこか」という3点について調査を行った。理解できたかという質問については、さらに「a.授業で勉強した部分」、「b.授業で詳しく勉強しなかった部分」と2つに分けて感想を求めた。回答欄は5段階評価で作成したが、「難しかったところはどこか」という質問のみ自由記述形式にした。

授業①

「解体新ショー」(「女性には赤いバラを」)

2人とも5段階評価の5で、この映像教材は面白かったと答えている。授業で勉強した部分についての評価は5と4で、ほとんど理解できていた。詳しく勉強しなかった部分については4と2で評価が分かれた。

難しかったところは、文法と日本語のスピードであった。

授業②

「サイエンス ZERO」(「疲労に迫れ」)

「面白かったですか」という問いに対する答

えは、5段階評価で4と3であった。内容理解度は、授業で扱った部分に関しては4と3であったため大体理解できたことが分かるが、授業で詳しく扱わなかった部分については2と4と評価にばらつきが見られた。

この番組で難しかったところを挙げてもらうと、語彙、文法、日本語のスピード、内容と多岐に渡ったため、このクラスの学生にとっては、やや困難な教材であったと考えられる。

授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」『鳥インフルエンザを封じ込めろ』

「面白かったですか」という質問に対する評価はそれぞれ5と4で、概ね好評であった。内容理解は、授業で扱った部分については5段階評価で5と4、詳しく扱わなかった部分は共に3であった。この映像教材で難しかった点は、語彙、文法、日本語のスピードであった。

4.2.3 興味・関心のある番組について

留学生が平素どのような番組に興味・関心を持っていて、授業で扱った映像教材のほかに、どのようなテレビ番組等の映像で日本語を勉強したいと思っているのかを調査するために、アンケート用紙の最後で、ジャンル別に選んでもらうことにした。

その結果、授業で取り上げてほしいジャンルとしては、ドキュメンタリー/教養番組、医療ドラマ、普通のドラマ、映画、クイズ番組、アニメ、ニュースなどが挙げられたが、自由記述欄には「日本の有名な所や面白い所を紹介してほしい」「ニュースが分からないので、授業でやってほしい」「人物や物などを紹介するような番組をしてほしい」との意見が寄せられた。

また、このような映像を使った授業については、もっと実施してほしいとの共通した意見が書かれてあった。

4.3 フォローアップインタビューについて

映像を使った全ての授業終了後、学生の生の声を聞くためにフォローアップインタビューを実施した。授業については、次のような意見や感想が出された。

- ・面白く勉強になった。映像を使った授業は、今後も時々やってほしい。
- ・授業②の映像教材は、ことばが難しかった。
- ・授業①は授業②に比べて分かりやすかった。図解による説明が多かったから。
- ・授業①の映像教材の内容については、授業後、研究室の先生や他の人にも話して聞か

せた。みんなは全く知らなかったもので、とても驚いていた。

- ・授業③はドキュメンタリーで面白かった。またこのようなものが見たい。
- ・映像教材の内容は、医・科学系に特定しなくてもかまわない。普通のドラマにも面白いものがあると思う。
- ・ドラマの日本語は日常使う言葉なので、特に教室で扱う必要はない。それに比べ、テレビのニュースは未だに分からない言葉が多く、あまり理解できない。教室で扱ってもらえれば有難い。

また、今回使用した3つの映像教材を難易度順に挙げてもらったところ、一人の学生(学生A)は、一番難しかったのは授業②で、次に授業①、授業③の順であった。もう一人の学生(学生B)が一番難しいと思ったのは、同じく授業②であったが、その次は授業③、授業①の順であった。そこで、一番面白かったものを尋ねてみると、学生Aは授業③、学生Bは授業①と答え、ここから、それぞれが一番易しいと思った映像教材が一番面白いと思ったものと一致していたことが判明した。

さらに、タスクシートに抽出した文の長短が、内容の理解度を左右したかどうかについても質問を行った。タスクシートは、本来学習項目だけに焦点を絞って準備したものであるが、文のまとまりという観点から見直してみると、授業①のものが最も長く、他の2つの授業のものは数行ずつ部分的に抜き出しただけのものであった。これについては予想通り2名から「抽出した文が長いほうが内容理解もしやすかった」という回答が得られた。

4.4 アンケートとフォローアップインタビューの結果についての分析

留学生に対するアンケートとフォローアップインタビューの結果、以下のことが明らかになった。

映像を使った授業に対する反応は概ね良く、今後もこのような授業を時々実施してほしいと考えている。教科書を使った授業は日常生活を送るための役に立つが、今回実施したような医・科学系の映像教材は大学での研究や専門の勉強の役に立つと思っている。ただし、内容が自分の関わる分野と離れ過ぎている場合には、意義が感じられない場合がある。

授業で取り上げてほしい分野としては、ドキュメンタリー/教養番組、医療ドラマ、普通のドラマ、映画、クイズ番組、アニメ、ニュースな

どが挙げられたが、フォローアップインタビューでは、とりわけドキュメンタリー/教養番組、医療ドラマ、普通のドラマ、ニュースといったジャンルに対する要望の声が強かった。

医・科学系の映像教材の場合、使われている語彙が難しいことが難点の一つとして挙げられる。授業で扱った映像教材の内容をある程度理解し、さらに面白いと思えるかどうかは、個人の嗜好や専門と密接な関係があるようだ。3つの教材のうち、学生Aは授業③が一番面白く分かりやすかったと答えているが、フォローアップインタビューの結果、平素からドキュメンタリー番組を見るのが好きなことが分かった。また、学生Bは授業①が一番面白く分かりやすかったと答えているが、フォローアップインタビュー時に、「授業①は、自分の専門でよく使う語彙が多用されていたから面白かった」と話している。

その他、内容の理解度を上げるためには、図解を多用した映像教材を取り上げたり、タスクシートである程度まとまった文を塊で抜き出すといったことも効果的であることが、今回の結果から明らかになった。

5. 終わりに

本研究は、教科書を使用しない時間を使って、中級レベルの留学生に日本語学習に対する一層の意欲を持たせる方法を模索する視点から始まった。特に対象が医・科学系の留学生であるため、専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる活動を考えた。これまでの教室活動とは異なる映像教材を使うことで、学生の学習の動機付けも高まると予想した。そこで、医・科学系の映像教材3つを準備し、実際に授業を行い、教師と学生の双方から授業の内容などについての意見を聞いた。今回は授業への参加人数が少なかったため、映像教材作成の流れと学生の反応の傾向を見る研究になった。

教師の感想からわかったことは、映像教材を準備する手間と難しさがあるということだ。映像素材を見つけ、それを分析して教材化することは確かに手間と時間がかかる。しかしながら、このような作業を通して、教師はどんなカリキュラムやシラバスで日本語を教えていくのかを考える機会を持つことができる。当然教科書をベースにした授業は大切であり効果的だが、このような新しい試みを行うことで、自分の授業の内容、教え方、情報の提示の仕方などを振り返り、効果的な授業形態を考え直すことができる。事実、この映像教材を使った授業を行う

ことで、筆者である我々日本語教師3名は何回もミーティングを開いて共に教材を作成する機会を持つことができ、授業後には授業の振り返りをすることもできた。

学生の反応はおおむね好評だったと言えよう。学生の専門に完全に合致したものではなかったものの、比較的彼らの関心や興味に近い素材を通して日本語の学習を進めることができ、学生の満足度も高かったと思われる。

一方、今回の試みから様々な問題点と課題が浮かび上がった。まず、この授業の計画当初から考慮していた点だが、このような映像教材を使用したクラスが、日本語の「運用能力」にどのようにつながるかという問題である。映像教材を使用した授業の弱点は、映像を見てそれを理解しただけでは、日本語の運用につながらないという点にある。映像を見るという行為自体には、能動的な働きかけは少なく、必ずしも「使える日本語」には直結しない。この点を考慮し、今回の試みでは、当初から留学生が将来出会うかもしれない専門的なトピックを選び、それが自分たちと関係していることを自覚させることを考えた。学んでいる内容—語彙や文法を含めて—を自分の中に取り込む作業をしてほしいと考えた。アンケートからみると、この目的はある程度達成できたのではないかと考える。また、視聴後には見たことをトピックとして会話につなげることができた。今後の課題の一つは、映像教材をどのように「運用能力」の向上につなげるかということである。

別の課題は、医歯薬系の留学生だから医・科学系の映像が効果的であるとは安易に断言できないことである。アンケートではこのような“難しい専門的な”内容ではなく、ドラマやニュースを使って授業をしてほしいという声もあった。本研究で課題としたのは、留学生のニーズにあった授業ができたかどうか、ということである。少しでも専門に近い教材を使えば留学生の興味や関心、日本語への動機づけが高まり、日本語学習が進むと考えたが、実はこの試みをする前段階で留学生のニーズを的確に把握することができていなかった。そのために、留学生に興味があるだろうと考えたものが、実際にはそうではなかった、ということもありうる。

今後の課題は、まず留学生のニーズ調査を行うことである。医歯薬系の留学生は生活の中でどのくらいの割合で日本語を使っているのか、例えば授業、ゼミ、先生との会話、家族や友人との会話の際に、どの程度日本語を使用しているのか、また必要とされているのかについて詳

しく調査したい。そうすることで、留学生が直面する日本語使用の具体的な場面を探ることができ、使用すべき教材の内容や難易度も知ることができるであろう。

加えて、映像教材の弱みのひとつである使用方法についても検討する必要があるだろう。映像素材は多くの場合「旬」の情報を提供するものであり、放送後（あるいはビデオ・DVDのリリース後）その情報は古くなってしまふ。「数回の使用のみで教材が使われなくなってしまう可能性」があると小原(2007)も述べている。教材作成の負担が大きい割には、長く使うことが難しい面もある。このような問題点に関しても、内容や素材などを含めて検討を続けていきたい。

今回の試みでは、教材の選択、作成、授業での実践、教師の振り返りと学生の反応の記録を残すことができた。一連の流れを把握し、いくつかの課題を見つけることができたので、今後はさらに学習者のニーズに配慮した効果的な映像教材の選択と作成を行い、学生に合った新しい映像教材の開発を行っていきたい。

【使用番組・DVD】

- 授業① 「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）NHK 2008年12月19日放送
授業② 「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）NHK 2008年9月26日放送
授業③ 「プロフェッショナル仕事の流儀—WHO 医師進藤奈邦子の仕事 鳥インフルエンザを封じ込めろ」2006年 NHK DVD

【参考文献】

- 有賀千佳子(1990)「中級における映像教材活用の可能性—ドラマ素材を用いた授業の一例」『日本語教育』71, pp.210-224, 日本語教育学会
石黒圭(2004)『よくわかる文章表現の技術I 表現・表記編』明治書院
石黒圭(2007)『よくわかる文章表現の技術V 文体編』明治書院
大坪一夫(1996)「日本語教育における録音・録画教材の利用」『日本語学』15巻4号, 明治書院
小原律子(2008)「日本語教育における学習素材としての映像メディア:映画・テレビ番組の教材化」『倉敷芸術科学大学紀要』13, pp.205-214, 加計学園倉敷芸術科学大学
加藤由香里(1999)「会話授業におけるメディアに対する性格づけについて」『ICU 日本語教育研究センター紀要』8, pp.47-57, 国際基

督教大学

国立国語研究所日本語教育センター(1992)『映像教材モニター報告』国立国語研究所日本語教育センター日本語教材開発室

小林典子(1990)「テレビドラマによる聴解授業の実践報告:「生」教材を初級後期, 中級, 上級で使用して」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』5, pp.99-113

高橋純子(2006)「テレビドラマ聴解の授業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』21, pp.77-96, 筑波大学留学生センター

田中恵子(2007)「テレビ番組のビデオを用いた聴解授業」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』3, pp.36-49

中道真木男(1991)「日本語教育と映像教材」『日本語学』10巻9号, 明治書院

保坂敏子・土井真実(2001)「映像素材を使用した学習活動に対する学習者から見たピリーフ:教室場面の学習活動の場合」『小出記念日本語教育研究会論文集』9, pp.25-39, 小出記念日本語教育研究会

山下早代子(1992)「ビデオ教材の可能性:ICU初級日本語映像教材“イメージ”(試用版)をめぐって」『ICU 日本語教育研究センター紀要』2, pp.143-154, 国際基督教大学

吉岡英幸(1992)「専門教育への橋渡しのためのビデオ教材の可能性」『講座日27分冊』, pp.18-30, 早稲田大学日本語研究教育センター

インターンシップの取り組み —アジア人財資金構想における役割—

村上和義

橋本智

MURAKAMI, Kazuyoshi

HASHIMOTO, Satoshi

徳島大学国際センター

要旨：

アジア人財資金構想事業において、インターンシップは重要な役割を占める。企業内での実体験は、留学生に日本で生活する社会人として必要な特質や能力を自覚させ、専門分野の勉強・研究だけでなく日本語能力を伸ばすための一層の動機づけを与える。一方、参加企業を開拓することや学生の専門とのマッチングなど、多くの課題も見られる。さらに、事業の「自立化」に向けての課題も多い。

キーワード：アジア人財、インターンシップ、社会人基礎力

1. アジア人財コースについて

アジア人財資金構想は、経済産業省の支援のもと、日本と世界各国との相互理解や経済連携を強めそれらの国々との懸け橋となるような優秀な人材を育成することを目的とした事業である。徳島大学では、経済産業省四国生産性本部からの委託を受け、大学として平成20年度から高度実践留學生育成事業に参加している。

アジア人財資金構想（以下、アジア人財）では、主に次の四つを大きな柱にしている。

- ① 産学連携専門教育
- ② ビジネス日本語教育
- ③ 日本ビジネス教育
- ④ 就職支援等のプログラムの提供
（『アジア人財資金構想』）

①の項目に関しては「高度専門留學生育成事業」にのみ適用されるため、本学でのアジア人財事業では、②から④までのものが中心になっている。

徳島大学では、平成20年度（第1期生）に5名、21年度（第2期生）に5名が参加し、主に週3回の授業を行っている。授業は、AOTSの共通カリキュラムマネージメントセンターが作成した教材を、本学のアジア人財コースに合わせてカスタマイズしたものを使って主に行われている。

2. インターンシップの位置づけ

アジア人財は、優秀な留學生が国内の企業や海外の日系企業に就職するためのサポートを行う。それで、「インターンシップ」はアジア

人財のコースでは重要な役割を担っている。『アジア人財資金構想』パンフレットには、インターンシップに関して、次のように説明されている。

コンソーシアム参加企業のニーズと留學生の資質・専攻・ニーズをマッチングすると共に、インターンシップの進捗状況の確認や事後のフォローアップなどを行って、実践的な能力を効率的に身につけるインターンシップを実施します。

通常、インターンシップは「学生が自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」（『インターンシップ・ガイドブック』）であり、大学が正規の教育課程として、あるいは行事の一環として行ったり、インターンシップ・プログラムに個人で参加する場合などがある。インターンシップが直接就職活動につながるわけではないが、インターンシップを経験することで学生は実体験に基づいた多くのことを学べる。

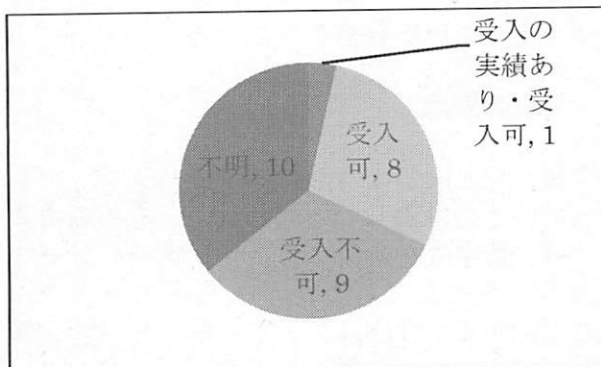
アジア人財コースに参加している学生は留學生であるため、日本人との円滑なコミュニケーションの方法を学ぶ必要がある。また、日本人にとっては常識だと思えることも、留學生にとってはなじみのないものも少なくない。特に会社内でのビジネスマナーや習慣などは、大学の講義では学べないものであり、それを実体験できるインターンシップは非常に貴重なものである。インターンシップは「社会人基礎力」—例えば、「働きかけ力」、「傾聴力」や「規律性」など—といわれる能力を学生に再認識させ、それらを身につけるよう動機づけを与える良い機会となる。

3. 徳島大学におけるインターンシップ

3.1 キャリアコーディネーターの役割

徳島大学のアジア人財事業ではキャリアコーディネーターを一人配置し、就職支援やインターンシップの実施をおこなっている。このキャリアコーディネーターが徳島県内企業を中心に企業訪問を行い、アジア人財の内容の理解を図り、インターンシップの受け入れを要請した。参加学生には専門性と将来の就職希望職種をヒアリングし、可能な限りインターンシップ先企業とのマッチングに努めた。

平成21年度には28社を訪問した。その中で留学生のインターンシップ受け入れを前向きに検討してくれる企業は8社あった。訪問した企業の中には、もともとインターンシップの日本人学生を受け入れていない、あるいは受け入れているが日本人学生のみ可能といった企業があった。現時点では留学生のインターンシップの受け入れ企業は少ないものの、インターンシップ学生の受け入れ方法が分からない、どのようなプログラムを提供すればいいのかわからないといった声も聞かれ、大学側から具体的な雛型を提示するといった方策をとることによって、インターンシップ受け入れの企業を増やすこともできると考えられる。



3.2 インターンシップの実施

3.2.1 実施の流れ

平成21年度のインターンシップは次のように行われた。

① 受け入れ企業開拓

昨年度開拓した県内企業との一層の親密化を目指した。本年度は、国際業務に係る企業としてジェトロ徳島の情報を活用し、海外進出企業や貿易取引企業を中心にキャリアコーディネーターが訪問依頼した。

② マッチング

学生面談の実施、学生のヒアリングの後、専攻科目、研究内容によりインターンシップ実施企業を検討した。就職希望業種とのマッチングを図った。

③ 参加学生への指導

経済産業省作成の留学生インターンシップ支援マニュアルを活用した。また、通常の授業では、AOTSが作成した教材「B2 インターンシップ・プロジェクト」を使って、インターンシップに関する指導を行った。内容は、インターンシップをする理由、体験談、基本的なマナー（言葉の使い方）、ビジネスマナー、敬語、手紙の書き方などである。ロールプレイを交えながら、実際的な場面を想定して授業を行った。

学生には履歴書の書き方を指導し、それを受け入れ企業に提出した。合わせて、参加申込書を書き、誓約書に署名し提出した（参加申込書及び誓約書は本稿末に添付）。

④ インターンシップ受け入れ調整と準備

当初、県内大手企業にインターンシップの受け入れを依頼していたが、直前になってインフルエンザの流行により、業種上安全第一ということで中止となった。急遽、別の企業に受け入れを依頼した。また、学生の専攻科目により、電力関係と建設コンサルタントの会社でも実施することにした。実施直前には、学生に対して日誌の記録の仕方などを含めた最終的な説明を行った。

⑤ インターンシップ期間中

インターンシップ初日はキャリアコーディネーターが受け入れ企業を訪問し、期間中の指導を依頼した。留学生には積極的に質問して、日本企業をよりよく理解するよう指導した。

⑥ インターンシップ事後フォロー

留学生からインターンシップ日誌と感想を報告書にて作成してもらった。また、インターンシップ参加者の報告会を10月23日に開催した「アジア人財資金構想留学生就職支援フォーラム」において実施した。当日は、インターンシップ受け入れ企業の担当者を招いて、インターンシップ受け入れの感想を直接ご報告いただいた。

⑦ インターンシップ修了のお礼

インターンシップ終了後、企業へキャリアコーディネーターが直接訪問し、会社の代表者、研修担当者に感謝の意を表すと共に、今後の支援を依頼した。

3.2.2 実施日と内容

前述のとおり、本年度4名が参加する予定だったインターンシップはインフルエンザの影響で、企業から開始数日前に中止の通知があり、急遽別の企業をお願いすることになった。

平成21年度のインターンシップの実施は次のとおりである。

- ① 平成21年8月31日～9月4日 1名
研修概要：
自分の専門に関する実験を行い、社員の前で実験結果をプレゼンテーションした。
- ② 平成21年9月7日～9月9日 4名
研修概要：国際貿易の基礎的知識を学び、貿易の各書類の作成を行った。
- ③ 平成21年8月24日～8月28日 1名
研修概要：実験調査報告書に関する勉強とデータ分析を行い、その結果を発表した。

4. 学生の振り返り

インターンシップ終了後に、インターンシップ全体に関して学生にコメント・感想を書いたもらった。その内容は以下のとおりである。

①会社・仕事に関して

- 日本企業は人間性を大事にし、科学技術を重視していることを学んだ。
- 実験のプロセスおよびやり方に対して、実質的な認識ができた。
- 日本人の仕事に対しての真面目な態度・謙虚な気持ちが勉強になった。
- 短時間に仕事を仕上げるために、報告すること、締切りを守ること、相談することの大切さを学んだ。
- 素晴らしい研究の雰囲気と研究に対する熱意を感じた。
- 仕事には高い責任感が必要であることを学んだ。
- 中小企業にも高い経営能力と世界に通用するような技術力があることが分かった。
- コツコツ働けばそれだけ収穫できると言われるが、辛いことも耐える能力が必要だと思った。
- 人の名前をしっかりと覚えるといった、社会人としてのマナーをしっかりと身につけた。

②自分自身に関して

- 社会人としての基礎的マナーがきちんとできるようにしたい。
- 自分のミスで他人に負担をかけないように気を付けたい。

- 実際の職場を体験して、学生という立場の甘さを痛感した。
- 将来は研究者になりたいが、今は能力がまだまだ足りないと感じた。
- 専門の基礎知識と、日本語でのコミュニケーション能力不足である。
- 自分の強みをもっと磨いて、就職活動の武器にしたい。
- ビジネスマナーとコミュニケーション能力のアップを図りたい。
- 日本語をしっかりと勉強し、日本の会社に就職するために頑張りたい。

コメントから分かることは、学生たちが日本の会社で実際に働く日本人を見て、彼らのまじめさ、真剣さ、責任感などの、社会人として求められる能力を認識できたことである。これは、大学の授業やゼミでは十分学ぶことのできない貴重な体験であり、インターンシップを行う意義でもある。

加えて、インターンシップ後の感想で多かったのは、自分たちの日本語能力の未熟さである。学生であれば日常会話ができ、教員や友人と専門の話がある程度できればよいが、日本の企業に就職し日本人とともに働く際には、かなりの日本語能力が求められる。頭では分かっているが、実際にインターンシップに参加することによってそのことが自覚できただろう。

5. 今後の課題

今後、今と同じよう形でインターンシップを行っていくのは難しいと思われる。その理由の一つは、留学生を対象にしたインターンシップをどのようにして行うかがまだ定まっていないことである。今回はアジア人財コースの一環として行ったため、キャリアコーディネーターや指導教員がサポートできたが、アジア人財のプロジェクトが終了したときに、どの部署がどういった方法で行うのか。つまりアジア人財の予算終了後の「自立化」に向けて、どうインターンシップを位置付けるかを検討しなければならない。大学としては留学生を積極的に受け入れる体制にあるために、「入口」の部分は整備されてきている。一方、留学生の卒業、研究科終了後の支援、つまり「出口」の部分の体制整備にもっと目を向けている必要があるだろう。

また別の問題は、受け入れをお願いする企業を探すことである。まず、一般的なインターンシップ自体を受け入れている企業があまり多

くない。要請がない、必要を感じない、効果が期待できない、どのようにしたらいいのか方法が分からない、などといった理由でこれまで受け入れをしておらず、これからもその予定がないと答える企業が見られる。さらに、日本人学生は受け入れていても、留学生の受け入れ実績もないし、これからも受け入れる予定はない、と回答する企業も数社あった。日本文化をまだ十分に把握していない留学生にとっては、企業といった実社会を体験することは教科書を読むよりはるかに効果的である。一方で、受け入れる側の企業の心配も理解できる。留学生を対象にしたインターンシップを地元企業との間で引き続き行うのであれば、企業への理解を求める取り組みをさらに進めていく必要があるだろう。

別の課題は、学生の専門と企業がうまくマッチングしないことである。学生が地元の徳島地域でインターンシップをしようとした場合、学生の研究の専門とその分野に近い企業を見つけるのは難しい。そのような場合、自分の専門ではないところにインターンシップに行き、一般的な説明や実習を受けることになる。その際、学生側の動機づけと企業側の負担に問題が生じる可能性がある。いつも学生の専門に合うインターンシップ先が見つかるわけではないので、そのような場合、どうすれば効果的なインターンシップができるかを検討すべきだろう。

本学では留学生関連の事業として、国際センターが請けおい、授業、就職支援、インターンシップなどを行った。今後は、教育内容に関しては、共通教育など既存の授業に内容を移し、より多くの留学生もこのプログラムから学べる機会を作っていく。一方、就職支援、インターンシップの部分においては、本学内の就職支援室など他部局との連携も積極的に図り、留学生に対する支援体制を拡充していきたい。

【参考資料】

- 『アジア人財資金構想』 (2009) アジア人財資金構想プロジェクトサポートセンター
 福島直樹・尾方僚 (2000) 『ホントに就職する前に「やりたい仕事」に挑戦できる！インターンシップ』 学生援護会
 文部省 (2000) 『インターンシップ・ガイドブック』 ぎょうせい

【資料1】

平成21年度インターンシップ受入れ企業開拓

製造業：	医薬品 (4)、建設資材 (3) 繊維製品 (4)、電気・機械 (4) 食料品 (1)、紙・パルプ (1) 木材製品 (1)、その他 (3)
商業：	卸・小売業 (2)
情報通信業：	情報 (1)
金融・保険業：	銀行 (1)
サービス業：	サービス (3)

合計 28 社

【資料2】

インターンシップ参加申込書

平成 年 月 日

学部		学科	学 年	
大学院		研究科・教育部	課程	学籍番号
ふりがな 氏 名				性 別 男 ・ 女
現住所 (マンション名等 まで詳細に 明記)	〒 - 携帯TEL () - 自宅TEL () - FAX () -			写 真 3×4 cm程度。 上半身。スナッ プ写真も可。裏 面に学籍番号・ 氏名を記入のこと 。
緊 急 連絡先 (親元等)	〒 - Tel () -			

授業科目名	
インターンシップ 実施企業名	
職 種	企画・調査・研究・開発・生産・流通・営業・販売・経理 その他 ()

(注) 職種の欄には○印を付けてください。(複数回答可)

1. 参加理由
2. 学びたい事柄

資格・特技等 (パソコン・ワープロ・英検等)

※ 本申込書は、インターンシップのみに使用し、他の目的には一切使用しません。
氏名等の内容については、徳島大学及び受入企業等において使用するものとします。

【資料 3】

誓 約 書

平成 年 月 日

殿

徳島大学 学部 学科
氏 名 _____

私は貴社（機関）において実習するに当たり、下記の事項を厳守することを誓います。

記

1. 貴社（機関）の就業規則及びこれをはじめとする諸規則に従う。
2. 貴社（機関）の諸規則を守り、管理、監督の指示に従う。
3. 貴社（機関）の名誉を毀損するような言動は行わない。
4. 貴社（機関）の営む事業を阻害するような言動は行わない。
5. 実習上知り得た貴社（機関）の機密は、一切漏らさない。
6. 故意または過失により、貴社（機関）に対し損害を与えた場合は、直ちに弁償する。
7. 自己の不注意により、万一災害を受けた場合は、貴社（機関）に迷惑をかけること
なく、自己の責任において処理する。

第二部

国際センター年報

第6号

第二部 国際センター 年報第6号

目次

2009年度の主な行事	51
日本語教育	53
日本語研修コース（大学入学前予備教育）	53
全学共通教育「日本語」・「日本事情」・「国際交流の扉を拓く」	58
総合科学部 日本語教育関連授業.....	64
全学日本語コース	66
アジア人財資金構想（アジア人財コース）	69
日本語教育シンポジウム	72
学生派遣関連	75
指導・相談関連	77
その他	78
徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）	78
国際交流サロン	80
サポーター制度	81
地域貢献	82
English Chat Room.....	84
教員出張（センター関連のみ）	85
留学生在籍状況	87
国際センター組織図	89
国際センター規則.....	90
国際センター運営委員会規則.....	93
学術協定校一覧（2009年2月1日現在）	96
国際センター人員名簿（2010年2月1日現在）	97

2009年度の主な行事

4月	21日	前期 English Chat Room 開始 (毎週火曜・木曜)
4月	23日	新入学留学生ガイダンス (常三島地区)
4月	24日	新入学留学生ガイダンス (蔵本地区)
5月	11日	全学日本語コース春期開講
5月	16日	アジア人財コース四国地区合同開講式
6月	13日	第1回日本語教育シンポジウム 「教育向けプレゼンテーションツールの研究」
7月	17日	全学日本語コース春期終了
7月	23日	前期 English Chat Room 終了
8月	3日~8日	工学部サマースクール
8月	17日~22日	蔵本地区サマープログラム
8月	19日	日本企業研究研修旅行 (JFE スチール、ナカシマプロペラ)
8月	26日~27日	日本文化体験交流会 (伊方発電所見学)
9月	12日	第2回日本語教育シンポジウム 「多文化社会に生きる人のための日本語教育」
10月	13日	後期 English Chat Room 開始 (毎週火曜・木曜・金曜)
10月	16日	新入学留学生ガイダンス (常三島地区)
10月	19日	全学日本語コース秋期開講
10月	23日	留学生のための就職支援フォーラム
10月	31日	多文化体験交流会 (於: 工業会館)
11月	7日	第3回日本語教育シンポジウム 「日本語教育とコミュニケーションスタイル」
11月	25日	企業のための留学生採用支援セミナー 中小企業と留学生の交流会
12月	5日	日本企業研修研修旅行 (日本食研、アサヒビール)
12月	18日	第4回日本語教育シンポジウム 「日本語教育と発音指導」
12月	23日	現地見学研修旅行 (トヨタ自動車、京都)
1月	7日	スキー旅行 (鳥取県若桜・氷ノ山スキー場)

1月	15日	日本企業研究研修旅行（積水化学、サントリー）
1月	29日	後期 English Chat Room 終了
2月	2日	全学日本語コース秋期終了
2月	2日~3日	アジア人財 留学生のための就職支援講座
2月	26日	アジア人財コース1期生修了式
3月	2日	国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学 留学生時代」 外国人留学生交流懇談会

日本語教育

日本語研修コース（大学入学前予備教育）

1. コース概要

- ・ 文部科学省大学院入学前予備教育（大使館推薦）、教員研修生を対象とし、大学院内外での生活を一人で成人として乗り切れる日本語力を身につける。
- ・ 学内公募生も対象とする。
- ・ 集中講習型で実施する。
- ・ 日本の文化・習慣・常識・ルール等を授業に盛り込み、日本人との活動も含む日本語学習を実施する。

2. コーディネーター：大石 寧子（平成 21 年度）

3. 実施概要

- ・ 平成 21 年度春期

① 開講時期：平成 21 年 4 月 8 日（水）～9 月 11 日（金）

② 日程

4 月 08 日（水）	コースオリエンテーション・授業開始
4 月 10 日（金）	開講式
5 月 09 日（土）	地域・日本人学生との交流①－世界の歌
5 月 18 日（火）	午後、「ひょうたん島クルーズ」
6 月 06 日（土）	地域・日本人学生との交流②－寿司作り
6 月 10 日（水）	第一分冊試験、午後茶道体験
6 月 19 日（金）	県南訪問（海陽町、美波町）
7 月 03 日（金）・04（土）	研修旅行（海南小学校訪問、ホームステイ）
7 月 25 日（土）	地域・日本人学生との交流③－阿波踊り
7 月 30 日（木）	第二分冊試験、午後徳島新聞・四国放送見学
8 月 01 日（土）	夏休み開始
9 月 01 日（火）	授業再開
9 月 11 日（金）	修了式

「医療情報」	モンゴル
「「ずれ」の研究」	中国
「世界の伝染病の見つけ方」	中国
「防災に力を捧げる」	中国
「日本の生活と勉強」	中国
「日本に住んで半年」	中国
「人間の感情がわかります」	中国

・ 平成 21 年度秋季

① 開講期間：平成 21 年 10 月 07 日（水）～ 3 月 01 日（月）

② 日程

10 月 07 日（水）	コースオリエンテーション・授業開始
10 月 09 日（金）	開講式
10 月 31 日（土）	地域・日本人学生との交流①ー書道
11 月 19 日（火）	午後、「ひょうたん島クルーズ」
11 月 21 日（土）	地域・日本人学生との交流②ーお国紹介
12 月 05 日（土）	地域・日本人学生との交流③ー茶道
12 月 11 日（金）	第一分冊試験、午後ホームステイ（～12/12）
12 月 19 日（土）	冬休み開始
01 月 07 日（土）	授業再開
01 月 16 日（木）	地域・日本人学生との交流③ー世界の料理
02 月 06 日（土）	地域・日本人学生との交流④ー着物の歴史
02 月 25 日（木）	第二分冊試験
02 月 27 日（土）	地域・日本人学生との交流⑤ー雑壇飾り
03 月 01 日（土）	修了式

③ 受講生

No	クラス	種別	国籍	性別	進学先
1	A	学内公募生	モンゴル	女	徳島大学大学院工学部先端技術科
2	A	学内公募生	エジプト	男	徳島大学大学院工学部先端技術科
3	A	学内公募生	エジプト	男	徳島大学大学院工学部先端技術科
4	A	学内公募生	中国	男	徳島大学大学院工学部建設工学科
5	A	学内公募生	インドネシア	男	徳島大学大学院工学部先端技術科
6	A	教員研修生	インドネシア	女	鳴門教育大学
7	A	教員研修生	ウガンダ	男	鳴門教育大学
8	B	教員研修生	フィジー	女	鳴門教育大学
9	B	教員研修生	パラオ	女	鳴門教育大学
10	B	教員研修生	パラグアイ	男	鳴門教育大学
11	B	教員研修生	ブラジル	女	鳴門教育大学
12	B	教員研修生	スウェーデン	男	鳴門教育大学
13	B	教員研修生	セルビア	女	鳴門教育大学
14	B	教員研修生	ラトビア	男	鳴門教育大学

④ 教材、担当及び時間割

・ 使用テキスト：

「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」本冊	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」翻訳・文法解説	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ漢字」	スリーエーネットワーク

・ 学習総時間数：355 時間

・ 担当及び時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
担当	青木	大石	遠藤	橋本	中村
場所	新蔵	新蔵	新蔵	新蔵	新蔵

A クラス

08:40～10:10	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
10:25～11:55	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語

B クラス

12:50～14:20	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
14:20～16:05	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語

⑤ 最終課題（スピーチテーマ）

「セルビアの英語のクラス」	セルビア
「日本に来た目的」	モンゴル
「わたしの仕事」	ウガンダ
「日本での勉強と生活」	エジプト
「小学校の問題」	フィジー
「おもしろい学校—二つのプログラム」	パラグアイ
「日本で化学を勉強する理由」	パラオ
「大好きな数学」	中国
「私の仕事—音楽」	スウェーデン
「アサデパンチェラー—明るい将来」	インドネシア
「私の高校では日本人が一人働いています」	ラトビア
「大好きな仕事」	ブラジル
「石油生産の研究」	インドネシア

全学共通教育「日本語」・「日本事情」・「国際交流の扉を拓く」

1. 日本語：日本語 1～8 日本事情：日本事情 I～IV

平成 21 年度共通教育「日本語」「日本事情」では以下のクラスを開講した。

- ・ コーディネーター：三隅 友子

概要：

本年は新入学部学生が少なかったため開講しないクラスもあった。また受講者のほとんどが協定大学の交換留学生で、日本語能力試験 1 級以上の能力を持っていたため前期後期を通じて様々な学習活動が展開できた。交換留学の期間が 10 月から 9 月のため、前期と後期では受講者が入れ替わっている。

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1・2					
3・4			日本事情 I・II	日本事情 III・IV	
5・6					
7・8	日本語 1・2	日本語 7・8			
9・10	日本語 3・4	日本語 5・6			

前期：日本語 1・3・5・7 日本事情 I・III、 後期：日本語 2・4・6・8 日本事情 II・IV

日本語 1 前期

- ・ 担当者： 遠藤かおり
- ・ 受講人数： 3 名 (マレーシア 3 名)
- ・ 使用教材： 『大学で学ぶためのアカデミックジャパニーズ』、
佐々木瑞枝他 The Japan Times
- ・ 概要：
本講義では、テキスト中心に各課のテーマに沿った内容を扱った。授業の流れとしては、まず学習する課のテーマに関する予備知識を確認し、新出語彙を説明した後、会話練習や聴解、読解、要約、作文などの練習に入るという流れである。留学生が大学生活に慣れること、そして大学生活をしていく上で必要な日本語力を身につけ、大学での様々な場面に対応できることを目標とした。そのためクラスでの活動は、留学生が実際に遭遇するであろう場面を設定し行った。

日本語 2 後期

対象受講者がいなかったため、開講せず。

日本語 3 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 8名（マレーシア1名、韓国3名、中国4名）
- ・ 使用教材： 『パパとムスメの7日間』 館ひろし、新垣結衣主演 DVD
TBS テレビ、及び 視聴用自主作成補助教材
- ・ 概要：
生教材を使うことよって、より現実に近い日本語を学ぶことを目標とした。特に本教材では、学校、家庭そして会社という場面によって違う、生きた「日本語」と、コミュニケーションに必要な非言語の要素（表情・声・動作）にも注目し、ストーリーを理解するだけでなく深く日本語及び日本社会を理解することを目的とした。学生の言葉や会社での地位による待遇表現の使い分け等を確認し、また話し合いを行った。

日本語 4 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 6名（中国3名、韓国3名）
- ・ 使用教材： 『お金がない！』 織田裕二主演 DVD フジテレビ映像企画部、及び 視聴用自主作成補助教材
- ・ 概要：
生教材を使うことよって、より現実に近い日本語を学ぶことを目標とした。特に本教材では、会社と家庭や友人関係という場面によって違う、生きた「日本語」と、コミュニケーションに必要な非言語の要素（表情・声・動作）にも注目し、ストーリーを理解するだけでなく細部の日本語及び日本社会を理解することを目的とした。またアフレコによる場面練習も取り入れて、日本語で役割を演じることも試みた。

日本語 5 前期

- ・ 担当者： 大石寧子
- ・ 人数： 3名（ベトナム1名、韓国2名）
- ・ 使用教材： 「大学・大学院 留学生の日本語 3 論文読解編」 アカデミック・ジャパニーズ研究会 アルク、新聞・雑誌、広告 他
- ・ 概要：
大学生活においてレポート・論文は勿論のこと、様々な文章を書く機会が多い。そのための表現力（語彙力・文法力・文章構成力）を身につける。異な

ったタイプの文章の読解演習を入口として、「読む」能力をアップさせると共にそれを支える「書く、話す、聞く」の四技能全てを伸ばす様々なタスクをピアワークを通して行った。最終的には自分の思いや考えを短い文の中で最も的確に表現する手段として①自国②徳島大学または母国の大学③徳島の3つのキャッチコピーを作成した。

日本語6 後期

- ・ 担当者： 大石寧子
- ・ 人数： 5名（韓国2名、中国3名）
- ・ 使用教材： 「ピアで学ぶ大学生活の日本語表現」大島弥生他 ひつじ書房、「日本語Eメールの書き方」築 晶子他 The Japan Times 他
- ・ 概要：
大学生活で必要な「小論文作成」を最終到達とした。論文の書き方の前に、短い文の中に必要最低限の情報を盛り込む練習として「メールの書き方」を学習した。お願い・誘い・お詫び・断りなどをテーマにし、作成上のルール、構成、添付方法なども含めて学び、宿題の提出を実際にメール添付の形で毎回実施した。その後小論文の作成を目標とし、マッピングやピアワークでテーマを決め、それ以降もクラスのメンバー、日本人学生、地域日本人とのピアレスポンスを通して論点の絞り込みを行い、書き進めていった。またデータの1つとして、アンケートの作成・摂り方・集計・分析のしかたも学習した。

日本語7 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 5名（韓国2名、中国3名）
- ・ 使用教材： 『視点・論点』NHK テレビ放送番組
及び 関連資料と自主作成教材
- ・ 概要：
NHK 総合テレビにて放映される「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを教材として使用した。国際問題、社会問題、事件等を専門家が8分間で解説し、専門家としての提言を理解することと、話し手のスピーチスタイルに関する学習を目的とした。最終課題として、「日本人への提言」原稿を作成しそれをもとにしたスピーチ発表会を日本人の聴衆の前で行った。スピーチのテーマは以下のとおりであった。

1. 「日本語の美しさと優しさー阿波のことばー」

2. 「正しいりんごの切り方」
3. 「異文化を理解するために」
4. 「日本の印象」
5. 「人間と水」

日本語 8 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 6名（韓国3名、中国3名）
- ・ 概要：

NHK 総合テレビにて放映される「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを教材として使用した。国際問題、社会問題、事件等を専門家が8分間で解説し、専門家としての提言を理解することと、話し手のスピーチスタイルに関する学習を目的とした。最終課題として、「日本人への提言」原稿を作成した。授業内で扱ったテーマは以下のとおりであった。

1. 「海岸線の今を追って」
2. 「水の大切さを見直そう」
3. 「父・孫玉福」
4. 「薬物依存、視点変換の可能性」
5. 「新型インフルエンザへの対応」
6. 「成人の日に思う」

日本語 I 前期

- ・ 担当者： 坂田浩
- ・ 受講人数： 6名（韓国2名、中国3名、マレーシア1名）
- ・ 概要：

日本各地の文化について概説を行い、日本国内の多様性について講義を行った。内容としては、①都道府県の地理、②各地方の名産・名所の解説、③各地方の方言、④日本で有名なお祭りなどを取り上げ、日本の多様性を理解する一助とした。また、その日の新聞を用いて政治・社会問題についての解説も行った。受講生からは「最初は分からなかったけど、この授業で知識を得てからは、テレビのニュースが理解できるようになってきたので面白くなってきました」などのコメントを得ることができた。

日本語 II 後期

- ・ 担当者： 坂田浩
- ・ 受講人数： 5名（韓国2名、中国3名）

- ・ 概要：
後期の授業では「徳島」に焦点を当て、徳島の地理を学ぶことを行った。徳島県内の市町村名、徳島市内の主な地名に関する講義やテストを行い、徳島の地理に関する理解を深めるようにした。また、前期同様、授業の初めに新聞やインターネットを使って時事問題の解説を行った。受講生からは「日本の政治資金問題は全く分からなかったのですが、ダミーの会社を使って政治家にお金を渡す方法が分かったことで、「なるほど、自分の国と同じだ！」と納得した」などのコメントを得ることができた。

日本語Ⅲ 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 4名（中国2名、韓国2名）
- ・ 概要：「徳島を『食べる』プロジェクト」
吉野川が徳島独自の農業に重要な役割を果たしていることにヒントを得て、また留学生の日本の食についてさらに学びたいという要望から、実施に至った。前半は「玄米先生の弁当箱（魚戸おさむ画、北原雅紀原作）」のマンガを使い、食文化に関するトピック（食育・メタボリック・箸文化等）について理解を深めた。そして県内の様々な機関や施設に出向き、特に「食べる」ことを意識して、さらに五感を使う体験学習を進めた。前期は受講者4名が分担し、訪問機関ごとの感想による報告書を作成し、関係機関に送付した。

2009年前期 講義及び体験活動
1 県立書道文学館（瀬戸内寂聴展）
2 薬用植物園（薬学部）
3 給食体験（吉野川市鴨島中学校）
4 上勝町研修（「山の学校」宿泊）
5 百姓一・日進酒類（JA とくしま）
6 家庭料理（渭北公民館）



帰国前に副学長と

日本語Ⅳ 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 6名（ベトナム1名、韓国2名、中国3名）
- ・ 概要：「吉野川プロジェクト」
メインテーマを「徳島を知るー吉野川の役割ー」とし、徳島のシンボル、心

の故郷「吉野川」を様々な側面から学んだ。各分野の人から「吉野川」に関する話を聞く、また関連する施設を訪問する、活動を通して吉野川に関する理解を深めた。最終課題は各自テーマを見つけて調査を進め、パワーポイントによる発表を行った（2月11日、聴衆約60名）。

2009年後期 講義及び体験活動	
1	新町川クルーズ（新町川を守る会）
2	薬用植物園（薬学部）
3	吉野川の概要（国土交通省）講義
4	吉野川清掃（アドプトプログラム）
5	吉野川の農業（野田靖之氏）講義
6	吉野川と第十堰（姫野雅義氏）講義
7	観光資源としての吉野川 （徳島県西部総合県民局）



「吉野川の農業」

2. 共通教育 共創型学習「国際交流の扉を拓く」後期 金成海、橋本智、三隅友子

- ・ 受講人数： 11名
- ・ 目標：
私たちのまわりの「文化」を日本人と外国人の視点からとらえ直す。受講者の対話を通して「文化」・「交流」とは何かを考える。①国際交流とは②異文化理解とは③共に生きるとは、をテーマに「異文化コミュニケーション」「日本語と文化理解」「留学生事情」をはじめとし、様々な視点から講義及び体験学習を行う。
- ・ 実施内容：
受講者は留学生6名、社会人3名、日本人学生1名という構成であった。外部講師による講義と体験学習が2回、その他ワークショップによるコミュニケーションの体験学習、講義さらに採取的には「文化」に関するテーマによる各自の発表を行った。様々な視点から受講者が協力した学習活動が可能となった。

（本紙紀要6号「共創型学習活動の可能性—国際交流の扉を拓く—」論考を掲載。）

総合科学部 日本語教育関連授業

国際センターの日本語教育担当教員が総合科学部の日本語教育に関する専門科目を担当している。

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1・2					
3・4					
5・6				日本語教育演習（後期）	
7・8				日本語教授法Ⅰ（前期） 日本語教授法Ⅱ（後期）	
9・10					

日本語教授法Ⅰ 前期 三隅友子

- ・ 受講人数： 30名
- ・ 目標：

外国語としての日本語教育の全体像をとらえ、様々な教授法を検討し、現場に応じた効果的な教授法とは？を考察する。またそれに伴い日本語教育のコースデザイン、カリキュラムデザイン、クラス運営についても学ぶ。
- ・ 実施内容：

今期は、受講生の留学生6名（アメリカ1名、韓国3名、中国2名）に、学び手の視点から情報を多く提供してもらった。また7月には徳島を訪問したドイツ人高校生との交流会を実施し、グループ毎に企画・運営・実施及び評価という教育プログラムの流れを体験した。また最終回には留学生による「日本人への提言（日本語7との連携）」発表会を実施し、スピーチの指導とその評価を実際に行えた。特に講義形式による理論の解説のみならず、実践の機会が多く、学生の主体的な参加を仰ぐことができた。

日本語教授法Ⅱ後期 大石寧子

- ・ 人数： 11名（内5名留学生）
- ・ 使用教材： 「日本語教育 文法講義ノート」山下暁美編著他 アルク
- ・ 実施内容：

日本語教授法では、日本語教育を支える日本語文法の指導を行った。国文法との違い、日本語文法の特徴、品詞、フォーム、テンス・アスペクト・モデルティ概念と機能等については、全体像がつかめるような授業を行った。後期後半は、学生たちが当該部分を事前に調べて発表し、教師が補足する形

でクラスを展開させた。

日本語教育演習 後期 三隅友子

- ・ 受講人数： 9名
- ・ 目標：
実際の教室等で学生を対象に日本語教育の実習を行う。効果的な教授法やクラス運営を体験的に学ぶ。
- ・ 実施内容：
留学生5名(韓国2名、中国3名)と日本人学生4名の受講生であったため、いわゆる日本人母語話者教師が外国人学習者に教育するという形式だけでなく、プロジェクトワーク型の授業の計画・運営・実施・評価に重きを置いた。朗読作品を作るという音声教育の活動からはじめて、最終的には「まほろば国際プロジェクトⅢ」の学習者と演劇活動を作る「日本人参加型プロジェクトワーク」を美馬市脇町オデオン座で実施した(2010年1月17日)。日本人学生には、初級の日本語授業の見学及び参加を課した。

全学日本語コース

1. コース概要

- ・ 未習から上級までの、日本語学習を希望する学生、研究者とその成人家族を対象とする。
- ・ 常三島、蔵本、新蔵の三つのキャンパスで実施する。秋期は、蔵本と新蔵のみ開講した（常三島キャンパスの校舎改修工事のため）。
- ・ 希望者には参加証書を発行する。

2. コーディネーター： 橋本 智

3. 実施概要

- ・ 開講クラス及び使用教材
 - A1・A2 「みんなの日本語初級Ⅰ」
 - B1・B2 「みんなの日本語初級Ⅱ」
 - C1 「J-ブリッジ」「みんなの日本語中級Ⅰ」
 - D 「中級日本語文法要点整理ポイント 20」
「日本語能力試験 2 級聴解問題」

・ 受講者数

受講者総数 137 名（申し込み人数 161 名）

<春期> 2009 年 5 月 11 日～2009 年 7 月 17 日

開講クラス	人数（開始時）		
	常三島	新蔵	蔵本
A1	10 (11)	—	10 (10)
A2	3 (4)	—	10 (10)
B1	5 (6)	—	—
B2	9 (10)	—	10 (11)
C1	—	—	8 (8)
C2	—	—	—
D	—	5 (8)	—
小計	27 (31)	5 (8)	38 (39)
合計	70 (78)		

<秋期> 2009年10月19日～2010年2月2日

開講クラス	人数 (開始時)	
	新蔵	蔵本
A1	6 (7)	9 (9)
A2	6 (6)	8 (8)
B1	5 (11)	2 (4)
B2	—	—
C1	17 (22)	10 (12)
C2	—	—
D	4 (4)	—
小計	38 (50)	29 (33)
合計	67 (83)	

4. 平成21年度春期 開講状況 2009年5月11日～2009年7月17日

- 常三島キャンパス (教室：総合科学部1号館 国際センター教室1・2)

	月	火	水	木	金
10:25～	日本語 A2		日本語 A2		
12:50～					
14:35～	日本語 A1 日本語 B2	日本語 B1		日本語 A1 日本語 B2	日本語 B1
16:05～					

- 蔵本キャンパス (教室：蔵本会館 第2集会室)

	月	火	水	木	金
10:25～	日本語 B2	日本語 C1		日本語 B2	日本語 C1
12:50～		日本語 A2			日本語 A2
14:35～	日本語 A1				日本語 A1
16:05～					

- ・ 新蔵キャンパス（日亜会館 2階 国際センター講義室 2）

	月	火	水	木	金
10:25～	日本語 B2	日本語 D		日本語 B2	日本語 C1
12:50～		日本語 A2			日本語 A2
14:35～	日本語 A1				日本語 A1
16:05～					

5. 平成 21 年度秋期 開講状況 2009 年 10 月 19 日～2010 年 2 月 2 日

- ・ 蔵本キャンパス（蔵本会館 第 2 集会室）

	月	火	水	木	金
10:25～					
12:50～	日本語 A1			日本語 A1	
14:35～	日本語 A2	日本語 C1		日本語 A2	日本語 C1
16:05～		日本語 B1		日本語 B1	

- ・ 新蔵キャンパス（日亜会館 2階 国際センター講義室 2・図書資料室）

	月	火	水	木	金
10:25～	日本語 B1		日本語 B1	日本語 D	日本語 C1-2
12:50～	日本語 C1-1 日本語 C1-2		日本語 C1-1		
14:35～	日本語 A2				日本語 A2
16:05～	日本語 A1				日本語 A1

アジア人財資金構想（アジア人財コース）

徳島大学は、経済産業省と文部科学省が平成19年度から推進しているアジア人財資金構想高度実践留学生事業に平成20年度より参加し、本プログラムの共通カリキュラムを軸に、参加学生の日本語力、専門性等を考慮し、徳島大学独自のカスタマイズ化を行い、授業を行っている。第1期生の本年度授業内容については、紀要を参照。参加学生、授業期間は以下のとおりである。

・ 参加者：

第1期生（平成20年度生）

	性別	国籍・出身地	所属	学年
①	F	中国	人間・自然環境研究科	M1
②	M	中国	人間・自然環境研究科	M1
③	M	中国	先端技術科学教育部	D2
④	F	中国	先端技術科学教育部	D2
⑤	M	台湾	先端技術科学教育部	D2

第2期生（平成21年度生）

	性別	国籍・出身地	所属	学年
①	M	中国	先端技術科学教育部	M1
②	M	中国	先端技術科学教育部	D2
③	F	中国	総合科学教育部	M1
④	M	中国	先端技術科学教育部	M1
⑤	M	中国	先端技術科学教育部	D2

・ 期間：

第1期生

前期	5月17日（月）～7月31日（金）	月・木・金	16:20～17:50
後期	10月8日（木）～11月17日（火）	月・火・金	16:20～17:50
	2月22日（月）～2月26日（金）	月・木・金	16:20～17:50

第2期生

前期	5月18日(月)～7月31日(金)	月・水 16:20～17:50 金 14:35～16:05
後期	10月5日(月)～12月21日(金)	月・水 16:20～17:50 金 14:35～16:05
	1月13日(水)～2月26日(金)	月・水 16:20～17:50 金 14:35～16:05

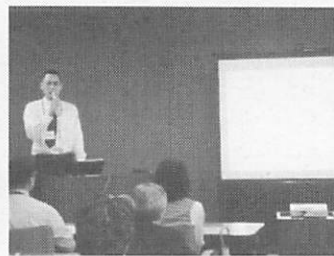
・ 行事：

2009年

5月16日	四国地区合同開講式(四国中央市)
5月18日	徳島大学アジア人財コース 第2期生開講式
7月28日	プロジェクトワーク・プレゼンテーション：「日本語と中国語による 徳島南部に対する宣伝サイトーあなたを待っている徳島南部」
8月19日	日本企業見学研修旅行(JFEスチール、ナカシマプロペラ)
10月24日	留学生のための就職フォーラム
11月25日	企業のための留学生採用支援セミナー 中小企業と留学生の交流会
12月5日	日本企業見学研修旅行(日本食研、アサヒビール)



四国地区合同開講式



プロジェクトワーク・プレゼンテーション



企業見学研修旅行

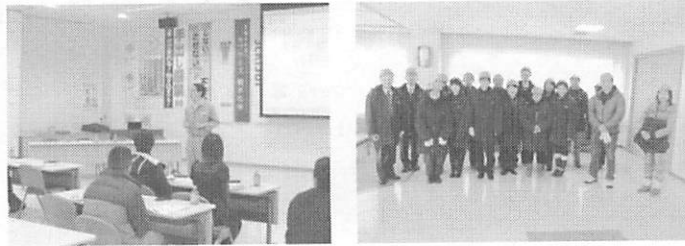


留学生採用支援セミナー



2010年

1月15日 日本企業見学研修旅行（積水化学、サントリー）



企業見学研修旅行

2月26日 徳島大学アジア人財コース第1期生修了式

日本語教育シンポジウム

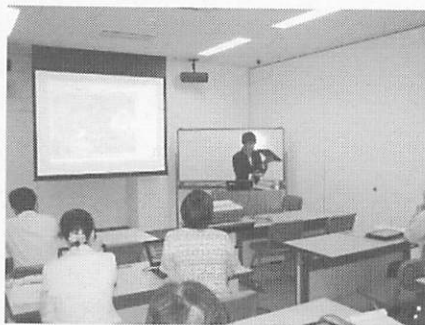
場所：徳島大学地域国際交流プラザ2階 国際センター講義室

学長裁量経費の援助を受けて、本年度は5名の講師をお呼びし、日本語教育シンポジウムを4回開催した。延べ130名がこのシンポジウムに参加した。日本語教育の様々な分野で活躍されている先生方の話をお聞きすることで、徳島地域の大学レベル、地域ボランティアレベルの日本語教育の質の向上を図ることができた。

・ 第1回：2009年6月13日

- ・ 参加者 12名
- ・ 「教育向けプレゼンテーションツールの研究」
栗原一貴氏（産業技術総合研究所 研究員）
（概要）

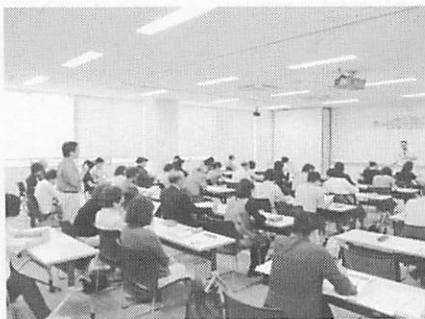
これまでのプレゼンテーションツールは、スライド式で教育現場では使いにくいものだった。新しい電子プレゼンテーションツール「ことだま」は編集と発表の区別がなく、自由度と柔軟性の高いツールである。講演では、「ことだま」の開発者から直接話を聞き、実際の教育現場でどのように使われているかを知ることができた。また、参加者は実際にパソコンを使って、プレゼンテーションツールを動かしてみた。



・ 第2回：2009年9月12日 □「多文化社会に生きる人のための日本語教育」

- ・ 参加者 48名
- ・ 「地域日本語教育におけるテキスト『にほんごこれだけ！』について」
岩田一成氏（広島市立大学 講師）
（概要）

地域で日本語を教える際には「文法積み上げ」ではなく「おしゃべり」型で行うほうが効果的である。そのために、どこからでも始められるような新しい日本語教育のテキストを開発している。講演では、共生言語としての日本語を地域でいかに教えていくのかを、具体例を通して学ぶことができた。



- ・ 「多文化社会における地域日本語教育の在り方と方法を考える」

尾崎明人氏（名古屋外国語大学 教授）

（概要）

急速に外国人の数が増えている現状を考えると、大学のような公的な施設だけでなく、地域で日本語を教え、学ぶ機会が増えている。ボランティアの日本人が日本語を教える場合は、「知り合う」「ふれあう」「認め合う」ことを日本人自身も学ぶ機会となる。講演を通して、地域日本語教育の体制やそのあり方について考えることができた。



- ・ 第3回：2009年11月7日

- ・ 参加者 30名

- ・ 「日本とアメリカのコミュニケーション」

橋本智（徳島大学 准教授）

（概要）

コミュニケーションとは何かを、日米の具体例を交えて概観した。

- ・ 「日本語教育とコミュニケーション・スタイル」

越前谷明子氏（東京農工大学 教授）

（概要）

教科書で教える「会話」は、実際の日本人の会話とはずれている。教科書をそのまま教えるのではなく、実際の場面にあったコミュニケーション・スタイルを考えて、適切な表現を提示していくべきである。日本人のやり取りは、直接の言葉ではなく、人間関係を維持しお互いの感情を大切にしているという考え方を学ぶことができた。



・ 第3回：2009年12月18日

・ 参加者 40名

・ 「日本語教育と発音指導」

川口義一氏（早稲田大学大学院日本語教育研究科 教授）

（概要）

文法面では間違いが少なくても発音が悪く、日本語が「上手」ではない学習者がいる。発音は言語学習では大切な一面ではあるが、それを教えることは難しい。

「ヴェルボ・トナル法」や「サイレントウェイ」といった方法を発音教育に取り入れ、リズムに注意しながら発音指導を

することができる。講義では参加者が実際に体を動かしながら、日本語のイントネーションやリズムを教える方法を学んだ。



今年度は異なる分野の先生方のお話をお聞きすることができ、徳島地域の日本語教育の発展に貢献できたと考えている。国際センターでは、大学と地域のさらなる日本語教育のレベルアップを目指して、様々な方策を試みていきたいと思う。

学生派遣関連

夏季・春期短期研修

今年度の夏季・春期短期研修は、新型インフルエンザが流行したことから、いずれも事業の実施自体を中止した。春期研修に関しては、インフルエンザに対する対応をいうこともあったが、短期海外研修を実施するための体制を見直す意味もあり、中止することとした。現在は、来年度からの再開に向け、主に短期海外研修を実施する際の体制作りを行っている。

長期派遣留学申請支援

11月に学内募集を開始し、2名の学生（総合科学部1名、医学部医科学研究科1名）を「留学生交流支援制度（長期派遣）」に推薦することとなった。両学生に対しては、①留学計画書の作成・添削、②申請書類の作成支援、③その他留学に関わる相談支援を行った。

2月初旬に通知された書類選考結果を受け、医学部医科学研究科の学生に対し2次面接向けの支援を行った。（2月下旬の段階では最終結果は未定）

留学相談支援

2009年4月～2010年2月末までの相談件数は、合計78件であった。昨年度の相談件数は89件であったが、昨今の経済面での不況が原因で、「海外留学よりもより堅実に就職する方向に学生の意識が向いている」のではないかと思われる。

今年度における主な相談内容としては、以下のようなものがあつた。

- | | |
|----------------------------|-----|
| ・ 短期語学研修（私費による研修も含む）に関する相談 | 45件 |
| ・ 交換留学に関する相談 | 25件 |
| ・ 語学学習に関する相談（TOEIC等の試験対策） | 8件 |

実際の短期語学研修・交換留学の相談時には、①語学（特に英語）学習に関する相談、②奨学金などの資金援助に関する相談、③単位互換制度に関する相談が重複するケースが多く、「語学学習の相談が少ない」と短絡的に結論付けることは難しい。実際の留学相談において、奨学金および語学力（および語学学習）に関する相談は必ず出てくるものであることから、今後はこれらの点についての相談・支援体制の整備を行っていく必要があると思われる。

その他の留学支援

協定校 (Florida Atlantic University) で研究を行うことを目的とした留学を2件(工学部大学院生) 支援した。支援の内容としては、①ビザ取得に対する助言・支援、②FAU側とのやり取り、③ホームステイに対する支援を提供した。

また、今年度2月より慶北大学で行われる「留学生向け英語プログラム」に対し、総合科学部学生(1名)を派遣するようしており、その学生に対する支援も行った。

指導・相談関連

相談業務

本学に在籍中の留学生だけではなく、留学生の家族、外国人研究者および学外の徳大入学希望者から相談を行っている。新蔵地区は常時相談できる体制であるが、蔵本地区には常時事務員一人と火曜日午後と金曜日午後に教員一人が加えて対応している。また、メールでの相談も対応している。

主な相談内容

- ・ 学習関係： 進学、指導教官との関係、就職など
- ・ 生活関係： 奨学金、アルバイト、居住、保証人など
- ・ その他： ビザ、交通事故、トラブル、人間関係など

留学生受け入れおよび支援に関する活動（2009年4月～2010年3月）

- ・ 4月 新入外国人留学生のためのガイダンス（常三島地区、蔵本地区）
- ・ 9月 日韓共同理工系学部留学生説明会 韓国（ソウル）
岡山外語学院 2009年度進学ガイダンス 岡山
- ・ 10月 新入外国人留学生のためのガイダンス（常三島地区、蔵本地区）
- ・ 11月 多文化体験交流会の開催

随時 工学部、総合科学部へ入学希望者の学歴認定調査を実施

日韓共同理工系学部留学生担当業務

平成16年度には工学部生物工学科が1名、平成18年度には工学部電気電子工学科が1名を受け入れているが、日韓共同理工系学部留学生を増やすため、9月韓国ソウルで「日韓共同理工系学部留学生説明会」に参加。

同窓会の立ち上げおよび支援

2009年12月19日、徳島大学を卒業又は修了した韓国出身の留学生や元徳島大学外国人研究者らによる「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」を韓国釜山市で設立した。

国際シンポジウムの開催

第6回徳島大学国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」を国際連携室と共同開催した。本年度は中国出身の卒業留学生3名、韓国出身の卒業留学生1名を招聘し講演を行った。

その他

徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）

2009年12月19日、徳島大学を卒業又は修了した韓国出身の留学生や元徳島大学外国人研究者らによる「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」を韓国釜山市で設立した。当日は、韓国出身の徳島大学卒業生、修了生、元徳島大学外国人研究者など約20数人が集まり、同窓会の役員組織や会則等を定めた。これは、徳島大学を卒業（修了）した韓国出身の留学生OB等有志が、この日に向けて準備を進めてきたもので、この設立総会には、徳島大学からも同窓会顧問として青野学長や理事・副学長、恩師等10数名の教職員が出席した。



出席者による記念写真（青野学長（前列中央左）と金韓国留学生同窓会長（前列中央右））

当日、韓国は例年になく大寒波に見舞われ、積雪等により新幹線が運休するなどしたため、急遽出席できなくなった同窓生達もいたが、設立総会に引き続き開催された韓国留学生同窓生と徳島大学関係者との懇談会では、久しぶりに再会した元留学生らが徳島大学学長や恩師らに、徳島大学での勉学や研究した当時の懐かしい思い出と近況などについて報告した。

また、懇談会では、青野学長が、同窓生と共同研究を推進するための留学生同窓会からの推薦による外国人研究者の受入特別枠や留学生同窓会からの国際シンポジウムにおけるシンポジストの推薦枠、同窓会からの留学生の奨学生推薦枠を設けることなど、同窓会と連携を強化し人的ネットワークを拡大していくためのいくつかの計画を紹介した。



懇談会で意見交換する大学関係者と韓国留学生同窓生

懇談会に引き続き同窓生の家族ら関係者も出席し韓国留学生同窓会設立祝賀会が開催され、韓国各地から集まった同窓生らは久しぶりに会って旧交を温めたり、懐かしい恩師と再会して懇談したり一緒に写真を撮っている姿がいつまでも続いた。そして、最後には、参加者全員で列を組み、徳島名物「阿波踊り」を踊って、徳島での再会を願った。



青野学長を先頭に徳島名物「阿波踊り」を踊る出席者

国際交流サロン

地域及び日本人学生との協働の場として例年5月から3月(実施は2月末)まで毎月土曜日に実施している。国際センターが行っていた公開講座「国際交流ボランティア入門ー徳島に住む外国人を支援するとは」の修了生が中心となってできたボランティアグループの国際交流サロン JSS グループも4年目になり、国際センターとの連携もよく、参加人数もかなり増員となった。参加人数、内容は以下のようである。

	実施日	内 容	参加者数		
			日本人	留学生	合計
1	5月9日	日本語でしゃべらんで ー世界の歌を歌おう	18	15	33
2	6月6日	日本語でしゃべらんで ーお寿司を作ってみよう	23	17	40
3	7月25日	日本語でしゃべらんで ー浴衣を着て阿波踊りを踊ろう	21	19	40
4	9月26日	日本語でしゃべらんで ー友達になろう	16	11	27
5	10月31日	日本語でしゃべらんで ー書を楽しもう	19	18	37
6	11月21日	留学生の国への誘い ー日本語による留学生のお国紹介	21	21	42
7	12月5日	日本語でしゃべらんで ー茶道を楽しもう	19	18	37
8	1月16日	日本語でしゃべらんで ー世界の料理を楽しもう	31	16	47
9	2月6日	日本語でしゃべらんで ー着物の歴史を学んで、着てみよう	32	29	61
10	2月27日	日本語でしゃべらんで ーひな壇を飾ろう	29	14	43

サポーター制度

国際センターには、日本語教育をはじめとする国際センター(以下センターとする)の活動を支援する徳島の住民からなる「地域サポーター」と徳島大学の学生たちからなる「学生サポーター」の登録システムがあり、サポーターは徳島大学で行われている全ての日本語授業の要請にこたえ、会話練習やタスクや動詞変換練習等の相手、ひらがなをはじめとする表記の補講、プレゼンテーションの評価等いろいろな形でクラスに参加する。今年度のサポーター数は、地域サポーター51名、学生サポーター28名、計79名である。学生サポーターは、学生自身の授業と重なることが多く、参加が難しいが、その分地域サポーターは昨年に比べ、参加がかなり増えたのが今期の特徴である。活動数は、14で、3月末日で延べ参加人数は地域85人、学生11名、計96名であった。

	実施月	内 容	サポーター参加者数
1	6月	スピーチ練習相手	地域サポーター 16名
2	7月	学生作成キャッチ・コピーへの提言	地域サポーター 4名
3	7月	プレゼンテーション評価	地域サポーター 3名
4	9月	スピーチ練習相手	地域サポーター 7名
5	9月	日本語研修コース修了式	地域サポーター 7名
6	9月	キャンパスツアー引率	学生サポーター 3名
7	9月	アジア人財コースフォーラム	地域サポーター 2名
8	10月	動詞変換練習	地域サポーター 7名
9	10月	タスク(道を尋ねる)活動相手	学生サポーター 1名
10	11月	ひらがな補講	地域サポーター 6名
11	1月	ひらがな矯正指導	地域サポーター 4名
12	2月	学生の小論文テーマについて話し合い	学生サポーター 3名
13	2月	スピーチ練習相手	地域サポーター 5名 学生サポーター 2名
14	3月	日本語研修コース修了式	地域サポーター 14名 学生サポーター 3名

地域貢献

地域連携推進室及び地域創生センターとの協力によって、様々な地域の国際化を図る取り組みを行っている。

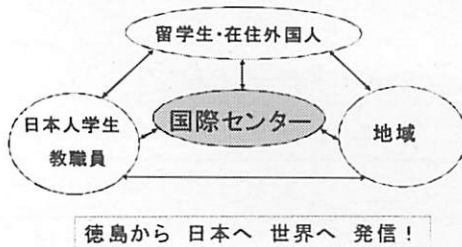
地域貢献（多文化交流・地域共生）事業のポイント

- 異なる文化を持った人を受け入れ、共生を目指す地域社会を創造する
～お互いの共生・協労への理解～
- 地域に住む住民としての外国人と日本人の関係を作る
～出会いの場と共存を考える活動の提供～
- 徳島という地域で独自の共生を住民で考える
～将来の共生の担い手に学習課題としての提示～

1. 事業の目的と経過

国際センターは、地域に根ざした異文化理解を進める取り組みを行っています。下図のようにセンターが中心となって①留学生・在住外国人②日本人学生と教職員、そして③地域、の人と人とを結ぶ

国際センターと地域との関わり



様々な活動を計画・実施しています。現在まさに、少子・高齢化といった社会情勢に応じて、徳島県にも外国人労働者が急激に増加する可能性があります。その際、互いに地域住民として共生・協労への理解を図る地域社会（コミュニティ）作りが重要な問題となります。この視点からセンターでは従来の学内の<講座>「国際交流の扉

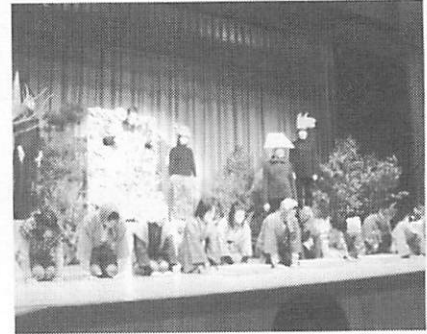
を拓く」や「日本語サロン」（月1回開催、留学生とともに日本文化を楽しむ）、そして学外への「異文化理解出張講座」（教育機関・公民館の依頼による）を進めて来ました。そして平成18年より今年度も三回目として徳島県西部の美馬市と共催し、徳島県の後援を得て「まほろば国際プロジェクトⅢ」を平成21年11月から翌年1月にかけて実施しました（地域の阿波銀行から助成を得ました）。

2. まほろば国際プロジェクトⅢ

徳島大学の留学生と日本人学生が美馬市を訪問し、ホームステイと演劇を通して交流活動を行いました。

①11月・12月：本学協定大学の武漢大学（中国）慶北大学（韓国）の交換留学生5名と日本人学生らが中心となり美馬市を訪問しホームステイ及び地域の人たちと演劇練習を開始。演劇練習を開始。

②1月：1月17日（日）には、脇町劇場オデオン座にて、脇町小学校のバンド演奏、阿波踊り体操、さらに学生と地域人たちで協力した演劇「狼森と笹森、盗森（宮澤賢治作）」、の様々な演目を楽しみました。オデオン座という地域が誇る文化交流の空間にて、12ヶ国約180名の人が集い、互いに笑顔で交流することができました。まさに「しり合おうーふれ合おうーみとめ合おう」（徳島県国際フレンドシップ憲章のことば）が示す、地域から進める国際化への大きな一歩が踏み出せました。



3. 事業実施による成果と今後の展開

今後も人と人の出会いと協力を考えた、徳島という地域を考えた、そして地域の活性化に結びつく国際交流、多文化共生活動を推進して参ります。

English Chat Room

English Chat Room も今年で 8 年目を迎えるが、今年度は前期週 2 回（火曜・木曜 午後 6:30～7:30）、後期週 3 回（火曜・木曜・金曜午後 6:30～7:30）実施した。後期は試験的に週 3 回実施してみたが、下の表にも示しているように、さほど参加人数に変化は無く、週 2 回でも十分と思われる。なお、今年度からは共通教育センター-English Support Room と連携しながら活動を展開した。

	1 月	2 月	4 月	5 月	6 月	7 月	10 月	11 月	12 月	総計
2008	59	8	50	89	89	74	89	87	62	607
前期			50	89	89	74				302
後期	59	8					89	87	62	305
2009	54		45	85	110	77	52	73	78	574
前期			45	85	110	77				317
後期	54						52	73	78	257
総計	113	8	95	174	199	151	141	160	140	1181



Florida からの来客

教員出張（センター関連のみ）

三隅友子

- ・ まほろば国際プロジェクト関連引率
- ・ 美馬市脇町劇場オデオン座にて演劇「狼森と笹森、盗森」の実施
- ・ とくしま県民活動プラザ 理事及び運営委員
- ・ 徳島県立近代美術館協議会委員
- ・ 徳島市立高校 異文化理解講座
- ・ 徳島県自治研修センター「国際化講座」 講義
- ・ 徳島大学付属病院新人看護師、医師のためのコミュニケーション研修
- ・ 徳島県女性保護協議会「世界の人々の人権を尊ぶことから」 講演

大石寧子

- ・ アジア人財「研修事例検討会第1回」
- ・ 日系人就労準備研修事業に係る日本語教育専門委員会
- ・ アジア人財「研修事例検討会第2回」
- ・ アジア人財県南視察旅行
- ・ 日本語研修コース研修旅行
- ・ 「外国語としての日本語教育」城北高校出張講義
- ・ アジア人財「研修事例検討会第3回」
- ・ 「外国語としての日本語教育」城の内高校出張講義
- ・ アジア人財コース 2011年に向けての調査・ヒヤリングー慶北大学
- ・ 共通教育「日本語6」「徳島の歴史を知るー脇町」調査
- ・ アジア人財「研修事例検討会第5回」
- ・ 日系人就労準備研修事業に係る日本語教育専門委員会第2回
- ・ アジア人財「研修事例検討会第6回」

金成梅

- ・ 「国立大学留学生センター留学生指導担当研究協議会」 東京大学
- ・ 「平成21年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会」 鹿児島大学
- ・ 「日韓共同理工系学部留学生説明会」 韓国 ソウル
- ・ 岡山外語学院 2009年度進学ガイダンス
- ・ 大阪日本語教育センター主催の進学説明会 大阪
- ・ 徳島大学卒業同窓会（韓国）設立準備会 韓国釜山
- ・ 徳島大学卒業同窓会（韓国）設立総会・懇談会・祝賀会 韓国釜山

- ・ 「平成 21 年度第 2 回国立大学法人留学生指導協議会（兼：第 33 回大阪大学留学生教育・支援協議会）」 大阪
- ・ 「日中大学フェア&フォーラムー変貌する日中の大学-グローバル大競争・連携時代を迎えて-」 東京

坂田浩

- ・ POD Conference に参加（アメリカ・ヒューストン）
- ・ スキー研修 引率（鳥取）
- ・ 大学進学説明会 参加（大阪大学）

橋本智

- ・ アジア人財四国地区開講式（四国中央市）出席
- ・ アジア人財新教材講師研修（大阪）参加
- ・ アジア人財プロジェクト連絡会議（東京）出席
- ・ アジア人財ビジネス日本語オープン講座（岡山）参加
- ・ アジア人財教育カリキュラム編成検討会（高松）出席
- ・ アジア人財日本企業研究研修旅行（岡山、愛媛、滋賀、京都）学生引率
- ・ アジア人財共通カリキュラムマネジメント事業講師研修（東京）参加
- ・ アジア人財サポートセンター就職指導分科会（東京）出席
- ・ アジア人財就活研修旅行（東京）学生引率
- ・ アジア人財ビジネス日本語・日本ビジネス教育ニーズ調査（中国・大連）
- ・ サマースクール・プログラム日本文化体験（徳島）学生引率
- ・ SEDA Conference（イギリス・バーミンガム）参加
- ・ 日本語研修コース海南小学校訪問（徳島）学生引率
- ・ 実地見学研修旅行（愛知、京都）学生引率
- ・ 徳島県立城東高校出張講義

留学生在籍状況

徳島大学外国人留学生在籍状況（平成 22 年 2 月 1 日現在 単位：人）

【国別】

区分/国又は地域名		学部学生			大学院生			研究生等			合計
		計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	計
アジア	インドネシア				4	2	3	2	1	2	6
	台湾				2	1					2
	韓国	2	1	1	7	3	2	4	3		13
	中国	15	5	1	102	48	10	25	14	2	142
	バングラデシュ				15	5	6	1		1	16
	ブータン				1		1				1
	フィリピン				1	1					1
	ベトナム	4	2		9	4	4				13
	マレーシア	15	3		10	5	4				25
	モンゴル				17	9	2	1	1		18
	ラオス				2	1					2
北米	アメリカ	1	1				2				3
中南米	ドミニカ共和国				1	1	1				1
	パラグアイ						1		1		1
	ブラジル						1	1	1		1
	ボリビア				1	1					1
欧州	スウェーデン						1		1		1
	セルビア						1	1	1		1
	ドイツ				2		2				2
	ラトビア						1		1		1
大洋州	パラオ						1	1	1		1
	フィジー						1	1	1		1
中東	イラン				1	1					1
	ヨルダン				1	1	1				1
アフリカ	ウガンダ						1		1		1
	エジプト				21	6	1	1			22
	ガボン	1									1
	ギニア				1						1
	ケニア				1		1				1
合計 29ヶ国		38	12	2	199	89	38	44	23	13	281

平成 22 年 2 月 1 日現在（単位：人）

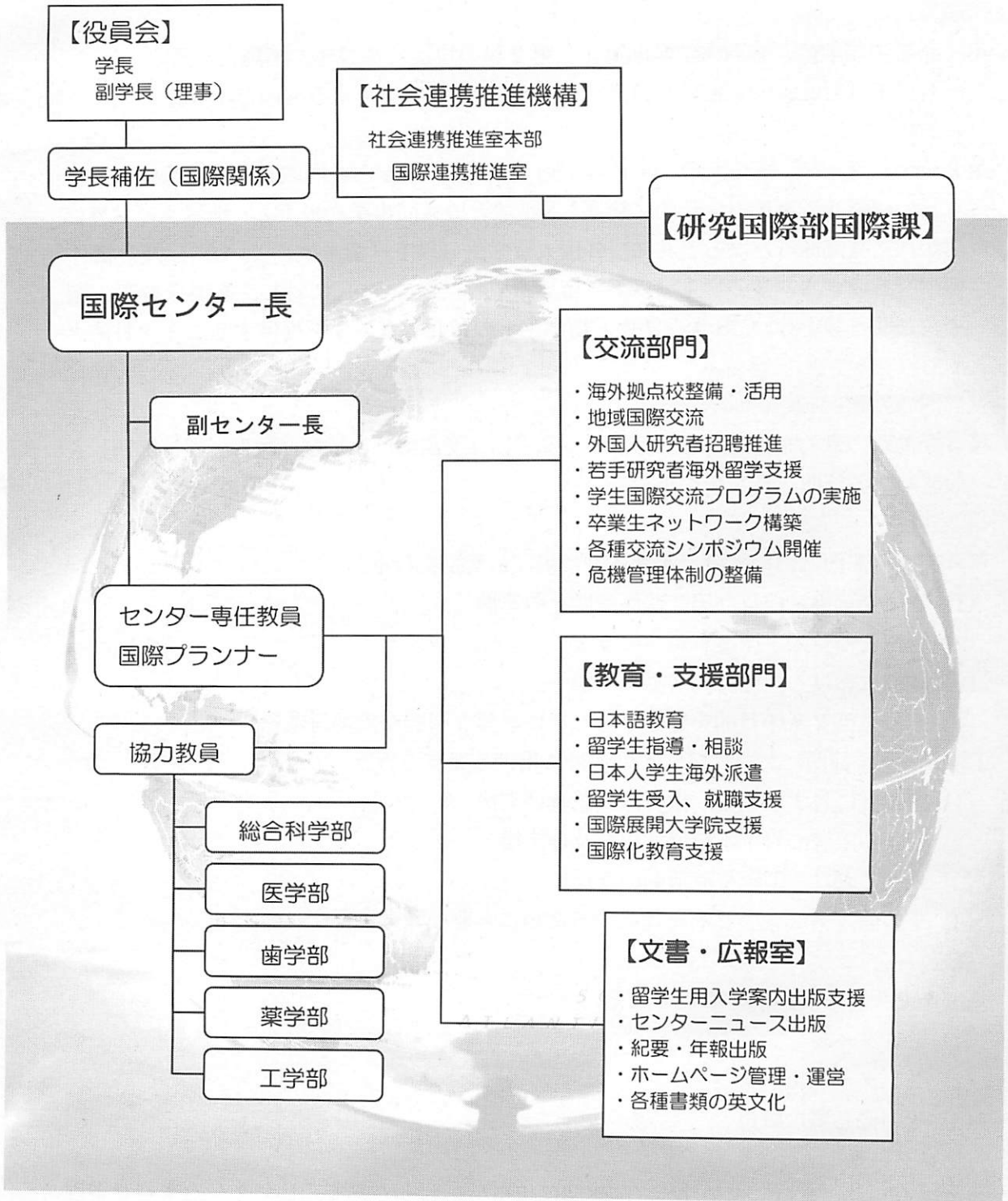
【所属別】（平成 22 年 2 月 1 日現在単位：人）

所属/区分	学部学生			大学院生			研究生等			合計
	計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	
総合科学部	7	5					20	13		27
医学部							1			1
歯学部							1	1		1
薬学部							1		1	1
工学部	31	7	2				11	4	3	42
総合科学教育部				10	6					10
医科学教育部				35	15	8				35
栄養生命科学教育部				8	5	3				8
保健科学教育部				1						1
口腔科学教育部				15	11	7	1			16
薬科学教育部				11	5	6				11
先端技術科学教育部				119	47	14				119
日本語研修生							9	5	9	9
合計	38	12	2	199	89	38	44	23	13	281

【徳島大学における過去 5 年間の留学生受入数】各年度 5 月 1 日現在（単位：人）

区分/年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度
国費	46	42	46	45	41
政府派遣	4	6	10	14	15
私費	187	184	196	200	202
計	237	232	252	259	258

国際センター組織図



国際センター規則

平成 14 年 3 月 27 日

規則第 1703 号制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、徳島大学学則第 4 条第 2 項の規定に基づき、徳島大学国際センター（以下「センター」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第 2 条 センターは、徳島大学（以下「本学」という。）の学内共同教育研究施設として、本学の国際交流事業を一元的に管理し、地域との共同事業を提案し、地域及び世界に開かれた交流拠点となると共に、外国人留学生（以下「留学生」という。）及び海外留学を希望する本学の学生（以下「留学希望者」という。）に対し、必要な教育、指導及び助言等を行い、日本人学生と留学生との相互教育の場を提供することを目的とする。

(部門の設置)

第 3 条 前条の目的を達成するため、センターに「交流部門」及び「教育・支援部門」を設置し、各部門に長を置く。

(業務)

第 4 条 交流部門においては、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学術交流協定校及び国際関係機関との連携
- (2) 研究者の受入、派遣事業への支援
- (3) 地域における国際交流活動の支援
- (4) その他第 2 条の目的を達成するために必要な国際交流関係業務

2 教育・支援部門においては、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 留学生に対する教育、指導、相談及び支援
- (2) 留学希望者に対する指導、相談及び支援
- (3) 地域における国際交流活動の支援
- (4) その他、第 2 条の目的を達成するために必要な教育業務

(職員)

第 5 条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第 6 条 センター長は、学長補佐（国際関係担当）をもって充て、センターの業務を掌理する。

(副センター長)

- 第7条センターには、センター長を補佐するため、副センター長を置くことができる。
- 2 副センター長は、センター教員のうちから学長が任命する。
- 3 副センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、再任は1回限りとする。
- 4 副センター長は、交流部門長又は教育・支援部門長を兼任する。

(協力教員)

- 第8条センターに、センターの業務を円滑に実施するため、協力教員を置く。
- 2 協力教員は、原則として、各学部(学部併任された大学院教員を構成員として含む)から1名ずつ選出するものとし、各学部長からの推薦により学長が命ずる。
- 3 協力教員の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 4 協力教員は、センターが行う業務において、協力教員が所属する学部(当該学部を基礎とする大学院教育部を含む。)との連絡調整を行う。

(教員選考)

- 第9条センターの教員選考は、国立大学法人徳島大学教員選考基準により、第10条に定める運営委員会の議に基づき、学長が行う。

(運営委員会)

- 第10条センターに、センターの管理運営に関する重要事項を審議するため、徳島大学国際センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。
- 2 運営委員会について必要な事項は、別に定める。

(事務)

- 第11条センターの事務は、研究国際部国際課において処理する。

(雑則)

- 第12条この規則に定めるもののほか、センターについて必要な事項は、センター長が学長の承認を得て別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 徳島大学留学生支援センター規則(平成13年10月19日規則第1669号)は、廃止する。

附則(平成16年3月19日規則第1867号改正)

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附則(平成16年4月16日規則第74号改正)

この規則は、平成16年5月1日から施行する。

附則(平成17年3月24日規則第160号改正)

- 1 この規則は、平成17年3月26日から施行する。

附則（平成 18 年 3 月 31 日規則第 123 号改正）

この規則は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 19 年 3 月 16 日規則第 71 号改正）

1 この規則は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

2 徳島大学留学生センター長選考規則（規則第 1705 号）は廃止する。

附則（平成 20 年 11 月 26 日規則第 27 号改正）

1 この規則は、平成 20 年 12 月 1 日から施行する。

2 この規則の施行日の前日において徳島大学留学生センターの副センター長であった者については、この規則の施行日以降も引き続き副センター長として任命するものとし、その任期は、第 7 条第 3 項の規定にかかわらず、平成 22 年 3 月 31 日までとする。

附則（平成 21 年 3 月 31 日規則第 120 号改正）

この規則は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

国際センター運営委員会規則

平成 14 年 3 月 27 日

規則第 1704 号制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、徳島大学国際センター規則第 10 条第 2 項の規定に基づき、徳島大学国際センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(所掌事項)

第 2 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 徳島大学国際センター（以下「センター」という。）の管理運営の基本方針に関すること。
- (2) センターの予算概算の方針に関すること。
- (3) その他センターの管理運営に関する重要事項

2 運営委員会は、前項各号に掲げる事項のほかセンターの教育、研究及び国際交流に関する重要事項及び徳島大学教授会通則（規則第 1456 号第 3 条）の規定により教授会の権限に属させられた事項を審議する。

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの教授及び准教授
- (3) 各学部（学部に併任された大学院教員を構成員として含む。）から選出された教授各 1 人
- (4) 疾患酵素学研究センター及び疾患ゲノム研究センターから選出された教授各 1 人
- (5) その他運営委員会が必要と認める者

2 前項第 3 号から第 5 号までの委員は、学長が命ずる。

(任期)

第 4 条 前条第 1 項第 3 号から第 5 号までの委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。

ただし、委員に欠員が生じたときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

(会議)

第 6 条 運営委員会は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第7条第3条第1項第3号及び第4号の委員が会議に出席できないときは、代理の者を出席させることができる。

(委員以外の者の出席)

第8条運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(教員選考委員会)

第9条運営委員会は、教員を選考する場合、徳島大学国際センター教員選考委員会（以下「選考委員会」という。）を設ける。

2 選考委員会について必要な事項は、センター長が別に定める。

(専門委員会)

第10条前条に定めるもののほか、運営委員会に、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(庶務)

第11条運営委員会の庶務は、研究国際部国際課において処理する。

(雑則)

第12条この規則に定めるもののほか、運営委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附則

この規則は、平成14年4月1日から施行する。

附則（平成14年12月20日規則第1734号改正）抄

1 この規則は、平成15年1月1日から施行する。

附則（平成16年3月19日規則第1867号改正）

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附則（平成17年3月24日規則第160号改正）

1 この規則は、平成17年3月26日から施行する。

附則（平成18年3月31日規則第123号改正）

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附則（平成18年3月16日規則第71号改正）

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附則（平成20年3月21日規則第89号改正）

この規則は、平成20年4月1日から施行する。

附則（平成20年11月26日規則第28号改正）

- 1 この規則は、平成 20 年 12 月 1 日から施行する。
- 2 この規則の施行日の前日において徳島大学留学生センター運営委員会委員であった者については、この規則の施行日以降も引き続き運営委員会委員として任命するものとし、その任期は、第 4 条の規定にかかわらず、平成 22 年 3 月 31 日までとする

学術協定校一覧 (2009年2月1日現在)

国名	協定校名	
インドネシア	ガジヤマダ大学	
	* ハントゥアー大学	
韓国	* ソウル国立大学校薬学大学	
	* 朝鮮大学校歯科大学	
	慶北大学校	
	韓国海洋大学校	
	* 建陽大学校	
	* 東義大学校大学院	
	* 黒龍江省科学院	
中国	哈爾濱工業大学	
	哈爾濱医科大学	
	武漢大学	
	南通大学	
	* 復旦大学国際交流学院	
	吉林大学	
	西安交通大学	
	北京郵電大学	
	* 大連理工大学ソフトウェア学院	
	* 大連理工大学研究生院	
	同済大学	
	四川大学	
	* 中国医科大学口腔医学院	
	南京大學	
	モンゴル	モンゴル健康科学大学
	アメリカ合衆国	フロリダアトランティック大学
* タフツ大学人間栄養学加齢研究センター		
テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター		
* デューク大学		
* サンノゼ州立大学		
* ノースカロライナ大学チャペルヒル校エシエルマン薬学部		
フランス	* トゥールーズ工科大学	
連合王国	スウォンジ大学	
スイス	バーゼル大学	
ドイツ	* ヴィスバーデン大学応用科学系数学・自然科学・データ処理・環境技術学科	
	ハノーバー医科大学	
エチオピア	ゴンダール大学	
ニュージーランド	オークランド大学	
パキスタン	* パキスタン・イスラム共和カラチ大学国際化学センター	
マレーシア	* マレーシアサインズ大学歯学部	
オーストラリア	モナシュ大学	

*印は部局間協定 (大学間協定校 22 大学、部局間協定校 18 大学)

国際センター人員名簿 (2010年2月1日現在)

国際センター長

細井 和雄 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授

国際センター教員

三隅 友子 教授・副センター長・教育支援部門長
大石 寧子 教授
金 成海 教授・交流部門長
坂田 浩 准教授・企画広報室長
橋本 智 准教授
竹内光恵 国際プランナー

国際センター運営委員会委員

桂 修治 教授 (総合科学部)
荒瀬 誠治 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
羽地 達次 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
際田 弘志 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
木戸口 善行 教授 (大学院ソシオテクノサイエンス研究部)
福井 清 教授 (疾患酵素学研究センター)
片桐 豊雅 教授 (疾患ゲノム研究センター)

協力教員

田中 智行 准教授 (大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)
山西倫太郎 准教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (医学系))
三好 圭子 講師 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (歯学系))
福井裕行 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (薬学系))
村上理一 教授 (大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

国際課職員

課長 岡崎 房述
課長補佐:併任係長 内海 剛
係長 原 雄三
主任 山口 百合
主任 古城 浩子
係員 川人 公美
事務補佐員 尾崎 綾
事務補佐員 佐藤 陽子
事務補佐員 鶴田 典子
事務補佐員 浜上 由香利
事務補佐員 上野 千鶴
事務補佐員 米田 典代
事務補佐員 佐藤 浩子

徳島大学国際センター 紀要第5号 年報第6号

編集発行： 徳島大学国際センター
徳島県徳島市新蔵町2丁目24
徳島大学地域・国際交流プラザ（日亜会館）2階
088-656-7082
<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp>
発行日： 2010年3月31日